

2サムエル記16-18章 「愚かにされた助言」

1A 王への反抗 16

1B サウル家 1-14

2B 父への侮辱 15-23

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

2B 機能する諜報 15-29

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

2B 息子の安否 19-33

本文

サムエル記第二 16 章から学びます。16 章から 18 章は、私たちが前回学んだダビデの祈りに対する、神の応えになります。15 章 31 節にこうありました。「ダビデは、「アヒトフェルがアブシャロムの謀反に荷担している。」という知らせを受けたが、そのとき、ダビデは言った。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」」息子アブシャロムがヘブロンで自らをユダの王であると宣言しました。そして多くのイスラエル人がアブシャロムに付いていきました。その一人が、ダビデの議官であり、友であるアヒトフェルでした。彼は非常に優れた議官で、彼が助言することに従えば、その通りになっていきました。そのことを知っているダビデが、「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と祈ったのです。

人間的には、アヒトフェルがアブシャロムに付いたことで勝利が決定したのと当然でしたが、それを神が覆される、という内容をこれから読みます。

1A 王への反抗 16

そしてもう一つ、ダビデがエルサレムから逃げることによって、誰が真実にダビデに仕えていたのか、彼に忠誠を尽くしていたのかが明らかにされています。ダビデが力を持っている時は、皆が彼にひれ伏していましたが、そうではない時に自分の心の状態が明らかにされます。ダビデがエルサレムから出て行って、動き出したのがかつて王権を持っていたサウル家の者たちです。

1B サウル家 1-14

16:1 ダビデは山の頂から少し下った。見ると、メフィボシェテに仕える若い者ツィバが、王を迎えに来ていた。彼は、鞍を置いた一くびきのろばに、パン二百個、干しぶどう百ふさ、夏のくだもの百個、ぶどう酒一袋を載せていた。16:2 王はツィバに尋ねた。「これらは何のためか。」ツィバは答えた。「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため、パンと夏のくだものは若い者たちが食べるた

め、ぶどう酒は荒野で疲れた者が飲むためです。」16:3 王は言った。「あなたの主人の息子はどこにいるか。」ツィバは王に言った。「今、エルサレムにおられます。あの人は、『きょう、イスラエルの家は、私の父の王国を私に返してくれる。』と書いていました。」16:4 すると王はツィバに言った。「メフィボシェテのものはみな、今、あなたのものだ。」ツィバが言った。「王さま。あなたのご好意にあずかることができますように、伏してお願いいたします。」

ダビデは自分の町からキデロン(ケデロン)の谷を渡り、オリーブ山を上りました。頂から少し下ると、メフィボシェテに仕えるツィバが王を迎えました。覚えていますね、王ダビデがサウル家の者でヨナタンの子に恵みを施したいと言って、連れて来られたのがツィバでした。彼はサウル家の僕でした。ダビデは、サウルの地所をすべてメフィボシェテに返し、メフィボシェテ自身は王と共に食卓に着きます。さらにツィバに対しては、メフィボシェテの子に対して、その地所にある畑を耕して、作物が出来たら、それをメフィボシェテの子の食事にする、と言いつけました。ツィバはそれを受け入れましたが、僕である彼自身にも十五人の息子と十人の僕がいました(以上2サムエル9章)。

ここでツィバが主人メフィボシェテについて言っていることは、中傷です。メフィボシェテは王といっしょに行こうとしていたのですが、ツィバが彼を欺きました(19:26-27)。この若い者ツィバは、自分が豊かな者であるのに、メフィボシェテの下で働くのに満足していなかった、ということです。自分は力を持ち豊かなのに、なぜこの足なえの家に仕えなければいけないのか、という不満があったのでしょう。それで、この政変の動きにおいて、ダビデに良くすることによってメフィボシェテから奪い取ろうとしました。ツィバの前に「若い者」と付いていますね。使徒ペテロが第一の手紙の中で若い者に対して勧めを行なっています。「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。(5:5)」

メフィボシェテは、ダビデに対しても酷いことを行なっています。このような時に共に食事していたメフィボシェテが自分を裏切ったという知らせを聞いたら、どれだけ心が傷つくのか考えもせず自分の利益のためにそんな嘘を言ったのです。そしてダビデ自身、このような状況では理解できるのですが、ツィバの言うことをそのまま受け入れてしまったことは、早まった判断でした。私たちは悪い噂に対して、それに関わらないことが大切です。事実を確認するまで受け入れてはいけません。「歩き回って人を中傷する者は秘密を漏らす。くちびるを開く者とは交わるな。(箴言20:19)」

16:5 ダビデ王がバフリムまで来ると、ちょうど、サウルの家の一族のひとりが、そこから出て来た。その名はシムイといってゲラの子で、盛んにのろいのことばを吐きながら出て来た。

「バフリム」はオリーブ山を上ったところにあるベニヤミン族の地にある村です。

16:6 そしてダビデとダビデ王のすべての家来たちに向かって石を投げつけた。民と勇士たちはみな、王の右左にいた。16:7 シムイはのろってこう言った。「出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。16:8 主がサウルの家すべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王となったおまえに。主はおまえの息子アブシャロムの手で王位を渡した。今、おまえはわざわざに会うのだ。おまえは血まみれの男だから。」

ツィバはメフィボシェテについての中傷をしましたが、シムイはダビデに対して中傷しました。私たちはサムエル記第一、また第二の前半を読んでいて、シムイが言っていることが事実と正反対であることをよく知っています。彼は、今でこそ手を出さなかったその時を敢えて抑えて、サウルを殺すことをしませんでした。また、その將軍アブネルを快く迎えてイスラエルの統一を実現させようとしたし、サウルの子イシュ・ボシェテを殺した者を死刑に処しました。主が、サウルが死ぬようにさせたのでありダビデではありません。

神の主権と選びによってダビデに王権が移りました。けれども、シムイは主が立てられたということを受け入れませんでした。そこで、全て起こっていることをダビデのせいにしたのです。主の恵みの選びを受け入れないということは、自らに災いをもたらします。私たちは、主に仕えている人、主に立てられていることを認め、受け入れていかなければいけません。

16:9 すると、ツェルヤの子アビシャイが王に言った。「この死に犬めが、王さまをのろってよいものですか。行って、あの首をはねさせてください。」16:10 王は言った。「ツェルヤの子らよ。これは私のことで、あなたがたには、かかわりのないことだ。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ。』と言われたからだ。だれが彼に、『おまえはどうしてこういうことをするのだ。』と言えようか。」16:11 ダビデはアビシャイと彼のすべての家来たちに言った。「見よ。私の身から出た私の子さえ、私のいのちをねらっている。今、このベニヤミン人としては、なおさらのことだ。ほうっておきなさい。彼にのろわせなさい。主が彼に命じられたのだから。16:12 たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」

アビシャイら、王を左右で守っている勇士たちは、シムイなど即座に殺すことができました。けれども、ダビデはかつてサウルに対して行ったように、シムイに対しても手を出さないように戒めました。主に裁きを委ねたのです。

ダビデは、一連の出来事を主が自分を懲らしめているものとして捉えています。自分の家から剣が離れないという、ナタンを通して与えられた主の言葉があります。そして事実、アブシャロムが自分の命を狙っているのです。そのような主の導きがあって、サウル家のシムイが罵ることも起こっているのは当然のこと、という見解です。このように、主が今何をしておられるのかを広い視点で眺め、小事を主に委ねて、大切なところに焦点を当てていく視点は必要です。

そしてダビデは、「たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」と言いました。今、自分自身がどのような心でいるのか、それを保つことが必要です。その心の態度が、希望ある将来を生み出します。

16:13 ダビデと彼の部下たちは道を進んで行った。シムイは、山の中腹をダビデと平行して歩きながら、のろったり、石を投げたり、ちりをかけたりしていた。16:14 王も、王とともにいった民もみな、疲れたので、そこでひと息ついた。

ここまでがサウル家の者たちの出方でした。次にアブシャロムたちがエルサレムに到着してからのことになります。

2B 父への侮辱 15-23

16:15 アブシャロムとすべての民、イスラエル人はエルサレムにはいった。アヒトフェルもいっしょであった。16:16 ダビデの友アルキ人フシャイがアブシャロムのところに来たとき、フシャイはアブシャロムに言った。「王さま。ばんざい。王さま。ばんざい。」16:17 アブシャロムはフシャイに言った。「これが、あなたの友への忠誠のあらわれなのか。なぜ、あなたは、あなたの友といっしょに行かなかったのか。」16:18 フシャイはアブシャロムに答えた。「いいえ、主と、この民、イスラエルのすべての人々とが選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。16:19 また、私はだれに仕えるべきでしょう。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなたの父上に仕えたように、あなたにもお仕えいたします。」

ダビデが、「アヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と言った時に、すぐに与えられた神の回答は、フシャイでした。彼がダビデのところに現れて、ダビデに付いていくと言いました。けれどもダビデは、アヒトフェルと同じように助言者としてすぐれていたフシャイを、このようにエルサレムに送り込んだのです。

フシャイは、アブシャロムの心を掴んでいます。アブシャロムのうぬぼれの二つの部分に触れています。一つは、ヤハウェなる方がアブシャロムを選ばれたのだと言っていること。これは神のお墨付きですと太鼓判を押しているのです。もう一つは、「私の友の子に仕えるべきではないか」とアブシャロムがダビデの後継者であり、その地位と権利を持っていることを訴えました。これで、アブシャロムの心を掴んだのです。

16:20 それで、アブシャロムはアヒトフェルに言った。「あなたがたは相談して、われわれはどうしたらよいか、意見を述べなさい。」16:21 アヒトフェルはアブシャロムに言った。「父上が王宮の留守番に残したそばめたちのところにおはいらください。全イスラエルが、あなたは父上に憎まれるようなことをされたと聞いたら、あなたに、くみする者はみな、勇気を出すでしょう。」16:22 こうしてアブシャロムのために屋上に天幕が張られ、アブシャロムは全イスラエルの目の前で、父のそば

めたちのところにはいった。

アヒトフェルの助言は、アブシャロムとダビデの和解を修復不可能にするものでした。王の妻やそばめのところに入るのは、その王権を乗っ取ることを意味する反逆行為でした。ヤコブの長男ルベンが、ヤコブのそばめビルハのところに入ったことを覚えているでしょうか？それゆえに、晩年のヤコブはルベンのことを預言した時に、その長子の権利が取られたことを示唆しています(創世49:4)。しかしアヒトフェルは、ここまで思い切ったことを行なうことで、アブシャロムに与する者たちが勇気を得ることを知っていました。

ここで、ナタンがダビデに告げたこと主の懲らしめが実現します。「主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう。』(2サムエル 12:11-12)」言い換えれば、このことをもってダビデがウリヤに対して行ったことに対する神の懲らしめは、完了したということです。主は、これから先ほどダビデが話したように、彼に幸せをもって報いてくださいます。「主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。(詩篇 103:9-11)」

16:23 当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はみな、ダビデにもアブシャロムにもそのように思われた。

しかし、このような天才的的確な助言を、神は打ち壊してくださいます。

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

17:1 アヒトフェルはさらにアブシャロムに言った。「私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、17:2 彼を襲います。ダビデは疲れて気力を失っているでしょう。私が、彼を恐れさせれば、彼といっしょにいるすべての民は逃げましょう。私は王だけを打ち殺します。17:3 私はすべての民をあなたのもとに連れ戻します。すべての者が帰って来るとき、あなたが求めているのはただひとりだけですから、民はみな、穏やかになるでしょう。」17:4 このことばはアブシャロムとイスラエルの全長老の気に入った。

このアヒトフェルの助言をアブシャロムが採用していたら、確実にダビデは殺されていたことでしょう。確かに先ほど読んだように、ダビデは疲れていました。気力も失っています。

ところで興味深いことに、アヒトフェルの口が滑っています。「王だけを打ち殺します」と言っています。アブシャロムが既にヘブロンで王になっているのに、ダビデを王と呼んでしまっています。そして、このアヒトフェルの助言には、彼の個人的な恨みが見えています。王を打ち殺すのは、私がすると書いています。

私たちは自分の心を見張る必要があります。苦みというのは、どんな理由があるにしても、その根を培っていつてはいけません。それはアヒトフェルのように、殺意にまで発展します。そしてアヒトフェルのように、他の人々を汚していきます。そしてアヒトフェルのように、自分自身を滅ぼします。殺意については、こうイエス様が語られました。「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。(マタイ 5:22)」使徒ヨハネもこう警告しています。「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。(1ヨハネ 3:15)」

そして他の人々を汚していくことについては、ヘブル書の著者はこう言っています。「そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩んだり、これによって多くの人汚されたりすることのないように、(ヘブル 12:15)」そして、自分自身を滅ぼしてしまうことについては、聖霊を悲しませるという言葉で使徒パウロがこう警告しています。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。無慈悲(苦み)、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。(エペソ 4:30-31)」

17:5 しかしアブシャロムは言った。「アルキ人フシャイを呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう。」
17:6 フシャイがアブシャロムのところに来ると、アブシャロムは彼に次のように言った。「アヒトフェルはこのように言ったが、われわれは彼のことに従ってよいものだろうか。もしいけなければ、あなたの意見を述べてみなさい。」17:7 するとフシャイはアブシャロムに言った。「このたびアヒトフェルの立てたはかりごとは良くありません。」17:8 フシャイはさらに言った。「あなたは父上とその部下が戦士であることをご存じです。しかも彼らは、野で子を奪われた雌熊のように気が荒なっています。また、あなたの父上は戦いに慣れた方ですから、民といっしょには夜を過ごさないでしょう。17:9 きっと今、ほら穴か、どこか、そんな所に隠れておられましょう。もし、民のある者が最初に倒れたら、それを聞く者は、『アブシャロムに従う民のうちに打たれた者が出た。』と言うでしょう。17:10 そうなると、たとい、獅子のような心を持つ力ある者でも、気がくじけます。全イスラエルは、あなたの父上が勇士であり、彼に従う者が力ある者であることをよく知っています。17:11 私のはかりごとはこうです。全イスラエルをダンからベエル・シェバに至るまで、海辺の砂のように数多くあなたのところに集めて、あなた自身が戦いに出られることです。17:12 われわれは、彼を見つけたら、その場で彼を攻め、露が地面に降りるように彼を襲い、彼や、共にいるすべての兵士た

ちを、ひとりも生かしておかないのです。17:13 もし彼がさらにどこかの町にはいるなら、全イスラエルでその町に綱をかけ、その町を川まで引きずって行って、そこに一つの石ころも残らないようにしましょう。」

まるでショーのような戦法です。ダンからベエル・シェバ、つまり全イスラエルが出兵します。そしてアブシャロム自身が先頭に立って戦います。人気スターのようにアブシャロムを担ぎ上げて、そして全イスラエルがダビデを倒すのです。アブシャロムの自惚れにフシャイは訴えました。さらにフシャイにはもう一つの思惑がありました。全イスラエルを出兵させ、その軍を編成するにはとても時間がかかります。その間にダビデをヨルダン川の向こう側に動かすことができます。つまり時間稼ぎです。

17:14 アブシャロムとイスラエルの民はみな言った。「アルキ人フシャイのはかりごとは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。」これは主がアブシャロムにわざわざをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。

ここが今日の学びの鍵となる聖句です。アブシャロムの自惚れをくすぐるその言葉を神は用いられました。人がどんなに計画を練っても、主の御心だけが成るのです。アブシャロムの愚かさを用いて、アヒトフェルの賢いはかりごとを打ち壊すことを考えておられました。「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。(箴言 19:21)」ですから、前回私たちが学びましたように、主に委ねるのが優れているのです。自分自身で成し遂げようとするのではなく、主ご自身が成し遂げてくださるように委ねます。「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。(箴言 16:3)」

2B 機能する諜報 15-29

17:15 フシャイは祭司ツアドクとエブヤタルに言った。「アヒトフェルは、アブシャロムとイスラエルの長老たちにこれこれの助言をしたが、私は、これこれの助言をした。17:16 今、急いで人をやり、ダビデに、『今夜は荒野の草原で夜を過ごしてはいけません。ほんとうに、ぜひ、あちらへ渡って行かなければなりません。でないと、王をはじめ、いっしょにいる民全部にわざわざ降りかかるでしょう。』と告げなさい。」

祭司ツアドクとエブヤタルが、エルサレム内部を通達する諜報活動をするようになっていました。それでフシャイが二人にこれからのアブシャロムの動きを伝えます。とにかく、ヨルダン川を越える必要があります。それを急がせています。

17:17 ヨナタンとアヒマアツはエン・ロゲルにとどまっていたが、ひとりの女奴隷が行って彼らに告げ、彼らがダビデ王に告げに行くようになっていた。これは彼らが町にはいるのを見られることのないためであった。

ツァドクの息子がアヒアマツで、エブヤタルの息子がヨナタンです。彼らがダビデに伝達することになっていました。エン・ロゲルは、ダビデの町エルサレムの南にある、キデロンの谷とヒノムの谷が交差するところにある泉ですが、その辺りは人々がたくさん行き交うのであまり人目に付かないという利点がありました。

17:18 ところが、ひとりの若者が彼らを見て、アブシャロムに告げた。そこで彼らふたりは急いで去り、バフリムに住むある人の家に行った。その人の庭に井戸があったので、彼らはその中に降りた。17:19 その人の妻は、おおいを持って来て、井戸の口の上に広げ、その上に麦をまき散らしたので、だれにも知られなかった。17:20 アブシャロムの家来たちが、その女の家に来て言った。「アヒアマツとヨナタンはどこにいるのか。」女は彼らに答えた。「あの人たちは、ここを通り過ぎて川のほうへ行きました。」彼らは、捜したが見つけることができなかったので、エルサレムへ帰った。

バフリムは、あのシミイが出てきた所でしたが、そこにダビデ側につく人がいました。井戸とありますが、昔は貯水槽のようなものも井戸と呼び、必ずしも水が入っている訳ではありません。そこは絶好の場所でした。そして井戸の口は地面と同じ高さにあるので、覆いをつければどこにあるのか分からないのです。

17:21 彼らが去って後、ふたりは井戸から上がって来て、ダビデ王に知らせに行った。彼らはダビデに言った。「さあ、急いで川を渡ってください。アヒトフェルがあなたがたに対してこれこれのはかりごとを立てたからです。」17:22 そこで、ダビデと、ダビデのもとにいたすべての者たちとは出発して、ヨルダン川を渡った。夜明けまでにヨルダン川を渡りきれなかった者はひとりもいなかった。17:23 アヒトフェルは、自分のはかりごとが行なわれないのを見て、ろばに鞍を置き、自分の町の家に帰って行き、家を整理して、首をくくって死に、彼の父の墓に葬られた。

午前礼拝で学びましたように、アヒトフェルはこの時点でアブシャロムが死ぬことさえ予測していたと思います。さらにその先にある自分に対する処罰も見すえていました。それで、殺されるのではなく自ら命を絶ちました。

17:24 ダビデがマハナイムに着いたとき、アブシャロムは、彼とともにいるイスラエルのすべての人々とヨルダン川を渡った。17:25 アブシャロムはアマサをヨアブの代わりに軍団長に任命していた。アマサは、ヨアブの母ツェルヤの妹ナハシュの娘アビガルと結婚したイシュマエル人イテラという人の息子であった。

マハナイムは、ヨルダン川の東、ギルアデの地にあります。かつてサウルの息子イシュ・ボシェテが、そこからイスラエルの王となり、そしてヘブロンで王となったダビデと戦いました。そこに要塞として仕える城があったと考えられます。

そして軍団長ですがダビデにはヨアブが、そしてアブシャロムにはアマサというヨアブの従兄弟が付きました。

17:26 こうして、イスラエルとアブシャロムはギルアデの地に陣を敷いた。17:27 ダビデがマハナイムに来たとき、アモン人でラバの出のナハシュの子ショビと、ロ・デバルの出のアミエルの子マキルと、ログリムの出のギルアデ人バルジライとは、17:28 寝台、鉢、土器、小麦、大麦、小麦粉、炒り麦、そら豆、レンズ豆、炒り麦、17:29 蜂蜜、凝乳、羊、牛酪を、ダビデとその一行の食糧として持って来た。彼らは民が荒野で飢えて疲れ、渴いていると思ったからである。

ダビデを王として認め、このような苦しみの状況の時に助けの手を差し伸べた人物は、初めに驚くことにアモン人です。覚えていますか、ナハシュの子ハヌンは、ダビデに齒向かって戦いました。けれども同じナハシュの別の子ショビは、ダビデを王として仰いでいたのです。ダビデが真実を尽くす姿を彼は受け入れていたのです。そして次は、マキルですが、メフィボシェテがかつて住んでいた家の主がこのマキルです。彼も、メフィボシェテに恵みを施すダビデの姿を知っていました。そして地元の富豪バルジライがいます。

後にダビデはバルジライの子らに恵みを施します。いや、晩年のダビデがソロモンにバルジライの子らを食事の席に連らせなさいと命じます(1列王 2:7)。私たちがキリストに従うとは、苦しみの中にいる人々と一つになる、ということであろうと思われれます。マタイ 25 章には、イエス様が再臨されてから王として君臨される時に、飢えた者、裸の者、卑しめられている者に親切にした者たちに対して、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。(マタイ 25:40)」と言われました。

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

18:1 ダビデは彼とともにいる民を調べて、彼らの上に千人隊長、百人隊長を任命した。

アブシャロムたちがヨルダン川を渡って来ています。ダビデも、自分と共にいる民を編成し、態勢を整えています。

18:2a ダビデは民の三分の一をヨアブの指揮のもとに、三分の一をヨアブの兄弟ツエルヤの子アビシャイの指揮のもとに、三分の一をガテ人イタイの指揮のもとに配置した。

ヨアブとアビシャイはつねにダビデに忠実な指揮官ですが、イタイのことは覚えていますか？ペリシテのガテから来た者で、ダビデがエルサレムから離れる時にこう言い切った男です。「イタイは王に答えて言った。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。(15:21)」さっそく、王に仕え、王を守る

ための戦いをします。

18:2b 王は民に言った。「私自身もあなたがたといっしょに出たい。」18:3 すると民は言った。「あなたが出てはいけません。私たちがどんなに逃げても、彼らは私たちのことは何とも思わないでしょう。たとえ私たちの半分が死んでも、彼らは私たちのことは心に留めないでしょう。しかし、あなたは私たちの一万人に当たります。今、あなたは町にいて私たちを助けてくださるほうが良いのです。」18:4 王は彼らに言った。「あなたがたが良いと思うことを、私はしよう。」王は門のそばに立ち、すべての民は、百人、千人ごとに出て行った。

ダビデはかつて、アモン人との戦いで自分自身が出ていかず、バテ・シェバの裸を見ることになりました。その罪意識があるのかもしれませんが、自ら出ていくと言いました。けれども、一万人に値するというはその通りでした。彼らの助言を聞きます。

18:5 王はヨアブ、アビシャイ、イタイに命じて言った。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。」民はみな、王が隊長たち全部にアブシャロムのことについて命じているのを聞いていた。

これは、客観的に見れば決してできないことです。アブシャロムは反逆罪で死刑にならなければいけません。けれども、親心もあり、また自分の負い目もあります。

18:6 こうして、民はイスラエルを迎え撃つために戦場へ出て行った。戦いはエフライムの森で行なわれた。18:7 イスラエルの民はそこでダビデの家来たちに打ち負かされ、その日、その場所で多くの打たれた者が出、二万人が倒れた。18:8 戦いはこの地一帯に散り広がり、この日、剣で倒された者よりも、密林で行き倒れになった者のほうが多かった。

この「エフライムの森」とは、エフライム族のことではなく、ギルアデ地方にある森のことです。今のヨルダンに行けば、密生森林地帯はそこにはありません。聖書時代と今は大きく変わりました。けれども、主はこの密林によって彼らを行き倒れにするということをやさしました。他の箇所に出てくる戦いにおいても、実際に剣で倒れるよりも、天から降ってくる雹であるとか、同士討ちであるとか、主ご自身が戦ってくださっている姿を見ることができます。

18:9 アブシャロムはダビデの家来たちに出会った。アブシャロムは驃馬に乗っていたが、驃馬が大きな樫の木の茂った枝の下を通ったとき、アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かり、彼は宙づりになった。彼が乗っていた驃馬はそのまま行った。

アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かりました。まず、彼が驃馬に乗っているというのがおかしいです。馬でなければ戦うことができません。彼が単なるショーのために動いていたことがわかり

ます。そして、彼の頭が木に引っかかっていた、とありますが、これはもちろんあの長い髪の毛のせいです。彼の誇っていた髪の毛が、彼を殺すきっかけを作りました。

18:10 ひとりの男がそれを見て、ヨアブに告げて言った。「今、アブシャロムが檜の木に引っ掛かっているのを見て来ました。」18:11 ヨアブはこれを告げた者に言った。「いったい、おまえはそれを見ていて、なぜその場で地に打ち落とさなかったのか。私がおまえに銀十枚と帯一本を与えたのに。」18:12 その男はヨアブに言った。「たとい、私の手に銀千枚をいただいても、王のお子さまに手は下せません。王は私たちの聞いているところで、あなたとアビシャイとイタイとに、『若者アブシャロムに手を出すな。』と言って、お命じになっているからです。18:13 もし、私が自分のいのちをかけて、命令にそむいていたとしても、王には、何も隠すことはできません。そのとき、あなたは知らぬ顔をなさるでしょう。」18:14 ヨアブは、「こうしておまえとぐずぐずしてはおられない。」と言って、手に三本の槍を取り、まだ檜の木の中真中に引っ掛かったまま生きていたアブシャロムの心臓を突き通した。18:15 ヨアブの道具持ちの十人の若者たちも、アブシャロムを取り巻いて彼を打ち殺した。18:16 ヨアブが角笛を吹き鳴らすと、民はイスラエルを追うのをやめて帰って来た。ヨアブが民を引き止めたからである。

ヨアブというのは、複雑な人物です。彼は、ダビデに猛烈な忠誠を持っている男でした。ダビデの益のため、またイスラエルの国益のためには、どんな犠牲も厭わない人物でした。しかし、彼はダビデの命令をこのようにいとも簡単に無視するような不従順な男でした。ダビデがアブシャロムを罰しないことは、ダビデのためにも、またイスラエルのためにもよくありません。正義は執行されなければいけないからです。そこで、ダビデはヨアブには口を出すことができません。けれども、彼の無慈悲と冷酷さはダビデの持っている柔和さとはあまりにもかけ離れていました。ずっと後に、ダビデの死後にヨアブがソロモンによって罰せられます。

ところでアブシャロムですが、彼は十人のダビデのそばめを凌辱しましたが、ここで十人のヨアブの道具持ちによって殺されています。自分の行ったことの報いを受けているのです。

18:17 人々はアブシャロムを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に非常に大きな石くれの山を積み上げた。イスラエルはみな、おのおの自分の天幕に逃げ帰っていた。

反逆者に対する見せしめとして、イスラエル人はこのように石を積み上げることをしました。

18:18 アブシャロムは存命中、王の谷に自分のために一本の柱を立てていた。「私の名を覚えてくれる息子が私にはいないから。」と考えていたからである。彼はその柱に自分の名をつけていた。それは、アブシャロムの記念碑と呼ばれた。今日もそうである。

王の谷は、キデロンの谷の南にあります。今、「アブシャロムの墓」と呼ばれているものがありま

すが、それは紀元後に立てられたもので本物ではありません。

彼は哀れな人です。自分がこれだけ派手なことを行なっているが、自分を覚えてくれる人はないだろうと思っていました。息子がいない、と言っていますが、彼には三人いたはず(15:27)。息子が早死にしてしまったのか、あるいは息子でさえ自分を覚えてはいてくれないだろう、と言っているのです。本当に可哀想な人です。

2B 息子の安否 19-33

18:19 ツアドクの子アヒマアツは言った。「私は王のところへ走って行って、主が敵の手から王を救って王のために正しいさばきをされたと知らせたいのですが。」18:20 ヨアブは彼に言った。「きょう、あなたは知らせるのではない。ほかの日に知らせなさい。きょうは、知らせないがよい。王子が死んだのだから。」18:21 ヨアブはクシュ人に言った。「行って、あなたの見たことを王に告げなさい。」クシュ人はヨアブに礼をして、走り去った。18:22 ツアドクの子アヒマアツは再びヨアブに言った。「どんなことがあっても、やはり私もクシュ人のあとを追って走って行きたいのです。」ヨアブは言った。「わが子よ。なぜ、あなたは走って行きたいのか。知らせに対して、何のほうびも得られないのに。」18:23 「しかしどんなことがあっても、走って行きたいのです。」ヨアブは「走って行きなさい。」と言った。アヒマアツは低地への道を走って行き、クシュ人を追い越した。

アヒマアツは、ついに主が王に救いを与えてくださったことを非常に喜んでいますが。こんな喜ばしい知らせを伝えない訳にはいけないと思いました。けれどもヨアブはよく知っています。アブシャロムが死んだのだから、これはダビデにとって悲報であることを知っていました。それで少し遅らせて知らせた方が良くと思いました。かつ、クシュ人という異邦人を遣わすことによって、伝達者がアブシャロムを殺したことについて嫌疑が問われ万一ダビデが死刑にしても害がないように、と思ったのでしょう。

ところがアヒマアツはどうしても伝えに行きたいと言っています。王子が死んだのだから、という意味合いがまだ分かっていない様子です。そして、アヒマアツは森から離れてヨルダン川の流れている溪谷のところを走っていきました。ギルアデは非常に高低の起伏の激しいところですから、低地を走ったほうが早いのです。

18:24 ダビデは二つの門の間にすわっていた。見張りが城壁の門の屋根に上り、目を上げて見ていると、ただひとりで走って来る男がいた。

当時の多くの城の門は、外門と内門の二つがありました。壁が二重になっていて、その間に部屋がありました。その上に屋根があつて、そこに見張り塔がありました。

18:25 見張りが王に大声で告げると、王は言った。「ただひとりなら、吉報だろう。」その者がしだ

いに近づいて来たとき、18:26 見張りは、もうひとりの男が走って来るのを見た。見張りは門衛に叫んで言った。「ひとりで走って来る男がいます。」すると王は言った。「それも吉報を持って来ているのだ。」18:27 見張りは言った。「先に走っているのは、どうやらツァドクの子アヒマアツのように見えます。」王は言った。「あれは良い男だ。良い知らせを持って来るだろう。」18:28 アヒマアツは大声で王に「ごきげんはいかがでしょう。」と言って、地にひれ伏して、王に礼をした。彼は言った。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主は、王さまに手向かった者どもを、引き渡してくださいました。」18:29 王が、「若者アブシャロムは無事か。」と聞くと、アヒマアツは答えた。「ヨアブが王の家来のこのしもべを遣わすとき、私は、何か大騒ぎの起こるのを見ましたが、何があったのか知りません。」

王の関心事は戦いに勝つことではありませんでした。アブシャロムの安否だけでした。ところが、アヒマアツは早く伝えにきたのですが、その伝言には肝心の内容が欠けています。私たちがキリストを伝える時に、キリストをよく知って伝える必要がありますね。

18:30 王は言った。「わきへ退いて、そこに立っていなさい。」そこで彼はわきに退いて立っていた。18:31 するとクシュ人がはいて来て言った。「王さまにお知らせいたします。主は、きょう、あなたに立ち向かうすべての者の手から、あなたを救って、あなたのために正しいさばきをされました。」18:32 王はクシュ人に言った。「若者アブシャロムは無事か。」クシュ人は答えた。「王さまの敵、あなたに立ち向かって害を加えようとする者はすべて、あの若者のようになりますように。」18:33 すると王は身震いして、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。「わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。」

自分のしたことの過ち、また息子への愛が絡まって、ダビデがむせび泣いています。反逆の息子であっても、その罪を自分自身が負えばよかったのにと嘆いています。これが父の愛です。そして、父はキリストにあって、私たち反逆する者たちのために私たちの罪を負ってくださいました。

今回は、この悲しみから立ち上がるダビデから話が始まります。

2サムエル記16-18章 「愚かにされた助言」

1A 王への反抗 16

1B サウル家 1-14

2B 父への侮辱 15-23

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

2B 機能する諜報 15-29

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

2B 息子の安否 19-33

本文

サムエル記第二 16 章から学びます。16 章から 18 章は、私たちが前回学んだダビデの祈りに対する、神の応えになります。15 章 31 節にこうありました。「ダビデは、「アヒトフェルがアブシャロムの謀反に荷担している。」という知らせを受けたが、そのとき、ダビデは言った。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」」息子アブシャロムがヘブロンで自らをユダの王であると宣言しました。そして多くのイスラエル人がアブシャロムに付いていきました。その一人が、ダビデの議官であり、友であるアヒトフェルでした。彼は非常に優れた議官で、彼が助言することに従えば、その通りになっていきました。そのことを知っているダビデが、「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と祈ったのです。

人間的には、アヒトフェルがアブシャロムに付いたことで勝利が決定したのと当然でしたが、それを神が覆される、という内容をこれから読みます。

1A 王への反抗 16

そしてもう一つ、ダビデがエルサレムから逃げることによって、誰が真実にダビデに仕えていたのか、彼に忠誠を尽くしていたのかが明らかにされています。ダビデが力を持っている時は、皆が彼にひれ伏していましたが、そうではない時に自分の心の状態が明らかにされます。ダビデがエルサレムから出て行って、動き出したのがかつて王権を持っていたサウル家の者たちです。

1B サウル家 1-14

16:1 ダビデは山の頂から少し下った。見ると、メフィボシェテに仕える若い者ツィバが、王を迎えに来ていた。彼は、鞍を置いた一くびきのろばに、パン二百個、干しぶどう百ふさ、夏のくだもの百個、ぶどう酒一袋を載せていた。16:2 王はツィバに尋ねた。「これらは何のためか。」ツィバは答えた。「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため、パンと夏のくだものは若い者たちが食べるた

め、ぶどう酒は荒野で疲れた者が飲むためです。」16:3 王は言った。「あなたの主人の息子はどこにいるか。」ツィバは王に言った。「今、エルサレムにおられます。あの人は、『きょう、イスラエルの家は、私の父の王国を私に返してくれる。』と書いていました。」16:4 すると王はツィバに言った。「メフィボシェテのものはみな、今、あなたのものだ。」ツィバが言った。「王さま。あなたのご好意にあずかることができますように、伏してお願いいたします。」

ダビデは自分の町からキデロン(ケデロン)の谷を渡り、オリーブ山を上りました。頂から少し下ると、メフィボシェテに仕えるツィバが王を迎えました。覚えていますね、王ダビデがサウル家の者でヨナタンの子に恵みを施したいと言って、連れて来られたのがツィバでした。彼はサウル家の僕でした。ダビデは、サウルの地所をすべてメフィボシェテに返し、メフィボシェテ自身は王と共に食卓に着きます。さらにツィバに対しては、メフィボシェテの子に対して、その地所にある畑を耕して、作物が出来たら、それをメフィボシェテの子の食事にする、と言いつけました。ツィバはそれを受け入れましたが、僕である彼自身にも十五人の息子と十人の僕がいました(以上2サムエル9章)。

ここでツィバが主人メフィボシェテについて言っていることは、中傷です。メフィボシェテは王といっしょに行こうとしていたのですが、ツィバが彼を欺きました(19:26-27)。この若い者ツィバは、自分が豊かな者であるのに、メフィボシェテの下で働くのに満足していなかった、ということです。自分は力を持ち豊かなのに、なぜこの足なえの家に仕えなければいけないのか、という不満があったのでしょう。それで、この政変の動きにおいて、ダビデに良くすることによってメフィボシェテから奪い取ろうとしました。ツィバの前に「若い者」と付いていますね。使徒ペテロが第一の手紙の中で若い者に対して勧めを行なっています。「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。(5:5)」

メフィボシェテは、ダビデに対しても酷いことを行なっています。このような時に共に食事していたメフィボシェテが自分を裏切ったという知らせを聞いたら、どれだけ心が傷つくのか考えもせず自分の利益のためにそんな嘘を言ったのです。そしてダビデ自身、このような状況では理解できるのですが、ツィバの言うことをそのまま受け入れてしまったことは、早まった判断でした。私たちは悪い噂に対して、それに関わらないことが大切です。事実を確認するまで受け入れてはいけません。「歩き回って人を中傷する者は秘密を漏らす。くちびるを開く者とは交わるな。(箴言20:19)」

16:5 ダビデ王がバフリムまで来ると、ちょうど、サウルの家の一族のひとりが、そこから出て来た。その名はシムイといってゲラの子で、盛んにのろいのことばを吐きながら出て来た。

「バフリム」はオリーブ山を上ったところにあるベニヤミン族の地にある村です。

16:6 そしてダビデとダビデ王のすべての家来たちに向かって石を投げつけた。民と勇士たちはみな、王の右左にいた。16:7 シムイはのろってこう言った。「出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。16:8 主がサウルの家すべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王となったおまえに。主はおまえの息子アブシャロムの手で王位を渡した。今、おまえはわざわざに会うのだ。おまえは血まみれの男だから。」

ツィバはメフィボシェテについての中傷をしましたが、シムイはダビデに対して中傷しました。私たちはサムエル記第一、また第二の前半を読んでいて、シムイが言っていることが事実と正反対であることをよく知っています。彼は、今でこそ手を出さなかったその時を敢えて抑えて、サウルを殺すことをしませんでした。また、その將軍アブネルを快く迎えてイスラエルの統一を実現させようとしたし、サウルの息子イシュ・ボシェテを殺した者を死刑に処しました。主が、サウルが死ぬようにさせたのでありダビデではありません。

神の主権と選びによってダビデに王権が移りました。けれども、シムイは主が立てられたということを受け入れませんでした。そこで、全て起こっていることをダビデのせいにしたのです。主の恵みの選びを受け入れないということは、自らに災いをもたらします。私たちは、主に仕えている人、主に立てられていることを認め、受け入れていかなければいけません。

16:9 すると、ツェルヤの子アビシャイが王に言った。「この死に犬めが、王さまをのろってよいものですか。行って、あの首をはねさせてください。」16:10 王は言った。「ツェルヤの子らよ。これは私のことで、あなたがたには、かかわりのないことだ。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ。』と言われたからだ。だれが彼に、『おまえはどうしてこういうことをするのだ。』と言えようか。」16:11 ダビデはアビシャイと彼のすべての家来たちに言った。「見よ。私の身から出た私の子さえ、私のいのちをねらっている。今、このベニヤミン人としては、なおさらのことだ。ほうっておきなさい。彼にのろわせなさい。主が彼に命じられたのだから。16:12 たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」

アビシャイら、王を左右で守っている勇士たちは、シムイなど即座に殺すことができました。けれども、ダビデはかつてサウルに対して行ったように、シムイに対しても手を出さないように戒めました。主に裁きを委ねたのです。

ダビデは、一連の出来事を主が自分を懲らしめているものとして捉えています。自分の家から剣が離れないという、ナタンを通して与えられた主の言葉があります。そして事実、アブシャロムが自分の命を狙っているのです。そのような主の導きがあって、サウル家のシムイが罵ることも起こっているのは当然のこと、という見解です。このように、主が今何をしておられているのかを広い視点で眺め、小事を主に委ねて、大切なところに焦点を当てていく視点は必要です。

そしてダビデは、「たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」と言いました。今、自分自身がどのような心でいるのか、それを保つことが必要です。その心の態度が、希望ある将来を生み出します。

16:13 ダビデと彼の部下たちは道を進んで行った。シムイは、山の中腹をダビデと平行して歩きながら、のろったり、石を投げたり、ちりをかけたりしていた。16:14 王も、王とともにいった民もみな、疲れたので、そこでひと息ついた。

ここまでがサウル家の者たちの出方でした。次にアブシャロムたちがエルサレムに到着してからのことになります。

2B 父への侮辱 15-23

16:15 アブシャロムとすべての民、イスラエル人はエルサレムにはいった。アヒトフェルもいっしょであった。16:16 ダビデの友アルキ人フシャイがアブシャロムのところに来たとき、フシャイはアブシャロムに言った。「王さま。ばんざい。王さま。ばんざい。」16:17 アブシャロムはフシャイに言った。「これが、あなたの友への忠誠のあらわれなのか。なぜ、あなたは、あなたの友といっしょに行かなかったのか。」16:18 フシャイはアブシャロムに答えた。「いいえ、主と、この民、イスラエルのすべての人々とが選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。16:19 また、私はだれに仕えるべきでしょう。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなたの父上に仕えたように、あなたにもお仕えいたします。」

ダビデが、「アヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と言った時に、すぐに与えられた神の回答は、フシャイでした。彼がダビデのところに現れて、ダビデに付いていくと言いました。けれどもダビデは、アヒトフェルと同じように助言者としてすぐれていたフシャイを、このようにエルサレムに送り込んだのです。

フシャイは、アブシャロムの心を掴んでいます。アブシャロムのうぬぼれの二つの部分に触れています。一つは、ヤハウェなる方がアブシャロムを選ばれたのだと言っていること。これは神のお墨付きですと太鼓判を押しているのです。もう一つは、「私の友の子に仕えるべきではないか」とアブシャロムがダビデの後継者であり、その地位と権利を持っていることを訴えました。これで、アブシャロムの心を掴んだのです。

16:20 それで、アブシャロムはアヒトフェルに言った。「あなたがたは相談して、われわれはどうしたらよいか、意見を述べなさい。」16:21 アヒトフェルはアブシャロムに言った。「父上が王宮の留守番に残したそばめたちのところにおはいらください。全イスラエルが、あなたは父上に憎まれるようなことをされたと聞いたら、あなたに、くみする者はみな、勇気を出すでしょう。」16:22 こうしてアブシャロムのために屋上に天幕が張られ、アブシャロムは全イスラエルの目の前で、父のそば

めたちのところにはいった。

アヒトフェルの助言は、アブシャロムとダビデの和解を修復不可能にするものでした。王の妻やそばめのところに入るのは、その王権を乗っ取ることを意味する反逆行為でした。ヤコブの長男ルベンが、ヤコブのそばめビルハのところに入ったことを覚えているでしょうか？それゆえに、晩年のヤコブはルベンのことを預言した時に、その長子の権利が取られたことを示唆しています(創世49:4)。しかしアヒトフェルは、ここまで思い切ったことを行なうことで、アブシャロムに与する者たちが勇気を得ることを知っていました。

ここで、ナタンがダビデに告げたこと主の懲らしめが実現します。「主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう。』(2サムエル 12:11-12)」言い換えれば、このことをもってダビデがウリヤに対して行ったことに対する神の懲らしめは、完了したということです。主は、これから先ほどダビデが話したように、彼に幸せをもって報いてくださいます。「主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。(詩篇 103:9-11)」

16:23 当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はみな、ダビデにもアブシャロムにもそのように思われた。

しかし、このような天才的的確な助言を、神は打ち壊してくださいます。

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

17:1 アヒトフェルはさらにアブシャロムに言った。「私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、17:2 彼を襲います。ダビデは疲れて気力を失っているでしょう。私が、彼を恐れさせれば、彼といっしょにいるすべての民は逃げましょう。私は王だけを打ち殺します。17:3 私はすべての民をあなたのもとに連れ戻します。すべての者が帰って来るとき、あなたが求めているのはただひとりだけですから、民はみな、穏やかになるでしょう。」17:4 このことばはアブシャロムとイスラエルの全長老の気に入った。

このアヒトフェルの助言をアブシャロムが採用していたら、確実にダビデは殺されていたことでしょう。確かに先ほど読んだように、ダビデは疲れていました。気力も失っています。

ところで興味深いことに、アヒトフェルの口が滑っています。「王だけを打ち殺します」と言っています。アブシャロムが既にヘブロンで王になっているのに、ダビデを王と呼んでしまっています。そして、このアヒトフェルの助言には、彼の個人的な恨みが見えています。王を打ち殺すのは、私がすると書いています。

私たちは自分の心を見張る必要があります。苦みというのは、どんな理由があるにしても、その根を培っていつてはいけません。それはアヒトフェルのように、殺意にまで発展します。そしてアヒトフェルのように、他の人々を汚していきます。そしてアヒトフェルのように、自分自身を滅ぼします。殺意については、こうイエス様が語られました。「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。(マタイ 5:22)」使徒ヨハネもこう警告しています。「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。(1ヨハネ 3:15)」

そして他の人々を汚していくことについては、ヘブル書の著者はこう言っています。「そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩んだり、これによって多くの人汚されたりすることのないように、(ヘブル 12:15)」そして、自分自身を滅ぼしてしまうことについては、聖霊を悲しませるという言葉で使徒パウロがこう警告しています。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。無慈悲(苦み)、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。(エペソ 4:30-31)」

17:5 しかしアブシャロムは言った。「アルキ人フシャイを呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう。」
17:6 フシャイがアブシャロムのところに来ると、アブシャロムは彼に次のように言った。「アヒトフェルはこのように言ったが、われわれは彼のことに従ってよいものだろうか。もしいけなければ、あなたの意見を述べてみなさい。」17:7 するとフシャイはアブシャロムに言った。「このたびアヒトフェルの立てたはかりごとは良くありません。」17:8 フシャイはさらに言った。「あなたは父上とその部下が戦士であることをご存じです。しかも彼らは、野で子を奪われた雌熊のように気が荒なっています。また、あなたの父上は戦いに慣れた方ですから、民といっしょには夜を過ごさないでしょう。17:9 きっと今、ほら穴か、どこか、そんな所に隠れておられましょう。もし、民のある者が最初に倒れたら、それを聞く者は、『アブシャロムに従う民のうちに打たれた者が出た。』と言うでしょう。17:10 そうなると、たとい、獅子のような心を持つ力ある者でも、気がくじけます。全イスラエルは、あなたの父上が勇士であり、彼に従う者が力ある者であることをよく知っています。17:11 私のはかりごとはこうです。全イスラエルをダンからベエル・シェバに至るまで、海辺の砂のように数多くあなたのところに集めて、あなた自身が戦いに出られることです。17:12 われわれは、彼を見つけたら、その場で彼を攻め、露が地面に降りるように彼を襲い、彼や、共にいるすべての兵士た

ちを、ひとりも生かしておかないのです。17:13 もし彼がさらにどこかの町にはいるなら、全イスラエルでその町に綱をかけ、その町を川まで引きずって行って、そこに一つの石ころも残らないようにしましょう。」

まるでショーのような戦法です。ダンからベエル・シェバ、つまり全イスラエルが出兵します。そしてアブシャロム自身が先頭に立って戦います。人気スターのようにアブシャロムを担ぎ上げて、そして全イスラエルがダビデを倒すのです。アブシャロムの自惚れにフシャイは訴えました。さらにフシャイにはもう一つの思惑がありました。全イスラエルを出兵させ、その軍を編成するにはとても時間がかかります。その間にダビデをヨルダン川の向こう側に動かすことができます。つまり時間稼ぎです。

17:14 アブシャロムとイスラエルの民はみな言った。「アルキ人フシャイのはかりごとは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。」これは主がアブシャロムにわざわざをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。

ここが今日の学びの鍵となる聖句です。アブシャロムの自惚れをくすぐるその言葉を神は用いました。人がどんなに計画を練っても、主の御心だけが成るのです。アブシャロムの愚かさを用いて、アヒトフェルの賢いはかりごとを打ち壊すことを考えておられました。「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。(箴言 19:21)」ですから、前回私たちが学びましたように、主に委ねるのが優れているのです。自分自身で成し遂げようとするのではなく、主ご自身が成し遂げてくださるように委ねます。「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。(箴言 16:3)」

2B 機能する諜報 15-29

17:15 フシャイは祭司ツアドクとエブヤタルに言った。「アヒトフェルは、アブシャロムとイスラエルの長老たちにこれこれの助言をしたが、私は、これこれの助言をした。17:16 今、急いで人をやり、ダビデに、『今夜は荒野の草原で夜を過ごしてはいけません。ほんとうに、ぜひ、あちらへ渡って行かなければなりません。でないと、王をはじめ、いっしょにいる民全部にわざわざ降りかかるでしょう。』と告げなさい。」

祭司ツアドクとエブヤタルが、エルサレム内部を通達する諜報活動をするようになっていました。それでフシャイが二人にこれからのアブシャロムの動きを伝えます。とにかく、ヨルダン川を越える必要があります。それを急がせています。

17:17 ヨナタンとアヒマアツはエン・ロゲルにとどまっていたが、ひとりの女奴隷が行って彼らに告げ、彼らがダビデ王に告げに行くようになっていた。これは彼らが町にはいるのを見られることのないためであった。

ツァドクの息子がアヒアマツで、エブヤタルの息子がヨナタンです。彼らがダビデに伝達することになっていました。エン・ロゲルは、ダビデの町エルサレムの南にある、キデロンの谷とヒノムの谷が交差するところにある泉ですが、その辺りは人々がたくさん行き交うのであまり人目に付かないという利点がありました。

17:18 ところが、ひとりの若者が彼らを見て、アブシャロムに告げた。そこで彼らふたりは急いで去り、バフリムに住むある人の家に行った。その人の庭に井戸があったので、彼らはその中に降りた。17:19 その人の妻は、おおいを持って来て、井戸の口の上に広げ、その上に麦をまき散らしたので、だれにも知られなかった。17:20 アブシャロムの家来たちが、その女の家に来て言った。「アヒアマツとヨナタンはどこにいるのか。」女は彼らに答えた。「あの人たちは、ここを通り過ぎて川のほうへ行きました。」彼らは、捜したが見つけることができなかったので、エルサレムへ帰った。

バフリムは、あのシミイが出てきた所でしたが、そこにダビデ側につく人がいました。井戸とありますが、昔は貯水槽のようなものも井戸と呼び、必ずしも水が入っている訳ではありません。そこは絶好の場所でした。そして井戸の口は地面と同じ高さにあるので、覆いをつければどこにあるのか分からないのです。

17:21 彼らが去って後、ふたりは井戸から上がって来て、ダビデ王に知らせに行った。彼らはダビデに言った。「さあ、急いで川を渡ってください。アヒトフェルがあなたがたに対してこれこれのはかりごとを立てたからです。」17:22 そこで、ダビデと、ダビデのもとにいたすべての者たちとは出発して、ヨルダン川を渡った。夜明けまでにヨルダン川を渡りきれなかった者はひとりもいなかった。17:23 アヒトフェルは、自分のはかりごとが行なわれないのを見て、ろばに鞍を置き、自分の町の家に帰って行き、家を整理して、首をくくって死に、彼の父の墓に葬られた。

午前礼拝で学びましたように、アヒトフェルはこの時点でアブシャロムが死ぬことさえ予測していたと思います。さらにその先にある自分に対する処罰も見すえていました。それで、殺されるのではなく自ら命を絶ちました。

17:24 ダビデがマハナイムに着いたとき、アブシャロムは、彼とともにいるイスラエルのすべての人々とヨルダン川を渡った。17:25 アブシャロムはアマサをヨアブの代わりに軍団長に任命していた。アマサは、ヨアブの母ツェルヤの妹ナハシュの娘アビガルと結婚したイシュマエル人イテラという人の息子であった。

マハナイムは、ヨルダン川の東、ギルアデの地にあります。かつてサウルの息子イシュ・ボシェテが、そこからイスラエルの王となり、そしてヘブロンで王となったダビデと戦いました。そこに要塞として仕える城があったと考えられます。

そして軍団長ですがダビデにはヨアブが、そしてアブシャロムにはアマサというヨアブの従兄弟が付きました。

17:26 こうして、イスラエルとアブシャロムはギルアデの地に陣を敷いた。17:27 ダビデがマハナイムに来たとき、アモン人でラバの出のナハシュの子ショビと、ロ・デバルの出のアミエルの子マキルと、ログリムの出のギルアデ人バルジライとは、17:28 寝台、鉢、土器、小麦、大麦、小麦粉、炒り麦、そら豆、レンズ豆、炒り麦、17:29 蜂蜜、凝乳、羊、牛酪を、ダビデとその一行の食糧として持って来た。彼らは民が荒野で飢えて疲れ、渴いていると思ったからである。

ダビデを王として認め、このような苦しみの状況の時に助けの手を差し伸べた人物は、初めに驚くことにアモン人です。覚えていますか、ナハシュの子ハヌンは、ダビデに齒向かって戦いました。けれども同じナハシュの別の子ショビは、ダビデを王として仰いでいたのです。ダビデが真実を尽くす姿を彼は受け入れていたのです。そして次は、マキルですが、メフィボシェテがかつて住んでいた家の主がこのマキルです。彼も、メフィボシェテに恵みを施すダビデの姿を知っていました。そして地元の富豪バルジライがいます。

後にダビデはバルジライの子らに恵みを施します。いや、晩年のダビデがソロモンにバルジライの子らを食事の席に連らせなさいと命じます(1列王 2:7)。私たちがキリストに従うとは、苦しみの中にいる人々と一つになる、ということであろうと思われれます。マタイ 25 章には、イエス様が再臨されてから王として君臨される時に、飢えた者、裸の者、卑しめられている者に親切にした者たちに対して、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。(マタイ 25:40)」と言われました。

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

18:1 ダビデは彼とともにいる民を調べて、彼らの上に千人隊長、百人隊長を任命した。

アブシャロムたちがヨルダン川を渡って来ています。ダビデも、自分と共にいる民を編成し、態勢を整えています。

18:2a ダビデは民の三分の一をヨアブの指揮のもとに、三分の一をヨアブの兄弟ツエルヤの子アビシャイの指揮のもとに、三分の一をガテ人イタイの指揮のもとに配置した。

ヨアブとアビシャイはつねにダビデに忠実な指揮官ですが、イタイのことは覚えていますか？ペリシテのガテから来た者で、ダビデがエルサレムから離れる時にこう言い切った男です。「イタイは王に答えて言った。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。(15:21)」さっそく、王に仕え、王を守る

ための戦いをします。

18:2b 王は民に言った。「私自身もあなたがたといっしょに出たい。」18:3 すると民は言った。「あなたが出てはいけません。私たちがどんなに逃げても、彼らは私たちのことは何とも思わないでしょう。たとえ私たちの半分が死んでも、彼らは私たちのことは心に留めないでしょう。しかし、あなたは私たちの一万人に当たります。今、あなたは町にいて私たちを助けてくださるほうが良いのです。」18:4 王は彼らに言った。「あなたがたが良いと思うことを、私はしよう。」王は門のそばに立ち、すべての民は、百人、千人ごとに出て行った。

ダビデはかつて、アモン人との戦いで自分自身が出ていかず、バテ・シェバの裸を見ることになりました。その罪意識があるのかもしれませんが、自ら出ていくと言いました。けれども、一万人に値するというはその通りでした。彼らの助言を聞きます。

18:5 王はヨアブ、アビシャイ、イタイに命じて言った。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。」民はみな、王が隊長たち全部にアブシャロムのことについて命じているのを聞いていた。

これは、客観的に見れば決してできないことです。アブシャロムは反逆罪で死刑にならなければいけません。けれども、親心もあり、また自分の負い目もあります。

18:6 こうして、民はイスラエルを迎え撃つために戦場へ出て行った。戦いはエフライムの森で行なわれた。18:7 イスラエルの民はそこでダビデの家来たちに打ち負かされ、その日、その場所で多くの打たれた者が出、二万人が倒れた。18:8 戦いはこの地一帯に散り広がり、この日、剣で倒された者よりも、密林で行き倒れになった者のほうが多かった。

この「エフライムの森」とは、エフライム族のことではなく、ギルアデ地方にある森のことです。今のヨルダンに行けば、密生森林地帯はそこにはありません。聖書時代と今は大きく変わりました。けれども、主はこの密林によって彼らを行き倒れにするということをやさしました。他の箇所に出てくる戦いにおいても、実際に剣で倒れるよりも、天から降ってくる雹であるとか、同士討ちであるとか、主ご自身が戦ってくださっている姿を見ることができます。

18:9 アブシャロムはダビデの家来たちに出会った。アブシャロムは驃馬に乗っていたが、驃馬が大きな樫の木の茂った枝の下を通ったとき、アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かり、彼は宙づりになった。彼が乗っていた驃馬はそのまま行った。

アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かりました。まず、彼が驃馬に乗っているというのがおかしいです。馬でなければ戦うことができません。彼が単なるショーのために動いていたことがわかり

ます。そして、彼の頭が木に引っかかっていた、とありますが、これはもちろんあの長い髪の毛のせいです。彼の誇っていた髪の毛が、彼を殺すきっかけを作りました。

18:10 ひとりの男がそれを見て、ヨアブに告げて言った。「今、アブシャロムが樅の木に引っ掛かっているのを見て来ました。」18:11 ヨアブはこれを告げた者に言った。「いったい、おまえはそれを見ていて、なぜその場で地に打ち落とさなかったのか。私がおまえに銀十枚と帯一本を与えたのに。」18:12 その男はヨアブに言った。「たとい、私の手に銀千枚をいただいても、王のお子さまに手は下せません。王は私たちの聞いているところで、あなたとアビシャイとイタイとに、『若者アブシャロムに手を出すな。』と言って、お命じになっているからです。18:13 もし、私が自分のいのちをかけて、命令にそむいていたとしても、王には、何も隠すことはできません。そのとき、あなたは知らぬ顔をなさるでしょう。」18:14 ヨアブは、「こうしておまえとぐずぐずしてはおられない。」と言って、手に三本の槍を取り、まだ樅の木の中真中に引っ掛かったまま生きていたアブシャロムの心臓を突き通した。18:15 ヨアブの道具持ちの十人の若者たちも、アブシャロムを取り巻いて彼を打ち殺した。18:16 ヨアブが角笛を吹き鳴らすと、民はイスラエルを追うのをやめて帰って来た。ヨアブが民を引き止めたからである。

ヨアブというのは、複雑な人物です。彼は、ダビデに猛烈な忠誠を持っている男でした。ダビデの益のため、またイスラエルの国益のためには、どんな犠牲も厭わない人物でした。しかし、彼はダビデの命令をこのようにいとも簡単に無視するような不従順な男でした。ダビデがアブシャロムを罰しないことは、ダビデのためにも、またイスラエルのためにもよくありません。正義は執行されなければいけないからです。そこで、ダビデはヨアブには口を出すことができません。けれども、彼の無慈悲と冷酷さはダビデの持っている柔和さとはあまりにもかけ離れていました。ずっと後に、ダビデの死後にヨアブがソロモンによって罰せられます。

ところでアブシャロムですが、彼は十人のダビデのそばめを凌辱しましたが、ここで十人のヨアブの道具持ちによって殺されています。自分の行ったことの報いを受けているのです。

18:17 人々はアブシャロムを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に非常に大きな石くれの山を積み上げた。イスラエルはみな、おのおの自分の天幕に逃げ帰っていた。

反逆者に対する見せしめとして、イスラエル人はこのように石を積み上げることをしました。

18:18 アブシャロムは存命中、王の谷に自分のために一本の柱を立てていた。「私の名を覚えてくれる息子が私にはいないから。」と考えていたからである。彼はその柱に自分の名をつけていた。それは、アブシャロムの記念碑と呼ばれた。今日もそうである。

王の谷は、キデロンの谷の南にあります。今、「アブシャロムの墓」と呼ばれているものがありま

すが、それは紀元後に立てられたもので本物ではありません。

彼は哀れな人です。自分がこれだけ派手なことを行なっているが、自分を覚えてくれる人はないだろうと思っていました。息子がいない、と言っていますが、彼には三人いたはず(15:27)。息子が早死にしてしまったのか、あるいは息子でさえ自分を覚えてはいてくれないだろう、と言っているのです。本当に可哀想な人です。

2B 息子の安否 19-33

18:19 ツアドクの子アヒマアツは言った。「私は王のところへ走って行って、主が敵の手から王を救って王のために正しいさばきをされたと知らせたいのですが。」18:20 ヨアブは彼に言った。「きょう、あなたは知らせるのではない。ほかの日に知らせなさい。きょうは、知らせないがよい。王子が死んだのだから。」18:21 ヨアブはクシュ人に言った。「行って、あなたの見たことを王に告げなさい。」クシュ人はヨアブに礼をして、走り去った。18:22 ツアドクの子アヒマアツは再びヨアブに言った。「どんなことがあっても、やはり私もクシュ人のあとを追って走って行きたいのです。」ヨアブは言った。「わが子よ。なぜ、あなたは走って行きたいのか。知らせに対して、何のほうびも得られないのに。」18:23 「しかしどんなことがあっても、走って行きたいのです。」ヨアブは「走って行きなさい。」と言った。アヒマアツは低地への道を走って行き、クシュ人を追い越した。

アヒマアツは、ついに主が王に救いを与えてくださったことを非常に喜んでいますが。こんな喜ばしい知らせを伝えない訳にはいけないと思いました。けれどもヨアブはよく知っています。アブシャロムが死んだのだから、これはダビデにとって悲報であることを知っていました。それで少し遅らせて知らせた方が良くと思いました。かつ、クシュ人という異邦人を遣わすことによって、伝達者がアブシャロムを殺したことについて嫌疑が問われ万一ダビデが死刑にしても害がないように、と思ったのでしょう。

ところがアヒマアツはどうしても伝えに行きたいと言っています。王子が死んだのだから、という意味合いがまだ分かっていない様子です。そして、アヒマアツは森から離れてヨルダン川の流れている溪谷のところを走っていきました。ギルアデは非常に高低の起伏の激しいところですから、低地を走ったほうが早いのです。

18:24 ダビデは二つの門の間にすわっていた。見張りが城壁の門の屋根に上り、目を上げて見ていると、ただひとりで走って来る男がいた。

当時の多くの城の門は、外門と内門の二つがありました。壁が二重になっていて、その間に部屋がありました。その上に屋根があつて、そこに見張り塔がありました。

18:25 見張りが王に大声で告げると、王は言った。「ただひとりなら、吉報だろう。」その者がしだ

いに近づいて来たとき、18:26 見張りは、もうひとりの男が走って来るのを見た。見張りは門衛に叫んで言った。「ひとりで走って来る男がいます。」すると王は言った。「それも吉報を持って来ているのだ。」18:27 見張りは言った。「先に走っているのは、どうやらツァドクの子アヒマアツのように見えます。」王は言った。「あれは良い男だ。良い知らせを持って来るだろう。」18:28 アヒマアツは大声で王に「ごきげんはいかがでしょうか。」と言って、地にひれ伏して、王に礼をした。彼は言った。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主は、王さまに手向かった者どもを、引き渡してくださいました。」18:29 王が、「若者アブシャロムは無事か。」と聞くと、アヒマアツは答えた。「ヨアブが王の家来のこのしもべを遣わすとき、私は、何か大騒ぎの起こるのを見ましたが、何があったのか知りません。」

王の関心事は戦いに勝つことではありませんでした。アブシャロムの安否だけでした。ところが、アヒマアツは早く伝えにきたのですが、その伝言には肝心の内容が欠けています。私たちがキリストを伝える時に、キリストをよく知って伝える必要がありますね。

18:30 王は言った。「わきへ退いて、そこに立っていなさい。」そこで彼はわきに退いて立っていた。18:31 するとクシュ人がはいて来て言った。「王さまにお知らせいたします。主は、きょう、あなたに立ち向かうすべての者の手から、あなたを救って、あなたのために正しいさばきをされました。」18:32 王はクシュ人に言った。「若者アブシャロムは無事か。」クシュ人は答えた。「王さまの敵、あなたに立ち向かって害を加えようとする者はすべて、あの若者のようになりますように。」18:33 すると王は身震いして、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。「わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。」

自分のしたことの過ち、また息子への愛が絡まって、ダビデがむせび泣いています。反逆の息子であっても、その罪を自分自身が負えばよかったのにと嘆いています。これが父の愛です。そして、父はキリストにあって、私たち反逆する者たちのために私たちの罪を負ってくださいました。

今回は、この悲しみから立ち上がるダビデから話が始まります。

2サムエル記16-18章 「愚かにされた助言」

1A 王への反抗 16

1B サウル家 1-14

2B 父への侮辱 15-23

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

2B 機能する諜報 15-29

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

2B 息子の安否 19-33

本文

サムエル記第二 16 章から学びます。16 章から 18 章は、私たちが前回学んだダビデの祈りに対する、神の応えになります。15 章 31 節にこうありました。「ダビデは、「アヒトフェルがアブシャロムの謀反に荷担している。」という知らせを受けたが、そのとき、ダビデは言った。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」」息子アブシャロムがヘブロンで自らをユダの王であると宣言しました。そして多くのイスラエル人がアブシャロムに付いていきました。その一人が、ダビデの議官であり、友であるアヒトフェルでした。彼は非常に優れた議官で、彼が助言することに従えば、その通りになっていきました。そのことを知っているダビデが、「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と祈ったのです。

人間的には、アヒトフェルがアブシャロムに付いたことで勝利が決定したのと当然でしたが、それを神が覆される、という内容をこれから読みます。

1A 王への反抗 16

そしてもう一つ、ダビデがエルサレムから逃げることによって、誰が真実にダビデに仕えていたのか、彼に忠誠を尽くしていたのかが明らかにされています。ダビデが力を持っている時は、皆が彼にひれ伏していましたが、そうではない時に自分の心の状態が明らかにされます。ダビデがエルサレムから出て行って、動き出したのがかつて王権を持っていたサウル家の者たちです。

1B サウル家 1-14

16:1 ダビデは山の頂から少し下った。見ると、メフィボシェテに仕える若い者ツィバが、王を迎えに来ていた。彼は、鞍を置いた一くびきのろばに、パン二百個、干しぶどう百ふさ、夏のくだもの百個、ぶどう酒一袋を載せていた。16:2 王はツィバに尋ねた。「これらは何のためか。」ツィバは答えた。「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため、パンと夏のくだものは若い者たちが食べるた

め、ぶどう酒は荒野で疲れた者が飲むためです。」16:3 王は言った。「あなたの主人の息子はどこにいるか。」ツィバは王に言った。「今、エルサレムにおられます。あの人は、『きょう、イスラエルの家は、私の父の王国を私に返してくれる。』と書いていました。」16:4 すると王はツィバに言った。「メフィボシェテのものはみな、今、あなたのものだ。」ツィバが言った。「王さま。あなたのご好意にあずかることができますように、伏してお願いいたします。」

ダビデは自分の町からキデロン(ケデロン)の谷を渡り、オリーブ山を上りました。頂から少し下ると、メフィボシェテに仕えるツィバが王を迎えました。覚えていますね、王ダビデがサウル家の者でヨナタンの子に恵みを施したいと言って、連れて来られたのがツィバでした。彼はサウル家の僕でした。ダビデは、サウルの地所をすべてメフィボシェテに返し、メフィボシェテ自身は王と共に食卓に着きます。さらにツィバに対しては、メフィボシェテの子に対して、その地所にある畑を耕して、作物が出来たら、それをメフィボシェテの子の食事にする、と言いつけました。ツィバはそれを受け入れましたが、僕である彼自身にも十五人の息子と十人の僕がいました(以上2サムエル9章)。

ここでツィバが主人メフィボシェテについて言っていることは、中傷です。メフィボシェテは王といっしょに行こうとしていたのですが、ツィバが彼を欺きました(19:26-27)。この若い者ツィバは、自分が豊かな者であるのに、メフィボシェテの下で働くのに満足していなかった、ということです。自分は力を持ち豊かなのに、なぜこの足なえの家に仕えなければいけないのか、という不満があったのでしょう。それで、この政変の動きにおいて、ダビデに良くすることによってメフィボシェテから奪い取ろうとしました。ツィバの前に「若い者」と付いていますね。使徒ペテロが第一の手紙の中で若い者に対して勧めを行なっています。「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。(5:5)」

メフィボシェテは、ダビデに対しても酷いことを行なっています。このような時に共に食事していたメフィボシェテが自分を裏切ったという知らせを聞いたら、どれだけ心が傷つくのか考えもせず自分の利益のためにそんな嘘を言ったのです。そしてダビデ自身、このような状況では理解できるのですが、ツィバの言うことをそのまま受け入れてしまったことは、早まった判断でした。私たちは悪い噂に対して、それに関わらないことが大切です。事実を確認するまで受け入れてはいけません。「歩き回って人を中傷する者は秘密を漏らす。くちびるを開く者とは交わるな。(箴言20:19)」

16:5 ダビデ王がバフリムまで来ると、ちょうど、サウルの家の一族のひとりが、そこから出て来た。その名はシムイといってゲラの子で、盛んにのろいのことばを吐きながら出て来た。

「バフリム」はオリーブ山を上ったところにあるベニヤミン族の地にある村です。

16:6 そしてダビデとダビデ王のすべての家来たちに向かって石を投げつけた。民と勇士たちはみな、王の右左にいた。16:7 シムイはのろってこう言った。「出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。16:8 主がサウルの家すべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王となったおまえに。主はおまえの息子アブシャロムの手で王位を渡した。今、おまえはわざわざに会うのだ。おまえは血まみれの男だから。」

ツィバはメフィボシェテについての中傷をしましたが、シムイはダビデに対して中傷しました。私たちはサムエル記第一、また第二の前半を読んでいて、シムイが言っていることが事実と正反対であることをよく知っています。彼は、今でこそ手を出さなかったその時を敢えて抑えて、サウルを殺すことをしませんでした。また、その將軍アブネルを快く迎えてイスラエルの統一を実現させようとしたし、サウルの息子イシュ・ボシェテを殺した者を死刑に処しました。主が、サウルが死ぬようにさせたのでありダビデではありません。

神の主権と選びによってダビデに王権が移りました。けれども、シムイは主が立てられたということを受け入れませんでした。そこで、全て起こっていることをダビデのせいにしたのです。主の恵みの選びを受け入れないということは、自らに災いをもたらします。私たちは、主に仕えている人、主に立てられていることを認め、受け入れていかなければいけません。

16:9 すると、ツェルヤの子アビシャイが王に言った。「この死に犬めが、王さまをのろってよいものですか。行って、あの首をはねさせてください。」16:10 王は言った。「ツェルヤの子らよ。これは私のことで、あなたがたには、かかわりのないことだ。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ。』と言われたからだ。だれが彼に、『おまえはどうしてこういうことをするのだ。』と言えようか。」16:11 ダビデはアビシャイと彼のすべての家来たちに言った。「見よ。私の身から出た私の子さえ、私のいのちをねらっている。今、このベニヤミン人としては、なおさらのことだ。ほうっておきなさい。彼にのろわせなさい。主が彼に命じられたのだから。16:12 たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」

アビシャイら、王を左右で守っている勇士たちは、シムイなど即座に殺すことができました。けれども、ダビデはかつてサウルに対して行ったように、シムイに対しても手を出さないように戒めました。主に裁きを委ねたのです。

ダビデは、一連の出来事を主が自分を懲らしめているものとして捉えています。自分の家から剣が離れないという、ナタンを通して与えられた主の言葉があります。そして事実、アブシャロムが自分の命を狙っているのです。そのような主の導きがあって、サウル家のシムイが罵ることも起こっているのは当然のこと、という見解です。このように、主が今何をしておられているのかを広い視点で眺め、小事を主に委ねて、大切なところに焦点を当てていく視点は必要です。

そしてダビデは、「たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」と言いました。今、自分自身がどのような心でいるのか、それを保つことが必要です。その心の態度が、希望ある将来を生み出します。

16:13 ダビデと彼の部下たちは道を進んで行った。シムイは、山の中腹をダビデと平行して歩きながら、のろったり、石を投げたり、ちりをかけたりしていた。16:14 王も、王とともにいった民もみな、疲れたので、そこでひと息ついた。

ここまでがサウル家の者たちの出方でした。次にアブシャロムたちがエルサレムに到着してからのことになります。

2B 父への侮辱 15-23

16:15 アブシャロムとすべての民、イスラエル人はエルサレムにはいった。アヒトフェルもいっしょであった。16:16 ダビデの友アルキ人フシャイがアブシャロムのところに来たとき、フシャイはアブシャロムに言った。「王さま。ばんざい。王さま。ばんざい。」16:17 アブシャロムはフシャイに言った。「これが、あなたの友への忠誠のあらわれなのか。なぜ、あなたは、あなたの友といっしょに行かなかったのか。」16:18 フシャイはアブシャロムに答えた。「いいえ、主と、この民、イスラエルのすべての人々とが選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。16:19 また、私はだれに仕えるべきでしょう。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなたの父上に仕えたように、あなたにもお仕えいたします。」

ダビデが、「アヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と言った時に、すぐに与えられた神の回答は、フシャイでした。彼がダビデのところに現れて、ダビデに付いていくと言いました。けれどもダビデは、アヒトフェルと同じように助言者としてすぐれていたフシャイを、このようにエルサレムに送り込んだのです。

フシャイは、アブシャロムの心を掴んでいます。アブシャロムのうぬぼれの二つの部分に触れています。一つは、ヤハウェなる方がアブシャロムを選ばれたのだと言っていること。これは神のお墨付きですと太鼓判を押しているのです。もう一つは、「私の友の子に仕えるべきではないか」とアブシャロムがダビデの後継者であり、その地位と権利を持っていることを訴えました。これで、アブシャロムの心を掴んだのです。

16:20 それで、アブシャロムはアヒトフェルに言った。「あなたがたは相談して、われわれはどうしたらよいか、意見を述べなさい。」16:21 アヒトフェルはアブシャロムに言った。「父上が王宮の留守番に残したそばめたちのところにおはいらください。全イスラエルが、あなたは父上に憎まれるようなことをされたと聞いたら、あなたに、くみする者はみな、勇気を出すでしょう。」16:22 こうしてアブシャロムのために屋上に天幕が張られ、アブシャロムは全イスラエルの目の前で、父のそば

めたちのところにはいった。

アヒトフェルの助言は、アブシャロムとダビデの和解を修復不可能にするものでした。王の妻やそばめのところに入るのは、その王権を乗っ取ることを意味する反逆行為でした。ヤコブの長男ルベンが、ヤコブのそばめビルハのところに入ったことを覚えているでしょうか？それゆえに、晩年のヤコブはルベンのことを預言した時に、その長子の権利が取られたことを示唆しています(創世49:4)。しかしアヒトフェルは、ここまで思い切ったことを行なうことで、アブシャロムに与する者たちが勇気を得ることを知っていました。

ここで、ナタンがダビデに告げたこと主の懲らしめが実現します。「主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう。』(2サムエル 12:11-12)」言い換えれば、このことをもってダビデがウリヤに対して行ったことに対する神の懲らしめは、完了したということです。主は、これから先ほどダビデが話したように、彼に幸せをもって報いてくださいます。「主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。(詩篇 103:9-11)」

16:23 当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はみな、ダビデにもアブシャロムにもそのように思われた。

しかし、このような天才的的確な助言を、神は打ち壊してくださいます。

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

17:1 アヒトフェルはさらにアブシャロムに言った。「私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、17:2 彼を襲います。ダビデは疲れて気力を失っているでしょう。私が、彼を恐れさせれば、彼といっしょにいるすべての民は逃げましょう。私は王だけを打ち殺します。17:3 私はすべての民をあなたのもとに連れ戻します。すべての者が帰って来るとき、あなたが求めているのはただひとりだけですから、民はみな、穏やかになるでしょう。」17:4 このことばはアブシャロムとイスラエルの全長老の気に入った。

このアヒトフェルの助言をアブシャロムが採用していたら、確実にダビデは殺されていたことでしょう。確かに先ほど読んだように、ダビデは疲れていました。気力も失っています。

ところで興味深いことに、アヒトフェルの口が滑っています。「王だけを打ち殺します」と言っています。アブシャロムが既にヘブロンで王になっているのに、ダビデを王と呼んでしまっています。そして、このアヒトフェルの助言には、彼の個人的な恨みが見えています。王を打ち殺すのは、私がすると書いています。

私たちは自分の心を見張る必要があります。苦みというのは、どんな理由があるにしても、その根を培っていつてはいけません。それはアヒトフェルのように、殺意にまで発展します。そしてアヒトフェルのように、他の人々を汚していきます。そしてアヒトフェルのように、自分自身を滅ぼします。殺意については、こうイエス様が語られました。「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。(マタイ 5:22)」使徒ヨハネもこう警告しています。「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。(1ヨハネ 3:15)」

そして他の人々を汚していくことについては、ヘブル書の著者はこう言っています。「そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩んだり、これによって多くの人汚されたりすることのないように、(ヘブル 12:15)」そして、自分自身を滅ぼしてしまうことについては、聖霊を悲しませるという言葉で使徒パウロがこう警告しています。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。無慈悲(苦み)、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。(エペソ 4:30-31)」

17:5 しかしアブシャロムは言った。「アルキ人フシャイを呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう。」
17:6 フシャイがアブシャロムのところに来ると、アブシャロムは彼に次のように言った。「アヒトフェルはこのように言ったが、われわれは彼のことに従ってよいものだろうか。もしいけなければ、あなたの意見を述べてみなさい。」17:7 するとフシャイはアブシャロムに言った。「このたびアヒトフェルの立てたはかりごとは良くありません。」17:8 フシャイはさらに言った。「あなたは父上とその部下が戦士であることをご存じです。しかも彼らは、野で子を奪われた雌熊のように気が荒なっています。また、あなたの父上は戦いに慣れた方ですから、民といっしょには夜を過ごさないでしょう。17:9 きっと今、ほら穴か、どこか、そんな所に隠れておられましょう。もし、民のある者が最初に倒れたら、それを聞く者は、『アブシャロムに従う民のうちに打たれた者が出た。』と言うでしょう。17:10 そうなると、たとい、獅子のような心を持つ力ある者でも、気がくじけます。全イスラエルは、あなたの父上が勇士であり、彼に従う者が力ある者であることをよく知っています。17:11 私のはかりごとはこうです。全イスラエルをダンからベエル・シェバに至るまで、海辺の砂のように数多くあなたのところに集めて、あなた自身が戦いに出られることです。17:12 われわれは、彼を見つけたら、その場で彼を攻め、露が地面に降りるように彼を襲い、彼や、共にいるすべての兵士た

ちを、ひとりも生かしておかないのです。17:13 もし彼がさらにどこかの町にはいるなら、全イスラエルでその町に綱をかけ、その町を川まで引きずって行って、そこに一つの石ころも残らないようにしましょう。」

まるでショーのような戦法です。ダンからベエル・シェバ、つまり全イスラエルが出兵します。そしてアブシャロム自身が先頭に立って戦います。人気スターのようにアブシャロムを担ぎ上げて、そして全イスラエルがダビデを倒すのです。アブシャロムの自惚れにフシャイは訴えました。さらにフシャイにはもう一つの思惑がありました。全イスラエルを出兵させ、その軍を編成するにはとても時間がかかります。その間にダビデをヨルダン川の向こう側に動かすことができます。つまり時間稼ぎです。

17:14 アブシャロムとイスラエルの民はみな言った。「アルキ人フシャイのはかりごとは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。」これは主がアブシャロムにわざわいをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。

ここが今日の学びの鍵となる聖句です。アブシャロムの自惚れをくすぐるその言葉を神は用いました。人がどんなに計画を練っても、主の御心だけが成るのです。アブシャロムの愚かさを用いて、アヒトフェルの賢いはかりごとを打ち壊すことを考えておられました。「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。(箴言 19:21)」ですから、前回私たちが学びましたように、主に委ねるのが優れているのです。自分自身で成し遂げようとするのではなく、主ご自身が成し遂げてくださるように委ねます。「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。(箴言 16:3)」

2B 機能する諜報 15-29

17:15 フシャイは祭司ツアドクとエブヤタルに言った。「アヒトフェルは、アブシャロムとイスラエルの長老たちにこれこれの助言をしたが、私は、これこれの助言をした。17:16 今、急いで人をやり、ダビデに、『今夜は荒野の草原で夜を過ごしてはいけません。ほんとうに、ぜひ、あちらへ渡って行かなければなりません。でないと、王をはじめ、いっしょにいる民全部にわざわいが降りかかるでしょう。』と告げなさい。」

祭司ツアドクとエブヤタルが、エルサレム内部を通達する諜報活動をするようになっていました。それでフシャイが二人にこれからのアブシャロムの動きを伝えます。とにかく、ヨルダン川を越える必要があります。それを急がせています。

17:17 ヨナタンとアヒマアツはエン・ロゲルにとどまっていたが、ひとりの女奴隷が行って彼らに告げ、彼らがダビデ王に告げに行くようになっていた。これは彼らが町にはいるのを見られることのないためであった。

ツァドクの息子がアヒアマツで、エブヤタルの息子がヨナタンです。彼らがダビデに伝達することになっていました。エン・ロゲルは、ダビデの町エルサレムの南にある、キデロンの谷とヒノムの谷が交差するところにある泉ですが、その辺りは人々がたくさん行き交うのであまり人目に付かないという利点がありました。

17:18 ところが、ひとりの若者が彼らを見て、アブシャロムに告げた。そこで彼らふたりは急いで去り、バフリムに住むある人の家に行った。その人の庭に井戸があったので、彼らはその中に降りた。17:19 その人の妻は、おおいを持って来て、井戸の口の上に広げ、その上に麦をまき散らしたので、だれにも知られなかった。17:20 アブシャロムの家来たちが、その女の家に来て言った。「アヒアマツとヨナタンはどこにいるのか。」女は彼らに答えた。「あの人たちは、ここを通り過ぎて川のほうへ行きました。」彼らは、捜したが見つけることができなかったので、エルサレムへ帰った。

バフリムは、あのシムイが出てきた所でしたが、そこにダビデ側につく人がいました。井戸とありますが、昔は貯水槽のようなものも井戸と呼び、必ずしも水が入っている訳ではありません。そこは絶好の場所でした。そして井戸の口は地面と同じ高さにあるので、覆いをつければどこにあるのか分からないのです。

17:21 彼らが去って後、ふたりは井戸から上がって来て、ダビデ王に知らせに行った。彼らはダビデに言った。「さあ、急いで川を渡ってください。アヒトフェルがあなたがたに対してこれこれのはかりごとを立てたからです。」17:22 そこで、ダビデと、ダビデのもとにいたすべての者たちとは出発して、ヨルダン川を渡った。夜明けまでにヨルダン川を渡りきれなかった者はひとりもいなかった。17:23 アヒトフェルは、自分のはかりごとが行なわれないのを見て、ろばに鞍を置き、自分の町の家に帰って行き、家を整理して、首をくくって死に、彼の父の墓に葬られた。

午前礼拝で学びましたように、アヒトフェルはこの時点でアブシャロムが死ぬことさえ予測していたと思います。さらにその先にある自分に対する処罰も見すえていました。それで、殺されるのではなく自ら命を絶ちました。

17:24 ダビデがマハナイムに着いたとき、アブシャロムは、彼とともにいるイスラエルのすべての人々とヨルダン川を渡った。17:25 アブシャロムはアマサをヨアブの代わりに軍団長に任命していた。アマサは、ヨアブの母ツェルヤの妹ナハシュの娘アビガルと結婚したイシュマエル人イテラという人の息子であった。

マハナイムは、ヨルダン川の東、ギルアデの地にあります。かつてサウルの息子イシュ・ボシェテが、そこからイスラエルの王となり、そしてヘブロンで王となったダビデと戦いました。そこに要塞として仕える城があったと考えられます。

そして軍団長ですがダビデにはヨアブが、そしてアブシャロムにはアマサというヨアブの従兄弟が付きました。

17:26 こうして、イスラエルとアブシャロムはギルアデの地に陣を敷いた。17:27 ダビデがマハナイムに来たとき、アモン人でラバの出のナハシュの子ショビと、ロ・デバルの出のアミエルの子マキルと、ログリムの出のギルアデ人バルジライとは、17:28 寝台、鉢、土器、小麦、大麦、小麦粉、炒り麦、そら豆、レンズ豆、炒り麦、17:29 蜂蜜、凝乳、羊、牛酪を、ダビデとその一行の食糧として持って来た。彼らは民が荒野で飢えて疲れ、渴いていると思ったからである。

ダビデを王として認め、このような苦しみの状況の時に助けの手を差し伸べた人物は、初めに驚くことにアモン人です。覚えていますか、ナハシュの子ハヌンは、ダビデに齒向かって戦いました。けれども同じナハシュの別の子ショビは、ダビデを王として仰いでいたのです。ダビデが真実を尽くす姿を彼は受け入れていたのです。そして次は、マキルですが、メフィボシェテがかつて住んでいた家の主がこのマキルです。彼も、メフィボシェテに恵みを施すダビデの姿を知っていました。そして地元の富豪バルジライがいます。

後にダビデはバルジライの子らに恵みを施します。いや、晩年のダビデがソロモンにバルジライの子らを食事の席に連らせなさいと命じます(1列王 2:7)。私たちがキリストに従うとは、苦しみの中にいる人々と一つになる、ということであろうと思われれます。マタイ 25 章には、イエス様が再臨されてから王として君臨される時に、飢えた者、裸の者、卑しめられている者に親切にした者たちに対して、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。(マタイ 25:40)」と言われました。

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

18:1 ダビデは彼とともにいる民を調べて、彼らの上に千人隊長、百人隊長を任命した。

アブシャロムたちがヨルダン川を渡って来ています。ダビデも、自分と共にいる民を編成し、態勢を整えています。

18:2a ダビデは民の三分の一をヨアブの指揮のもとに、三分の一をヨアブの兄弟ツエルヤの子アビシャイの指揮のもとに、三分の一をガテ人イタイの指揮のもとに配置した。

ヨアブとアビシャイはつねにダビデに忠実な指揮官ですが、イタイのことは覚えていますか？ペリシテのガテから来た者で、ダビデがエルサレムから離れる時にこう言い切った男です。「イタイは王に答えて言った。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。(15:21)」さっそく、王に仕え、王を守る

ための戦いをします。

18:2b 王は民に言った。「私自身もあなたがたといっしょに出たい。」18:3 すると民は言った。「あなたが出てはいけません。私たちがどんなに逃げても、彼らは私たちのことは何とも思わないでしょう。たとえ私たちの半分が死んでも、彼らは私たちのことは心に留めないでしょう。しかし、あなたは私たちの一万人に当たります。今、あなたは町にいて私たちを助けてくださるほうが良いのです。」18:4 王は彼らに言った。「あなたがたが良いと思うことを、私はしよう。」王は門のそばに立ち、すべての民は、百人、千人ごとに出て行った。

ダビデはかつて、アモン人との戦いで自分自身が出ていかず、バテ・シェバの裸を見ることになりました。その罪意識があるのかもしれませんが、自ら出ていくと言いました。けれども、一万人に値するというはその通りでした。彼らの助言を聞きます。

18:5 王はヨアブ、アビシャイ、イタイに命じて言った。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。」民はみな、王が隊長たち全部にアブシャロムのことについて命じているのを聞いていた。

これは、客観的に見れば決してできないことです。アブシャロムは反逆罪で死刑にならなければいけません。けれども、親心もあり、また自分の負い目もあります。

18:6 こうして、民はイスラエルを迎え撃つために戦場へ出て行った。戦いはエフライムの森で行なわれた。18:7 イスラエルの民はそこでダビデの家来たちに打ち負かされ、その日、その場所で多くの打たれた者が出、二万人が倒れた。18:8 戦いはこの地一帯に散り広がり、この日、剣で倒された者よりも、密林で行き倒れになった者のほうが多かった。

この「エフライムの森」とは、エフライム族のことではなく、ギルアデ地方にある森のことです。今のヨルダンに行けば、密生森林地帯はそこにはありません。聖書時代と今は大きく変わりました。けれども、主はこの密林によって彼らを行き倒れにするということをやさしました。他の箇所に出てくる戦いにおいても、実際に剣で倒れるよりも、天から降ってくる雹であるとか、同士討ちであるとか、主ご自身が戦ってくださっている姿を見ることができます。

18:9 アブシャロムはダビデの家来たちに出会った。アブシャロムは驃馬に乗っていたが、驃馬が大きな樫の木の茂った枝の下を通ったとき、アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かり、彼は宙づりになった。彼が乗っていた驃馬はそのまま行った。

アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かりました。まず、彼が驃馬に乗っているというのがおかしいです。馬でなければ戦うことができません。彼が単なるショーのために動いていたことがわかり

ます。そして、彼の頭が木に引っかかっていた、とありますが、これはもちろんあの長い髪の毛のせいです。彼の誇っていた髪の毛が、彼を殺すきっかけを作りました。

18:10 ひとりの男がそれを見て、ヨアブに告げて言った。「今、アブシャロムが樅の木に引っ掛かっているのを見て来ました。」18:11 ヨアブはこれを告げた者に言った。「いったい、おまえはそれを見ていて、なぜその場で地に打ち落とさなかったのか。私がおまえに銀十枚と帯一本を与えたのに。」18:12 その男はヨアブに言った。「たとい、私の手に銀千枚をいただいても、王のお子さまに手は下せません。王は私たちの聞いているところで、あなたとアビシャイとイタイとに、『若者アブシャロムに手を出すな。』と言って、お命じになっているからです。18:13 もし、私が自分のいのちをかけて、命令にそむいていたとしても、王には、何も隠すことはできません。そのとき、あなたは知らぬ顔をなさるでしょう。」18:14 ヨアブは、「こうしておまえとぐずぐずしてはおられない。」と言って、手に三本の槍を取り、まだ樅の木の中真中に引っ掛かったまま生きていたアブシャロムの心臓を突き通した。18:15 ヨアブの道具持ちの十人の若者たちも、アブシャロムを取り巻いて彼を打ち殺した。18:16 ヨアブが角笛を吹き鳴らすと、民はイスラエルを追うのをやめて帰って来た。ヨアブが民を引き止めたからである。

ヨアブというのは、複雑な人物です。彼は、ダビデに猛烈な忠誠を持っている男でした。ダビデの益のため、またイスラエルの国益のためには、どんな犠牲も厭わない人物でした。しかし、彼はダビデの命令をこのようにいとも簡単に無視するような不従順な男でした。ダビデがアブシャロムを罰しないことは、ダビデのためにも、またイスラエルのためにもよくありません。正義は執行されなければいけないからです。そこで、ダビデはヨアブには口を出すことができません。けれども、彼の無慈悲と冷酷さはダビデの持っている柔和さとはあまりにもかけ離れていました。ずっと後に、ダビデの死後にヨアブがソロモンによって罰せられます。

ところでアブシャロムですが、彼は十人のダビデのそばめを凌辱しましたが、ここで十人のヨアブの道具持ちによって殺されています。自分の行ったことの報いを受けているのです。

18:17 人々はアブシャロムを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に非常に大きな石くれの山を積み上げた。イスラエルはみな、おのおの自分の天幕に逃げ帰っていた。

反逆者に対する見せしめとして、イスラエル人はこのように石を積み上げることをしました。

18:18 アブシャロムは存命中、王の谷に自分のために一本の柱を立てていた。「私の名を覚えてくれる息子が私にはいないから。」と考えていたからである。彼はその柱に自分の名をつけていた。それは、アブシャロムの記念碑と呼ばれた。今日もそうである。

王の谷は、キデロンの谷の南にあります。今、「アブシャロムの墓」と呼ばれているものがありま

すが、それは紀元後に立てられたもので本物ではありません。

彼は哀れな人です。自分がこれだけ派手なことを行なっているが、自分を覚えてくれる人はないだろうと思っていました。息子がいない、と言っていますが、彼には三人いたはず(15:27)。息子が早死にしてしまったのか、あるいは息子でさえ自分を覚えてはいてくれないだろう、と言っているのです。本当に可哀想な人です。

2B 息子の安否 19-33

18:19 ツアドクの子アヒマアツは言った。「私は王のところへ走って行って、主が敵の手から王を救って王のために正しいさばきをされたと知らせたいのですが。」18:20 ヨアブは彼に言った。「きょう、あなたは知らせるのではない。ほかの日に知らせなさい。きょうは、知らせないがよい。王子が死んだのだから。」18:21 ヨアブはクシュ人に言った。「行って、あなたの見たことを王に告げなさい。」クシュ人はヨアブに礼をして、走り去った。18:22 ツアドクの子アヒマアツは再びヨアブに言った。「どんなことがあっても、やはり私もクシュ人のあとを追って走って行きたいのです。」ヨアブは言った。「わが子よ。なぜ、あなたは走って行きたいのか。知らせに対して、何のほうびも得られないのに。」18:23 「しかしどんなことがあっても、走って行きたいのです。」ヨアブは「走って行きなさい。」と言った。アヒマアツは低地への道を走って行き、クシュ人を追い越した。

アヒマアツは、ついに主が王に救いを与えてくださったことを非常に喜んでいますが。こんな喜ばしい知らせを伝えない訳にはいけないと思いました。けれどもヨアブはよく知っています。アブシャロムが死んだのだから、これはダビデにとって悲報であることを知っていました。それで少し遅らせて知らせた方が良くと思いました。かつ、クシュ人という異邦人を遣わすことによって、伝達者がアブシャロムを殺したことについて嫌疑が問われ万一ダビデが死刑にしても害がないように、と思ったのでしょう。

ところがアヒマアツはどうしても伝えに行きたいと言っています。王子が死んだのだから、という意味合いがまだ分かっていない様子です。そして、アヒマアツは森から離れてヨルダン川の流れている溪谷のところを走っていきました。ギルアデは非常に高低の起伏の激しいところですから、低地を走ったほうが早いのです。

18:24 ダビデは二つの門の間にすわっていた。見張りが城壁の門の屋根に上り、目を上げて見ていると、ただひとりで走って来る男がいた。

当時の多くの城の門は、外門と内門の二つがありました。壁が二重になっていて、その間に部屋がありました。その上に屋根があつて、そこに見張り塔がありました。

18:25 見張りが王に大声で告げると、王は言った。「ただひとりなら、吉報だろう。」その者がしだ

いに近づいて来たとき、18:26 見張りは、もうひとりの男が走って来るのを見た。見張りは門衛に叫んで言った。「ひとりで走って来る男がいます。」すると王は言った。「それも吉報を持って来ているのだ。」18:27 見張りは言った。「先に走っているのは、どうやらツァドクの子アヒマアツのように見えます。」王は言った。「あれは良い男だ。良い知らせを持って来るだろう。」18:28 アヒマアツは大声で王に「ごきげんはいかがでしょう。」と言って、地にひれ伏して、王に礼をした。彼は言った。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主は、王さまに手向かった者どもを、引き渡してくださいました。」18:29 王が、「若者アブシャロムは無事か。」と聞くと、アヒマアツは答えた。「ヨアブが王の家来のこのしもべを遣わすとき、私は、何か大騒ぎの起こるのを見ましたが、何があったのか知りません。」

王の関心事は戦いに勝つことではありませんでした。アブシャロムの安否だけでした。ところが、アヒマアツは早く伝えにきたのですが、その伝言には肝心の内容が欠けています。私たちがキリストを伝える時に、キリストをよく知って伝える必要がありますね。

18:30 王は言った。「わきへ退いて、そこに立っていなさい。」そこで彼はわきに退いて立っていた。18:31 するとクシュ人がはいて来て言った。「王さまにお知らせいたします。主は、きょう、あなたに立ち向かうすべての者の手から、あなたを救って、あなたのために正しいさばきをされました。」18:32 王はクシュ人に言った。「若者アブシャロムは無事か。」クシュ人は答えた。「王さまの敵、あなたに立ち向かって害を加えようとする者はすべて、あの若者のようになりますように。」18:33 すると王は身震いして、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。「わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。」

自分のしたことの過ち、また息子への愛が絡まって、ダビデがむせび泣いています。反逆の息子であっても、その罪を自分自身が負えばよかったのにと嘆いています。これが父の愛です。そして、父はキリストにあって、私たち反逆する者たちのために私たちの罪を負ってくださいました。

今回は、この悲しみから立ち上がるダビデから話が始まります。

2サムエル記16-18章 「愚かにされた助言」

1A 王への反抗 16

1B サウル家 1-14

2B 父への侮辱 15-23

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

2B 機能する諜報 15-29

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

2B 息子の安否 19-33

本文

サムエル記第二 16 章から学びます。16 章から 18 章は、私たちが前回学んだダビデの祈りに対する、神の応えになります。15 章 31 節にこうありました。「ダビデは、「アヒトフェルがアブシャロムの謀反に荷担している。」という知らせを受けたが、そのとき、ダビデは言った。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」」息子アブシャロムがヘブロンで自らをユダの王であると宣言しました。そして多くのイスラエル人がアブシャロムに付いていきました。その一人が、ダビデの議官であり、友であるアヒトフェルでした。彼は非常に優れた議官で、彼が助言することに従えば、その通りになっていきました。そのことを知っているダビデが、「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と祈ったのです。

人間的には、アヒトフェルがアブシャロムに付いたことで勝利が決定したのと当然でしたが、それを神が覆される、という内容をこれから読みます。

1A 王への反抗 16

そしてもう一つ、ダビデがエルサレムから逃げることによって、誰が真実にダビデに仕えていたのか、彼に忠誠を尽くしていたのかが明らかにされています。ダビデが力を持っている時は、皆が彼にひれ伏していましたが、そうではない時に自分の心の状態が明らかにされます。ダビデがエルサレムから出て行って、動き出したのがかつて王権を持っていたサウル家の者たちです。

1B サウル家 1-14

16:1 ダビデは山の頂から少し下った。見ると、メフィボシェテに仕える若い者ツィバが、王を迎えに来ていた。彼は、鞍を置いた一くびきのろばに、パン二百個、干しぶどう百ふさ、夏のくだもの百個、ぶどう酒一袋を載せていた。16:2 王はツィバに尋ねた。「これらは何のためか。」ツィバは答えた。「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため、パンと夏のくだものは若い者たちが食べるた

め、ぶどう酒は荒野で疲れた者が飲むためです。」16:3 王は言った。「あなたの主人の息子はどこにいるか。」ツィバは王に言った。「今、エルサレムにおられます。あの人は、『きょう、イスラエルの家は、私の父の王国を私に返してくれる。』と書いていました。」16:4 すると王はツィバに言った。「メフィボシェテのものはみな、今、あなたのものだ。」ツィバが言った。「王さま。あなたのご好意にあずかることができますように、伏してお願いいたします。」

ダビデは自分の町からキデロン(ケデロン)の谷を渡り、オリーブ山を上りました。頂から少し下ると、メフィボシェテに仕えるツィバが王を迎えました。覚えていますね、王ダビデがサウル家の者でヨナタンの子に恵みを施したいと言って、連れて来られたのがツィバでした。彼はサウル家の僕でした。ダビデは、サウルの地所をすべてメフィボシェテに返し、メフィボシェテ自身は王と共に食卓に着きます。さらにツィバに対しては、メフィボシェテの子に対して、その地所にある畑を耕して、作物が出来たら、それをメフィボシェテの子の食事にする、と言いつけました。ツィバはそれを受け入れましたが、僕である彼自身にも十五人の息子と十人の僕がいました(以上2サムエル9章)。

ここでツィバが主人メフィボシェテについて言っていることは、中傷です。メフィボシェテは王といっしょに行こうとしていたのですが、ツィバが彼を欺きました(19:26-27)。この若い者ツィバは、自分が豊かな者であるのに、メフィボシェテの下で働くのに満足していなかった、ということです。自分は力を持ち豊かなのに、なぜこの足なえの家に仕えなければいけないのか、という不満があったのでしょう。それで、この政変の動きにおいて、ダビデに良くすることによってメフィボシェテから奪い取ろうとしました。ツィバの前に「若い者」と付いていますね。使徒ペテロが第一の手紙の中で若い者に対して勧めを行なっています。「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。(5:5)」

メフィボシェテは、ダビデに対しても酷いことを行なっています。このような時に共に食事していたメフィボシェテが自分を裏切ったという知らせを聞いたら、どれだけ心が傷つくのか考えもせず自分の利益のためにそんな嘘を言ったのです。そしてダビデ自身、このような状況では理解できるのですが、ツィバの言うことをそのまま受け入れてしまったことは、早まった判断でした。私たちは悪い噂に対して、それに関わらないことが大切です。事実を確認するまで受け入れてはいけません。「歩き回って人を中傷する者は秘密を漏らす。くちびるを開く者とは交わるな。(箴言20:19)」

16:5 ダビデ王がバフリムまで来ると、ちょうど、サウルの家の一族のひとりが、そこから出て来た。その名はシムイといってゲラの子で、盛んにのろいのことばを吐きながら出て来た。

「バフリム」はオリーブ山を上ったところにあるベニヤミン族の地にある村です。

16:6 そしてダビデとダビデ王のすべての家来たちに向かって石を投げつけた。民と勇士たちはみな、王の右左にいた。16:7 シムイはのろってこう言った。「出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。16:8 主がサウルの家すべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王となったおまえに。主はおまえの息子アブシャロムの手で王位を渡した。今、おまえはわざわざに会うのだ。おまえは血まみれの男だから。」

ツィバはメフィボシェテについての中傷をしましたが、シムイはダビデに対して中傷しました。私たちはサムエル記第一、また第二の前半を読んでいて、シムイが言っていることが事実と正反対であることをよく知っています。彼は、今でこそ手を出さなかったその時を敢えて抑えて、サウルを殺すことをしませんでした。また、その將軍アブネルを快く迎えてイスラエルの統一を実現させようとしたし、サウルの息子イシュ・ボシェテを殺した者を死刑に処しました。主が、サウルが死ぬようにさせたのでありダビデではありません。

神の主権と選びによってダビデに王権が移りました。けれども、シムイは主が立てられたということを受け入れませんでした。そこで、全て起こっていることをダビデのせいにしたのです。主の恵みの選びを受け入れないということは、自らに災いをもたらします。私たちは、主に仕えている人、主に立てられていることを認め、受け入れていかなければいけません。

16:9 すると、ツェルヤの子アビシャイが王に言った。「この死に犬めが、王さまをのろってよいものですか。行って、あの首をはねさせてください。」16:10 王は言った。「ツェルヤの子らよ。これは私のことで、あなたがたには、かかわりのないことだ。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ。』と言われたからだ。だれが彼に、『おまえはどうしてこういうことをするのだ。』と言えようか。」16:11 ダビデはアビシャイと彼のすべての家来たちに言った。「見よ。私の身から出た私の子さえ、私のいのちをねらっている。今、このベニヤミン人としては、なおさらのことだ。ほうっておきなさい。彼にのろわせなさい。主が彼に命じられたのだから。16:12 たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」

アビシャイら、王を左右で守っている勇士たちは、シムイなど即座に殺すことができました。けれども、ダビデはかつてサウルに対して行ったように、シムイに対しても手を出さないように戒めました。主に裁きを委ねたのです。

ダビデは、一連の出来事を主が自分を懲らしめているものとして捉えています。自分の家から剣が離れないという、ナタンを通して与えられた主の言葉があります。そして事実、アブシャロムが自分の命を狙っているのです。そのような主の導きがあって、サウル家のシムイが罵ることも起こっているのは当然のこと、という見解です。このように、主が今何をしておられているのかを広い視点で眺め、小事を主に委ねて、大切なところに焦点を当てていく視点は必要です。

そしてダビデは、「たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」と言いました。今、自分自身がどのような心でいるのか、それを保つことが必要です。その心の態度が、希望ある将来を生み出します。

16:13 ダビデと彼の部下たちは道を進んで行った。シムイは、山の中腹をダビデと平行して歩きながら、のろったり、石を投げたり、ちりをかけたりしていた。16:14 王も、王とともにいった民もみな、疲れたので、そこでひと息ついた。

ここまでがサウル家の者たちの出方でした。次にアブシャロムたちがエルサレムに到着してからのことになります。

2B 父への侮辱 15-23

16:15 アブシャロムとすべての民、イスラエル人はエルサレムにはいった。アヒトフェルもいっしょであった。16:16 ダビデの友アルキ人フシャイがアブシャロムのところに来たとき、フシャイはアブシャロムに言った。「王さま。ばんざい。王さま。ばんざい。」16:17 アブシャロムはフシャイに言った。「これが、あなたの友への忠誠のあらわれなのか。なぜ、あなたは、あなたの友といっしょに行かなかったのか。」16:18 フシャイはアブシャロムに答えた。「いいえ、主と、この民、イスラエルのすべての人々とが選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。16:19 また、私はだれに仕えるべきでしょう。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなたの父上に仕えたように、あなたにもお仕えいたします。」

ダビデが、「アヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と言った時に、すぐに与えられた神の回答は、フシャイでした。彼がダビデのところに現れて、ダビデに付いていくと言いました。けれどもダビデは、アヒトフェルと同じように助言者としてすぐれていたフシャイを、このようにエルサレムに送り込んだのです。

フシャイは、アブシャロムの心を掴んでいます。アブシャロムのうぬぼれの二つの部分に触れています。一つは、ヤハウェなる方がアブシャロムを選ばれたのだと言っていること。これは神のお墨付きですと太鼓判を押しているのです。もう一つは、「私の友の子に仕えるべきではないか」とアブシャロムがダビデの後継者であり、その地位と権利を持っていることを訴えました。これで、アブシャロムの心を掴んだのです。

16:20 それで、アブシャロムはアヒトフェルに言った。「あなたがたは相談して、われわれはどうしたらよいか、意見を述べなさい。」16:21 アヒトフェルはアブシャロムに言った。「父上が王宮の留守番に残したそばめたちのところにおはいらください。全イスラエルが、あなたは父上に憎まれるようなことをされたと聞くなり、あなたに、くみする者はみな、勇気を出すでしょう。」16:22 こうしてアブシャロムのために屋上に天幕が張られ、アブシャロムは全イスラエルの目の前で、父のそば

めたちのところにはいった。

アヒトフェルの助言は、アブシャロムとダビデの和解を修復不可能にするものでした。王の妻やそばめのところに入るのは、その王権を乗っ取ることを意味する反逆行為でした。ヤコブの長男ルベンが、ヤコブのそばめビルハのところに入ったことを覚えているでしょうか？それゆえに、晩年のヤコブはルベンのことを預言した時に、その長子の権利が取られたことを示唆しています(創世49:4)。しかしアヒトフェルは、ここまで思い切ったことを行なうことで、アブシャロムに与する者たちが勇気を得ることを知っていました。

ここで、ナタンがダビデに告げたこと主の懲らしめが実現します。「主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう。』(2サムエル 12:11-12)」言い換えれば、このことをもってダビデがウリヤに対して行ったことに対する神の懲らしめは、完了したということです。主は、これから先ほどダビデが話したように、彼に幸せをもって報いてくださいます。「主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。(詩篇 103:9-11)」

16:23 当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はみな、ダビデにもアブシャロムにもそのように思われた。

しかし、このような天才的的確な助言を、神は打ち壊してくださいます。

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

17:1 アヒトフェルはさらにアブシャロムに言った。「私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、17:2 彼を襲います。ダビデは疲れて気力を失っているでしょう。私が、彼を恐れさせれば、彼といっしょにいるすべての民は逃げましょう。私は王だけを打ち殺します。17:3 私はすべての民をあなたのもとに連れ戻します。すべての者が帰って来るとき、あなたが求めているのはただひとりだけですから、民はみな、穏やかになるでしょう。」17:4 このことばはアブシャロムとイスラエルの全長老の気に入った。

このアヒトフェルの助言をアブシャロムが採用していたら、確実にダビデは殺されていたことでしょう。確かに先ほど読んだように、ダビデは疲れていました。気力も失っています。

ところで興味深いことに、アヒトフェルの口が滑っています。「王だけを打ち殺します」と言っています。アブシャロムが既にヘブロンで王になっているのに、ダビデを王と呼んでしまっています。そして、このアヒトフェルの助言には、彼の個人的な恨みが見えています。王を打ち殺すのは、私がすると書いています。

私たちは自分の心を見張る必要があります。苦みというのは、どんな理由があるにしても、その根を培っていつてはいけません。それはアヒトフェルのように、殺意にまで発展します。そしてアヒトフェルのように、他の人々を汚していきます。そしてアヒトフェルのように、自分自身を滅ぼします。殺意については、こうイエス様が語られました。「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。(マタイ 5:22)」使徒ヨハネもこう警告しています。「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。(1ヨハネ 3:15)」

そして他の人々を汚していくことについては、ヘブル書の著者はこう言っています。「そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩んだり、これによって多くの人汚されたりすることのないように、(ヘブル 12:15)」そして、自分自身を滅ぼしてしまうことについては、聖霊を悲しませるという言葉で使徒パウロがこう警告しています。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。無慈悲(苦み)、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。(エペソ 4:30-31)」

17:5 しかしアブシャロムは言った。「アルキ人フシャイを呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう。」
17:6 フシャイがアブシャロムのところに来ると、アブシャロムは彼に次のように言った。「アヒトフェルはこのように言ったが、われわれは彼のことに従ってよいものだろうか。もしいけなければ、あなたの意見を述べてみなさい。」17:7 するとフシャイはアブシャロムに言った。「このたびアヒトフェルの立てたはかりごとは良くありません。」17:8 フシャイはさらに言った。「あなたは父上とその部下が戦士であることをご存じです。しかも彼らは、野で子を奪われた雌熊のように気が荒なっています。また、あなたの父上は戦いに慣れた方ですから、民といっしょには夜を過ごさないでしょう。17:9 きっと今、ほら穴か、どこか、そんな所に隠れておられましょう。もし、民のある者が最初に倒れたら、それを聞く者は、『アブシャロムに従う民のうちに打たれた者が出た。』と言うでしょう。17:10 そうなると、たとい、獅子のような心を持つ力ある者でも、気がくじけます。全イスラエルは、あなたの父上が勇士であり、彼に従う者が力ある者であることをよく知っています。17:11 私のはかりごとはこうです。全イスラエルをダンからベエル・シェバに至るまで、海辺の砂のように数多くあなたのところに集めて、あなた自身が戦いに出られることです。17:12 われわれは、彼を見つけたら、その場で彼を攻め、露が地面に降りるように彼を襲い、彼や、共にいるすべての兵士た

ちを、ひとりも生かしておかないのです。17:13 もし彼がさらにどこかの町にはいるなら、全イスラエルでその町に綱をかけ、その町を川まで引きずって行って、そこに一つの石ころも残らないようにしましょう。」

まるでショーのような戦法です。ダンからベエル・シェバ、つまり全イスラエルが出兵します。そしてアブシャロム自身が先頭に立って戦います。人気スターのようにアブシャロムを担ぎ上げて、そして全イスラエルがダビデを倒すのです。アブシャロムの自惚れにフシャイは訴えました。さらにフシャイにはもう一つの思惑がありました。全イスラエルを出兵させ、その軍を編成するにはとても時間がかかります。その間にダビデをヨルダン川の向こう側に動かすことができます。つまり時間稼ぎです。

17:14 アブシャロムとイスラエルの民はみな言った。「アルキ人フシャイのはかりごとは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。」これは主がアブシャロムにわざわいをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。

ここが今日の学びの鍵となる聖句です。アブシャロムの自惚れをくすぐるその言葉を神は用いました。人がどんなに計画を練っても、主の御心だけが成るのです。アブシャロムの愚かさを用いて、アヒトフェルの賢いはかりごとを打ち壊すことを考えておられました。「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。(箴言 19:21)」ですから、前回私たちが学びましたように、主に委ねるのが優れているのです。自分自身で成し遂げようとするのではなく、主ご自身が成し遂げてくださるように委ねます。「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。(箴言 16:3)」

2B 機能する諜報 15-29

17:15 フシャイは祭司ツアドクとエブヤタルに言った。「アヒトフェルは、アブシャロムとイスラエルの長老たちにこれこれの助言をしたが、私は、これこれの助言をした。17:16 今、急いで人をやり、ダビデに、『今夜は荒野の草原で夜を過ごしてはいけません。ほんとうに、ぜひ、あちらへ渡って行かなければなりません。でないと、王をはじめ、いっしょにいる民全部にわざわいが降りかかるでしょう。』と告げなさい。」

祭司ツアドクとエブヤタルが、エルサレム内部を通達する諜報活動をするようになっていました。それでフシャイが二人にこれからのアブシャロムの動きを伝えます。とにかく、ヨルダン川を越える必要があります。それを急がせています。

17:17 ヨナタンとアヒマアツはエン・ロゲルにとどまっていたが、ひとりの女奴隷が行って彼らに告げ、彼らがダビデ王に告げに行くようになっていた。これは彼らが町にはいるのを見られることのないためであった。

ツァドクの息子がアヒアマツで、エブヤタルの息子がヨナタンです。彼らがダビデに伝達することになっていました。エン・ロゲルは、ダビデの町エルサレムの南にある、キデロンの谷とヒノムの谷が交差するところにある泉ですが、その辺りは人々がたくさん行き交うのであまり人目に付かないという利点がありました。

17:18 ところが、ひとりの若者が彼らを見て、アブシャロムに告げた。そこで彼らふたりは急いで去り、バフリムに住むある人の家に行った。その人の庭に井戸があったので、彼らはその中に降りた。17:19 その人の妻は、おおいを持って来て、井戸の口の上に広げ、その上に麦をまき散らしたので、だれにも知られなかった。17:20 アブシャロムの家来たちが、その女の家に来て言った。「アヒアマツとヨナタンはどこにいるのか。」女は彼らに答えた。「あの人たちは、ここを通り過ぎて川のほうへ行きました。」彼らは、捜したが見つけることができなかったので、エルサレムへ帰った。

バフリムは、あのシミイが出てきた所でしたが、そこにダビデ側につく人がいました。井戸とありますが、昔は貯水槽のようなものも井戸と呼び、必ずしも水が入っている訳ではありません。そこは絶好の場所でした。そして井戸の口は地面と同じ高さにあるので、覆いをつければどこにあるのか分からないのです。

17:21 彼らが去って後、ふたりは井戸から上がって来て、ダビデ王に知らせに行った。彼らはダビデに言った。「さあ、急いで川を渡ってください。アヒトフェルがあなたがたに対してこれこれのはかりごとを立てたからです。」17:22 そこで、ダビデと、ダビデのもとにいたすべての者たちとは出発して、ヨルダン川を渡った。夜明けまでにヨルダン川を渡りきれなかった者はひとりもいなかった。17:23 アヒトフェルは、自分のはかりごとが行なわれないのを見て、ろばに鞍を置き、自分の町の家に帰って行き、家を整理して、首をくくって死に、彼の父の墓に葬られた。

午前礼拝で学びましたように、アヒトフェルはこの時点でアブシャロムが死ぬことさえ予測していたと思います。さらにその先にある自分に対する処罰も見すえていました。それで、殺されるのではなく自ら命を絶ちました。

17:24 ダビデがマハナイムに着いたとき、アブシャロムは、彼とともにいるイスラエルのすべての人々とヨルダン川を渡った。17:25 アブシャロムはアマサをヨアブの代わりに軍団長に任命していた。アマサは、ヨアブの母ツェルヤの妹ナハシュの娘アビガルと結婚したイシュマエル人イテラという人の息子であった。

マハナイムは、ヨルダン川の東、ギルアデの地にあります。かつてサウルの息子イシュ・ボシェテが、そこからイスラエルの王となり、そしてヘブロンで王となったダビデと戦いました。そこに要塞として仕える城があったと考えられます。

そして軍団長ですがダビデにはヨアブが、そしてアブシャロムにはアマサというヨアブの従兄弟が付きました。

17:26 こうして、イスラエルとアブシャロムはギルアデの地に陣を敷いた。17:27 ダビデがマハナイムに来たとき、アモン人でラバの出のナハシュの子ショビと、ロ・デバルの出のアミエルの子マキルと、ログリムの出のギルアデ人バルジライとは、17:28 寝台、鉢、土器、小麦、大麦、小麦粉、炒り麦、そら豆、レンズ豆、炒り麦、17:29 蜂蜜、凝乳、羊、牛酪を、ダビデとその一行の食糧として持って来た。彼らは民が荒野で飢えて疲れ、渴いていると思ったからである。

ダビデを王として認め、このような苦しみの状況の時に助けの手を差し伸べた人物は、初めに驚くことにアモン人です。覚えていますか、ナハシュの子ハヌンは、ダビデに齒向かって戦いました。けれども同じナハシュの別の子ショビは、ダビデを王として仰いでいたのです。ダビデが真実を尽くす姿を彼は受け入れていたのです。そして次は、マキルですが、メフィボシェテがかつて住んでいた家の主がこのマキルです。彼も、メフィボシェテに恵みを施すダビデの姿を知っていました。そして地元の富豪バルジライがいます。

後にダビデはバルジライの子らに恵みを施します。いや、晩年のダビデがソロモンにバルジライの子らを食事の席に連らせなさいと命じます(1列王 2:7)。私たちがキリストに従うとは、苦しみの中にいる人々と一つになる、ということであろうと思われれます。マタイ 25 章には、イエス様が再臨されてから王として君臨される時に、飢えた者、裸の者、卑しめられている者に親切にした者たちに対して、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。(マタイ 25:40)」と言われました。

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

18:1 ダビデは彼とともにいる民を調べて、彼らの上に千人隊長、百人隊長を任命した。

アブシャロムたちがヨルダン川を渡って来ています。ダビデも、自分と共にいる民を編成し、態勢を整えています。

18:2a ダビデは民の三分の一をヨアブの指揮のもとに、三分の一をヨアブの兄弟ツエルヤの子アビシャイの指揮のもとに、三分の一をガテ人イタイの指揮のもとに配置した。

ヨアブとアビシャイはつねにダビデに忠実な指揮官ですが、イタイのことは覚えていますか？ペリシテのガテから来た者で、ダビデがエルサレムから離れる時にこう言い切った男です。「イタイは王に答えて言った。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。(15:21)」さっそく、王に仕え、王を守る

ための戦いをします。

18:2b 王は民に言った。「私自身もあなたがたといっしょに出たい。」18:3 すると民は言った。「あなたが出てはいけません。私たちがどんなに逃げても、彼らは私たちのことは何とも思わないでしょう。たとえ私たちの半分が死んでも、彼らは私たちのことは心に留めないでしょう。しかし、あなたは私たちの一万人に当たります。今、あなたは町にいて私たちを助けてくださるほうが良いのです。」18:4 王は彼らに言った。「あなたがたが良いと思うことを、私はしよう。」王は門のそばに立ち、すべての民は、百人、千人ごとに出て行った。

ダビデはかつて、アモン人との戦いで自分自身が出ていかず、バテ・シェバの裸を見ることになりました。その罪意識があるのかもしれませんが、自ら出ていくと言いました。けれども、一万人に値するというはその通りでした。彼らの助言を聞きます。

18:5 王はヨアブ、アビシャイ、イタイに命じて言った。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。」民はみな、王が隊長たち全部にアブシャロムのことについて命じているのを聞いていた。

これは、客観的に見れば決してできないことです。アブシャロムは反逆罪で死刑にならなければいけません。けれども、親心もあり、また自分の負い目もあります。

18:6 こうして、民はイスラエルを迎え撃つために戦場へ出て行った。戦いはエフライムの森で行なわれた。18:7 イスラエルの民はそこでダビデの家来たちに打ち負かされ、その日、その場所で多くの打たれた者が出、二万人が倒れた。18:8 戦いはこの地一帯に散り広がり、この日、剣で倒された者よりも、密林で行き倒れになった者のほうが多かった。

この「エフライムの森」とは、エフライム族のことではなく、ギルアデ地方にある森のことです。今のヨルダンに行けば、密生森林地帯はそこにはありません。聖書時代と今は大きく変わりました。けれども、主はこの密林によって彼らを行き倒れにするということをやさしました。他の箇所に出てくる戦いにおいても、実際に剣で倒れるよりも、天から降ってくる雹であるとか、同士討ちであるとか、主ご自身が戦ってくださっている姿を見ることができます。

18:9 アブシャロムはダビデの家来たちに出会った。アブシャロムは騾馬に乗っていたが、騾馬が大きな樫の木の茂った枝の下を通ったとき、アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かり、彼は宙づりになった。彼が乗っていた騾馬はそのまま行った。

アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かりました。まず、彼が騾馬に乗っているというのがおかしいです。馬でなければ戦うことができません。彼が単なるショーのために動いていたことがわかり

ます。そして、彼の頭が木に引っかかっていた、とありますが、これはもちろんあの長い髪の毛のせいです。彼の誇っていた髪の毛が、彼を殺すきっかけを作りました。

18:10 ひとりの男がそれを見て、ヨアブに告げて言った。「今、アブシャロムが檜の木に引っ掛かっているのを見て来ました。」18:11 ヨアブはこれを告げた者に言った。「いったい、おまえはそれを見ていて、なぜその場で地に打ち落とさなかったのか。私がおまえに銀十枚と帯一本を与えたのに。」18:12 その男はヨアブに言った。「たとい、私の手に銀千枚をいただいても、王のお子さまに手は下せません。王は私たちの聞いているところで、あなたとアビシャイとイタイとに、『若者アブシャロムに手を出すな。』と言って、お命じになっているからです。18:13 もし、私が自分のいのちをかけて、命令にそむいていたとしても、王には、何も隠すことはできません。そのとき、あなたは知らぬ顔をなさるでしょう。」18:14 ヨアブは、「こうしておまえとぐずぐずしてはおられない。」と言って、手に三本の槍を取り、まだ檜の木の中真中に引っ掛かったまま生きていたアブシャロムの心臓を突き通した。18:15 ヨアブの道具持ちの十人の若者たちも、アブシャロムを取り巻いて彼を打ち殺した。18:16 ヨアブが角笛を吹き鳴らすと、民はイスラエルを追うのをやめて帰って来た。ヨアブが民を引き止めたからである。

ヨアブというのは、複雑な人物です。彼は、ダビデに猛烈な忠誠を持っている男でした。ダビデの益のため、またイスラエルの国益のためには、どんな犠牲も厭わない人物でした。しかし、彼はダビデの命令をこのようにいとも簡単に無視するような不従順な男でした。ダビデがアブシャロムを罰しないことは、ダビデのためにも、またイスラエルのためにもよくありません。正義は執行されなければいけないからです。そこで、ダビデはヨアブには口を出すことができません。けれども、彼の無慈悲と冷酷さはダビデの持っている柔和さとはあまりにもかけ離れていました。ずっと後に、ダビデの死後にヨアブがソロモンによって罰せられます。

ところでアブシャロムですが、彼は十人のダビデのそばめを凌辱しましたが、ここで十人のヨアブの道具持ちによって殺されています。自分の行ったことの報いを受けているのです。

18:17 人々はアブシャロムを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に非常に大きな石くれの山を積み上げた。イスラエルはみな、おのおの自分の天幕に逃げ帰っていた。

反逆者に対する見せしめとして、イスラエル人はこのように石を積み上げることをしました。

18:18 アブシャロムは存命中、王の谷に自分のために一本の柱を立てていた。「私の名を覚えてくれる息子が私にはいないから。」と考えていたからである。彼はその柱に自分の名をつけていた。それは、アブシャロムの記念碑と呼ばれた。今日もそうである。

王の谷は、キデロンの谷の南にあります。今、「アブシャロムの墓」と呼ばれているものがありま

すが、それは紀元後に立てられたもので本物ではありません。

彼は哀れな人です。自分がこれだけ派手なことを行なっているが、自分を覚えてくれる人はないだろうと思っていました。息子がいない、と言っていますが、彼には三人いたはず(15:27)。息子が早死にしてしまったのか、あるいは息子でさえ自分を覚えてはいてくれないだろう、と言っているのです。本当に可哀想な人です。

2B 息子の安否 19-33

18:19 ツアドクの子アヒマアツは言った。「私は王のところへ走って行って、主が敵の手から王を救って王のために正しいさばきをされたと知らせたいのですが。」18:20 ヨアブは彼に言った。「きょう、あなたは知らせるのではない。ほかの日に知らせなさい。きょうは、知らせないがよい。王子が死んだのだから。」18:21 ヨアブはクシュ人に言った。「行って、あなたの見たことを王に告げなさい。」クシュ人はヨアブに礼をして、走り去った。18:22 ツアドクの子アヒマアツは再びヨアブに言った。「どんなことがあっても、やはり私もクシュ人のあとを追って走って行きたいのです。」ヨアブは言った。「わが子よ。なぜ、あなたは走って行きたいのか。知らせに対して、何のほうびも得られないのに。」18:23 「しかしどんなことがあっても、走って行きたいのです。」ヨアブは「走って行きなさい。」と言った。アヒマアツは低地への道を走って行き、クシュ人を追い越した。

アヒマアツは、ついに主が王に救いを与えてくださったことを非常に喜んでいますが。こんな喜ばしい知らせを伝えない訳にはいけないと思いました。けれどもヨアブはよく知っています。アブシャロムが死んだのだから、これはダビデにとって悲報であることを知っていました。それで少し遅らせて知らせた方が良くと思いました。かつ、クシュ人という異邦人を遣わすことによって、伝達者がアブシャロムを殺したことについて嫌疑が問われ万一ダビデが死刑にしても害がないように、と思ったのでしょう。

ところがアヒマアツはどうしても伝えに行きたいと言っています。王子が死んだのだから、という意味合いがまだ分かっていない様子です。そして、アヒマアツは森から離れてヨルダン川の流れている溪谷のところを走っていきました。ギルアデは非常に高低の起伏の激しいところですから、低地を走ったほうが早いのです。

18:24 ダビデは二つの門の間にすわっていた。見張りが城壁の門の屋根に上り、目を上げて見ていると、ただひとりで走って来る男がいた。

当時の多くの城の門は、外門と内門の二つがありました。壁が二重になっていて、その間に部屋がありました。その上に屋根があつて、そこに見張り塔がありました。

18:25 見張りが王に大声で告げると、王は言った。「ただひとりなら、吉報だろう。」その者がしだ

いに近づいて来たとき、18:26 見張りは、もうひとりの男が走って来るのを見た。見張りは門衛に叫んで言った。「ひとりで走って来る男がいます。」すると王は言った。「それも吉報を持って来ているのだ。」18:27 見張りは言った。「先に走っているのは、どうやらツァドクの子アヒマアツのように見えます。」王は言った。「あれは良い男だ。良い知らせを持って来るだろう。」18:28 アヒマアツは大声で王に「ごきげんはいかがでしょうか。」と言って、地にひれ伏して、王に礼をした。彼は言った。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主は、王さまに手向かった者どもを、引き渡してくださいました。」18:29 王が、「若者アブシャロムは無事か。」と聞くと、アヒマアツは答えた。「ヨアブが王の家来のこのしもべを遣わすとき、私は、何か大騒ぎの起こるのを見ましたが、何があったのか知りません。」

王の関心事は戦いに勝つことではありませんでした。アブシャロムの安否だけでした。ところが、アヒマアツは早く伝えにきたのですが、その伝言には肝心の内容が欠けています。私たちがキリストを伝える時に、キリストをよく知って伝える必要がありますね。

18:30 王は言った。「わきへ退いて、そこに立っていなさい。」そこで彼はわきに退いて立っていた。18:31 するとクシュ人がはいて来て言った。「王さまにお知らせいたします。主は、きょう、あなたに立ち向かうすべての者の手から、あなたを救って、あなたのために正しいさばきをされました。」18:32 王はクシュ人に言った。「若者アブシャロムは無事か。」クシュ人は答えた。「王さまの敵、あなたに立ち向かって害を加えようとする者はすべて、あの若者のようになりますように。」18:33 すると王は身震いして、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。「わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。」

自分のしたことの過ち、また息子への愛が絡まって、ダビデがむせび泣いています。反逆の息子であっても、その罪を自分自身が負えばよかったのにと嘆いています。これが父の愛です。そして、父はキリストにあって、私たち反逆する者たちのために私たちの罪を負ってくださいました。

今回は、この悲しみから立ち上がるダビデから話が始まります。

2サムエル記16-18章 「愚かにされた助言」

1A 王への反抗 16

1B サウル家 1-14

2B 父への侮辱 15-23

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

2B 機能する諜報 15-29

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

2B 息子の安否 19-33

本文

サムエル記第二 16 章から学びます。16 章から 18 章は、私たちが前回学んだダビデの祈りに対する、神の応えになります。15 章 31 節にこうありました。「ダビデは、「アヒトフェルがアブシャロムの謀反に荷担している。」という知らせを受けたが、そのとき、ダビデは言った。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」」息子アブシャロムがヘブロンで自らをユダの王であると宣言しました。そして多くのイスラエル人がアブシャロムに付いていきました。その一人が、ダビデの議官であり、友であるアヒトフェルでした。彼は非常に優れた議官で、彼が助言することに従えば、その通りになっていきました。そのことを知っているダビデが、「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と祈ったのです。

人間的には、アヒトフェルがアブシャロムに付いたことで勝利が決定したのと当然でしたが、それを神が覆される、という内容をこれから読みます。

1A 王への反抗 16

そしてもう一つ、ダビデがエルサレムから逃げることによって、誰が真実にダビデに仕えていたのか、彼に忠誠を尽くしていたのかが明らかにされています。ダビデが力を持っている時は、皆が彼にひれ伏していましたが、そうではない時に自分の心の状態が明らかにされます。ダビデがエルサレムから出て行って、動き出したのがかつて王権を持っていたサウル家の者たちです。

1B サウル家 1-14

16:1 ダビデは山の頂から少し下った。見ると、メフィボシェテに仕える若い者ツィバが、王を迎えに来ていた。彼は、鞍を置いた一くびきのろばに、パン二百個、干しぶどう百ふさ、夏のくだもの百個、ぶどう酒一袋を載せていた。16:2 王はツィバに尋ねた。「これらは何のためか。」ツィバは答えた。「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため、パンと夏のくだものは若い者たちが食べるた

め、ぶどう酒は荒野で疲れた者が飲むためです。」16:3 王は言った。「あなたの主人の息子はどこにいるか。」ツィバは王に言った。「今、エルサレムにおられます。あの人は、『きょう、イスラエルの家は、私の父の王国を私に返してくれる。』と書いていました。」16:4 すると王はツィバに言った。「メフィボシェテのものはみな、今、あなたのものだ。」ツィバが言った。「王さま。あなたのご好意にあずかることができますように、伏してお願いいたします。」

ダビデは自分の町からキデロン(ケデロン)の谷を渡り、オリーブ山を上りました。頂から少し下ると、メフィボシェテに仕えるツィバが王を迎えました。覚えていますね、王ダビデがサウル家の者でヨナタンの子に恵みを施したいと言って、連れて来られたのがツィバでした。彼はサウル家の僕でした。ダビデは、サウルの地所をすべてメフィボシェテに返し、メフィボシェテ自身は王と共に食卓に着きます。さらにツィバに対しては、メフィボシェテの子に対して、その地所にある畑を耕して、作物が出来たら、それをメフィボシェテの子の食事にする、と言いつけました。ツィバはそれを受け入れましたが、僕である彼自身にも十五人の息子と十人の僕がいました(以上2サムエル9章)。

ここでツィバが主人メフィボシェテについて言っていることは、中傷です。メフィボシェテは王といっしょに行こうとしていたのですが、ツィバが彼を欺きました(19:26-27)。この若い者ツィバは、自分が豊かな者であるのに、メフィボシェテの下で働くのに満足していなかった、ということです。自分は力を持ち豊かなのに、なぜこの足なえの家に仕えなければいけないのか、という不満があったのでしょう。それで、この政変の動きにおいて、ダビデに良くすることによってメフィボシェテから奪い取ろうとしました。ツィバの前に「若い者」と付いていますね。使徒ペテロが第一の手紙の中で若い者に対して勧めを行なっています。「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。(5:5)」

メフィボシェテは、ダビデに対しても酷いことを行なっています。このような時に共に食事していたメフィボシェテが自分を裏切ったという知らせを聞いたら、どれだけ心が傷つくのか考えもせず自分の利益のためにそんな嘘を言ったのです。そしてダビデ自身、このような状況では理解できるのですが、ツィバの言うことをそのまま受け入れてしまったことは、早まった判断でした。私たちは悪い噂に対して、それに関わらないことが大切です。事実を確認するまで受け入れてはいけません。「歩き回って人を中傷する者は秘密を漏らす。くちびるを開く者とは交わるな。(箴言20:19)」

16:5 ダビデ王がバフリムまで来ると、ちょうど、サウルの家の一族のひとりが、そこから出て来た。その名はシムイといってゲラの子で、盛んにのろいのことばを吐きながら出て来た。

「バフリム」はオリーブ山を上ったところにあるベニヤミン族の地にある村です。

16:6 そしてダビデとダビデ王のすべての家来たちに向かって石を投げつけた。民と勇士たちはみな、王の右左にいた。16:7 シムイはのろってこう言った。「出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。16:8 主がサウルの家すべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王となったおまえに。主はおまえの息子アブシャロムの手で王位を渡した。今、おまえはわざわざに会うのだ。おまえは血まみれの男だから。」

ツィバはメフィボシェテについての中傷をしましたが、シムイはダビデに対して中傷しました。私たちはサムエル記第一、また第二の前半を読んでいて、シムイが言っていることが事実と正反対であることをよく知っています。彼は、今でこそ手を出さなかったその時を敢えて抑えて、サウルを殺すことをしませんでした。また、その將軍アブネルを快く迎えてイスラエルの統一を実現させようとしたし、サウルの息子イシュ・ボシェテを殺した者を死刑に処しました。主が、サウルが死ぬようにさせたのでありダビデではありません。

神の主権と選びによってダビデに王権が移りました。けれども、シムイは主が立てられたということを受け入れませんでした。そこで、全て起こっていることをダビデのせいにしたのです。主の恵みの選びを受け入れないということは、自らに災いをもたらします。私たちは、主に仕えている人、主に立てられていることを認め、受け入れていかなければいけません。

16:9 すると、ツェルヤの子アビシャイが王に言った。「この死に犬めが、王さまをのろってよいものですか。行って、あの首をはねさせてください。」16:10 王は言った。「ツェルヤの子らよ。これは私のことで、あなたがたには、かかわりのないことだ。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ。』と言われたからだ。だれが彼に、『おまえはどうしてこういうことをするのだ。』と言えようか。」16:11 ダビデはアビシャイと彼のすべての家来たちに言った。「見よ。私の身から出た私の子さえ、私のいのちをねらっている。今、このベニヤミン人としては、なおさらのことだ。ほうっておきなさい。彼にのろわせなさい。主が彼に命じられたのだから。16:12 たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」

アビシャイら、王を左右で守っている勇士たちは、シムイなど即座に殺すことができました。けれども、ダビデはかつてサウルに対して行ったように、シムイに対しても手を出さないように戒めました。主に裁きを委ねたのです。

ダビデは、一連の出来事を主が自分を懲らしめているものとして捉えています。自分の家から剣が離れないという、ナタンを通して与えられた主の言葉があります。そして事実、アブシャロムが自分の命を狙っているのです。そのような主の導きがあって、サウル家のシムイが罵ることも起こっているのは当然のこと、という見解です。このように、主が今何をしておられているのかを広い視点で眺め、小事を主に委ねて、大切なところに焦点を当てていく視点は必要です。

そしてダビデは、「たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」と言いました。今、自分自身がどのような心でいるのか、それを保つことが必要です。その心の態度が、希望ある将来を生み出します。

16:13 ダビデと彼の部下たちは道を進んで行った。シムイは、山の中腹をダビデと平行して歩きながら、のろったり、石を投げたり、ちりをかけたりしていた。16:14 王も、王とともにいった民もみな、疲れたので、そこでひと息ついた。

ここまでがサウル家の者たちの出方でした。次にアブシャロムたちがエルサレムに到着してからのことになります。

2B 父への侮辱 15-23

16:15 アブシャロムとすべての民、イスラエル人はエルサレムにはいった。アヒトフェルもいっしょであった。16:16 ダビデの友アルキ人フシャイがアブシャロムのところに来たとき、フシャイはアブシャロムに言った。「王さま。ばんざい。王さま。ばんざい。」16:17 アブシャロムはフシャイに言った。「これが、あなたの友への忠誠のあらわれなのか。なぜ、あなたは、あなたの友といっしょに行かなかったのか。」16:18 フシャイはアブシャロムに答えた。「いいえ、主と、この民、イスラエルのすべての人々とが選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。16:19 また、私はだれに仕えるべきでしょう。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなたの父上に仕えたように、あなたにもお仕えいたします。」

ダビデが、「アヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と言った時に、すぐに与えられた神の回答は、フシャイでした。彼がダビデのところに現れて、ダビデに付いていくと言いました。けれどもダビデは、アヒトフェルと同じように助言者としてすぐれていたフシャイを、このようにエルサレムに送り込んだのです。

フシャイは、アブシャロムの心を掴んでいます。アブシャロムのうぬぼれの二つの部分に触れています。一つは、ヤハウェなる方がアブシャロムを選ばれたのだと言っていること。これは神のお墨付きですと太鼓判を押しているのです。もう一つは、「私の友の子に仕えるべきではないか」とアブシャロムがダビデの後継者であり、その地位と権利を持っていることを訴えました。これで、アブシャロムの心を掴んだのです。

16:20 それで、アブシャロムはアヒトフェルに言った。「あなたがたは相談して、われわれはどうしたらよいか、意見を述べなさい。」16:21 アヒトフェルはアブシャロムに言った。「父上が王宮の留守番に残したそばめたちのところにおはいらください。全イスラエルが、あなたは父上に憎まれるようなことをされたと聞いたら、あなたに、くみする者はみな、勇気を出すでしょう。」16:22 こうしてアブシャロムのために屋上に天幕が張られ、アブシャロムは全イスラエルの目の前で、父のそば

めたちのところにはいった。

アヒトフェルの助言は、アブシャロムとダビデの和解を修復不可能にするものでした。王の妻やそばめのところに入るのは、その王権を乗っ取ることを意味する反逆行為でした。ヤコブの長男ルベンが、ヤコブのそばめビルハのところに入ったことを覚えているでしょうか？それゆえに、晩年のヤコブはルベンのことを預言した時に、その長子の権利が取られたことを示唆しています(創世49:4)。しかしアヒトフェルは、ここまで思い切ったことを行なうことで、アブシャロムに与する者たちが勇気を得ることを知っていました。

ここで、ナタンがダビデに告げたこと主の懲らしめが実現します。「主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう。』(2サムエル 12:11-12)」言い換えれば、このことをもってダビデがウリヤに対して行ったことに対する神の懲らしめは、完了したということです。主は、これから先ほどダビデが話したように、彼に幸せをもって報いてくださいます。「主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。(詩篇 103:9-11)」

16:23 当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はみな、ダビデにもアブシャロムにもそのように思われた。

しかし、このような天才的的確な助言を、神は打ち壊してくださいます。

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

17:1 アヒトフェルはさらにアブシャロムに言った。「私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、17:2 彼を襲います。ダビデは疲れて気力を失っているでしょう。私が、彼を恐れさせれば、彼といっしょにいるすべての民は逃げましょう。私は王だけを打ち殺します。17:3 私はすべての民をあなたのもとに連れ戻します。すべての者が帰って来るとき、あなたが求めているのはただひとりだけですから、民はみな、穏やかになるでしょう。」17:4 このことばはアブシャロムとイスラエルの全長老の気に入った。

このアヒトフェルの助言をアブシャロムが採用していたら、確実にダビデは殺されていたことでしょう。確かに先ほど読んだように、ダビデは疲れていました。気力も失っています。

ところで興味深いことに、アヒトフェルの口が滑っています。「王だけを打ち殺します」と言っています。アブシャロムが既にヘブロンで王になっているのに、ダビデを王と呼んでしまっています。そして、このアヒトフェルの助言には、彼の個人的な恨みが見えています。王を打ち殺すのは、私がすると断言しています。

私たちは自分の心を見張る必要があります。苦みというのは、どんな理由があるにしても、その根を培っていつてはいけません。それはアヒトフェルのように、殺意にまで発展します。そしてアヒトフェルのように、他の人々を汚していきます。そしてアヒトフェルのように、自分自身を滅ぼします。殺意については、こうイエス様が語られました。「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。(マタイ 5:22)」使徒ヨハネもこう警告しています。「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。(1ヨハネ 3:15)」

そして他の人々を汚していくことについては、ヘブル書の著者はこう断言しています。「そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩んだり、これによって多くの人汚されたりすることのないように、(ヘブル 12:15)」そして、自分自身を滅ぼしてしまうことについては、聖霊を悲しませるという言葉で使徒パウロがこう警告しています。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。無慈悲(苦み)、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。(エペソ 4:30-31)」

17:5 しかしアブシャロムは言った。「アルキ人フシャイを呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう。」
17:6 フシャイがアブシャロムのところに来ると、アブシャロムは彼に次のように言った。「アヒトフェルはこのように言ったが、われわれは彼のことに従ってよいものだろうか。もしいけなければ、あなたの意見を述べてみなさい。」17:7 するとフシャイはアブシャロムに言った。「このたびアヒトフェルの立てたはかりごとは良くありません。」17:8 フシャイはさらに言った。「あなたは父上とその部下が戦士であることをご存じです。しかも彼らは、野で子を奪われた雌熊のように気が荒なっています。また、あなたの父上は戦いに慣れた方ですから、民といっしょには夜を過ごさないでしょう。17:9 きっと今、ほら穴か、どこか、そんな所に隠れておられましょう。もし、民のある者が最初に倒れたら、それを聞く者は、『アブシャロムに従う民のうちに打たれた者が出た。』と言うでしょう。17:10 そうなると、たとい、獅子のような心を持つ力ある者でも、気がくじけます。全イスラエルは、あなたの父上が勇士であり、彼に従う者が力ある者であることをよく知っています。17:11 私のはかりごとはこうです。全イスラエルをダンからベエル・シェバに至るまで、海辺の砂のように数多くあなたのところに集めて、あなた自身が戦いに出られることです。17:12 われわれは、彼を見つけたら、その場で彼を攻め、露が地面に降りるように彼を襲い、彼や、共にいるすべての兵士た

ちを、ひとりも生かしておかないのです。17:13 もし彼がさらにどこかの町にはいるなら、全イスラエルでその町に綱をかけ、その町を川まで引きずって行って、そこに一つの石ころも残らないようにしましょう。」

まるでショーのような戦法です。ダンからベエル・シェバ、つまり全イスラエルが出兵します。そしてアブシャロム自身が先頭に立って戦います。人気スターのようにアブシャロムを担ぎ上げて、そして全イスラエルがダビデを倒すのです。アブシャロムの自惚れにフシャイは訴えました。さらにフシャイにはもう一つの思惑がありました。全イスラエルを出兵させ、その軍を編成するにはとても時間がかかります。その間にダビデをヨルダン川の向こう側に動かすことができます。つまり時間稼ぎです。

17:14 アブシャロムとイスラエルの民はみな言った。「アルキ人フシャイのはかりごとは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。」これは主がアブシャロムにわざわいをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。

ここが今日の学びの鍵となる聖句です。アブシャロムの自惚れをくすぐるその言葉を神は用いました。人がどんなに計画を練っても、主の御心だけが成るのです。アブシャロムの愚かさを用いて、アヒトフェルの賢いはかりごとを打ち壊すことを考えておられました。「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。(箴言 19:21)」ですから、前回私たちが学びましたように、主に委ねるのが優れているのです。自分自身で成し遂げようとするのではなく、主ご自身が成し遂げてくださるように委ねます。「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。(箴言 16:3)」

2B 機能する諜報 15-29

17:15 フシャイは祭司ツアドクとエブヤタルに言った。「アヒトフェルは、アブシャロムとイスラエルの長老たちにこれこれの助言をしたが、私は、これこれの助言をした。17:16 今、急いで人をやり、ダビデに、『今夜は荒野の草原で夜を過ごしてはいけません。ほんとうに、ぜひ、あちらへ渡って行かなければなりません。でないと、王をはじめ、いっしょにいる民全部にわざわいが降りかかるでしょう。』と告げなさい。」

祭司ツアドクとエブヤタルが、エルサレム内部を通達する諜報活動をするようになっていました。それでフシャイが二人にこれからのアブシャロムの動きを伝えます。とにかく、ヨルダン川を越える必要があります。それを急がせています。

17:17 ヨナタンとアヒマアツはエン・ロゲルにとどまっていたが、ひとりの女奴隷が行って彼らに告げ、彼らがダビデ王に告げに行くようになっていた。これは彼らが町にはいるのを見られることのないためであった。

ツァドクの息子がアヒアマツで、エブヤタルの息子がヨナタンです。彼らがダビデに伝達することになっていました。エン・ロゲルは、ダビデの町エルサレムの南にある、キデロンの谷とヒノムの谷が交差するところにある泉ですが、その辺りは人々がたくさん行き交うのであまり人目に付かないという利点がありました。

17:18 ところが、ひとりの若者が彼らを見て、アブシャロムに告げた。そこで彼らふたりは急いで去り、バフリムに住むある人の家に行った。その人の庭に井戸があったので、彼らはその中に降りた。17:19 その人の妻は、おおいを持って来て、井戸の口の上に広げ、その上に麦をまき散らしたので、だれにも知られなかった。17:20 アブシャロムの家来たちが、その女の家に来て言った。「アヒアマツとヨナタンはどこにいるのか。」女は彼らに答えた。「あの人たちは、ここを通り過ぎて川のほうへ行きました。」彼らは、捜したが見つけることができなかったので、エルサレムへ帰った。

バフリムは、あのシミイが出てきた所でしたが、そこにダビデ側につく人がいました。井戸とありますが、昔は貯水槽のようなものも井戸と呼び、必ずしも水が入っている訳ではありません。そこは絶好の場所でした。そして井戸の口は地面と同じ高さにあるので、覆いをつければどこにあるのか分からないのです。

17:21 彼らが去って後、ふたりは井戸から上がって来て、ダビデ王に知らせに行った。彼らはダビデに言った。「さあ、急いで川を渡ってください。アヒトフェルがあなたがたに対してこれこれのはかりごとを立てたからです。」17:22 そこで、ダビデと、ダビデのもとにいたすべての者たちとは出発して、ヨルダン川を渡った。夜明けまでにヨルダン川を渡りきれなかった者はひとりもいなかった。17:23 アヒトフェルは、自分のはかりごとが行なわれないのを見て、ろばに鞍を置き、自分の町の家に帰って行き、家を整理して、首をくくって死に、彼の父の墓に葬られた。

午前礼拝で学びましたように、アヒトフェルはこの時点でアブシャロムが死ぬことさえ予測していたと思います。さらにその先にある自分に対する処罰も見すえていました。それで、殺されるのではなく自ら命を絶ちました。

17:24 ダビデがマハナイムに着いたとき、アブシャロムは、彼とともにいるイスラエルのすべての人々とヨルダン川を渡った。17:25 アブシャロムはアマサをヨアブの代わりに軍団長に任命していた。アマサは、ヨアブの母ツェルヤの妹ナハシュの娘アビガルと結婚したイシュマエル人イテラという人の息子であった。

マハナイムは、ヨルダン川の東、ギルアデの地にあります。かつてサウルの息子イシュ・ボシェテが、そこからイスラエルの王となり、そしてヘブロンで王となったダビデと戦いました。そこに要塞として仕える城があったと考えられます。

そして軍団長ですがダビデにはヨアブが、そしてアブシャロムにはアマサというヨアブの従兄弟が付きました。

17:26 こうして、イスラエルとアブシャロムはギルアデの地に陣を敷いた。17:27 ダビデがマハナイムに来たとき、アモン人でラバの出のナハシュの子ショビと、ロ・デバルの出のアミエルの子マキルと、ログリムの出のギルアデ人バルジライとは、17:28 寝台、鉢、土器、小麦、大麦、小麦粉、炒り麦、そら豆、レンズ豆、炒り麦、17:29 蜂蜜、凝乳、羊、牛酪を、ダビデとその一行の食糧として持って来た。彼らは民が荒野で飢えて疲れ、渴いていると思ったからである。

ダビデを王として認め、このような苦しみの状況の時に助けの手を差し伸べた人物は、初めに驚くことにアモン人です。覚えていますか、ナハシュの子ハヌンは、ダビデに齒向かって戦いました。けれども同じナハシュの別の子ショビは、ダビデを王として仰いでいたのです。ダビデが真実を尽くす姿を彼は受け入れていたのです。そして次は、マキルですが、メフィボシェテがかつて住んでいた家の主がこのマキルです。彼も、メフィボシェテに恵みを施すダビデの姿を知っていました。そして地元の富豪バルジライがいます。

後にダビデはバルジライの子らに恵みを施します。いや、晩年のダビデがソロモンにバルジライの子らを食事の席に連らせなさいと命じます(1列王 2:7)。私たちがキリストに従うとは、苦しみの中にいる人々と一つになる、ということであろうと思われれます。マタイ 25 章には、イエス様が再臨されてから王として君臨される時に、飢えた者、裸の者、卑しめられている者に親切にした者たちに対して、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。(マタイ 25:40)」と言われました。

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

18:1 ダビデは彼とともにいる民を調べて、彼らの上に千人隊長、百人隊長を任命した。

アブシャロムたちがヨルダン川を渡って来ています。ダビデも、自分と共にいる民を編成し、態勢を整えています。

18:2a ダビデは民の三分の一をヨアブの指揮のもとに、三分の一をヨアブの兄弟ツエルヤの子アビシャイの指揮のもとに、三分の一をガテ人イタイの指揮のもとに配置した。

ヨアブとアビシャイはつねにダビデに忠実な指揮官ですが、イタイのことは覚えていますか？ペリシテのガテから来た者で、ダビデがエルサレムから離れる時にこう言い切った男です。「イタイは王に答えて言った。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。(15:21)」さっそく、王に仕え、王を守る

ための戦いをします。

18:2b 王は民に言った。「私自身もあなたがたといっしょに出たい。」18:3 すると民は言った。「あなたが出てはいけません。私たちがどんなに逃げても、彼らは私たちのことは何とも思わないでしょう。たとえ私たちの半分が死んでも、彼らは私たちのことは心に留めないでしょう。しかし、あなたは私たちの一万人に当たります。今、あなたは町にいて私たちを助けてくださるほうが良いのです。」18:4 王は彼らに言った。「あなたがたが良いと思うことを、私はしよう。」王は門のそばに立ち、すべての民は、百人、千人ごとに出て行った。

ダビデはかつて、アモン人との戦いで自分自身が出ていかず、バテ・シェバの裸を見ることになりました。その罪意識があるのかもしれませんが、自ら出ていくと言いました。けれども、一万人に値するというはその通りでした。彼らの助言を聞きます。

18:5 王はヨアブ、アビシャイ、イタイに命じて言った。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。」民はみな、王が隊長たち全部にアブシャロムのことについて命じているのを聞いていた。

これは、客観的に見れば決してできないことです。アブシャロムは反逆罪で死刑にならなければいけません。けれども、親心もあり、また自分の負い目もあります。

18:6 こうして、民はイスラエルを迎え撃つために戦場へ出て行った。戦いはエフライムの森で行なわれた。18:7 イスラエルの民はそこでダビデの家来たちに打ち負かされ、その日、その場所で多くの打たれた者が出、二万人が倒れた。18:8 戦いはこの地一帯に散り広がり、この日、剣で倒された者よりも、密林で行き倒れになった者のほうが多かった。

この「エフライムの森」とは、エフライム族のことではなく、ギルアデ地方にある森のことです。今のヨルダンに行けば、密生森林地帯はそこにはありません。聖書時代と今は大きく変わりました。けれども、主はこの密林によって彼らを行き倒れにするということをやさしました。他の箇所に出てくる戦いにおいても、実際に剣で倒れるよりも、天から降ってくる雹であるとか、同士討ちであるとか、主ご自身が戦ってくださっている姿を見ることができます。

18:9 アブシャロムはダビデの家来たちに出会った。アブシャロムは騾馬に乗っていたが、騾馬が大きな樫の木の茂った枝の下を通ったとき、アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かり、彼は宙づりになった。彼が乗っていた騾馬はそのまま行った。

アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かりました。まず、彼が騾馬に乗っているというのがおかしいです。馬でなければ戦うことができません。彼が単なるショーのために動いていたことがわかり

ます。そして、彼の頭が木に引っかかっていた、とありますが、これはもちろんあの長い髪の毛のせいです。彼の誇っていた髪の毛が、彼を殺すきっかけを作りました。

18:10 ひとりの男がそれを見て、ヨアブに告げて言った。「今、アブシャロムが樅の木に引っ掛かっているのを見て来ました。」18:11 ヨアブはこれを告げた者に言った。「いったい、おまえはそれを見ていて、なぜその場で地に打ち落とさなかったのか。私がおまえに銀十枚と帯一本を与えたのに。」18:12 その男はヨアブに言った。「たとい、私の手に銀千枚をいただいても、王のお子さまに手は下せません。王は私たちの聞いているところで、あなたとアビシャイとイタイとに、『若者アブシャロムに手を出すな。』と言って、お命じになっているからです。18:13 もし、私が自分のいのちをかけて、命令にそむいていたとしても、王には、何も隠すことはできません。そのとき、あなたは知らぬ顔をなさるでしょう。」18:14 ヨアブは、「こうしておまえとぐずぐずしてはおられない。」と言って、手に三本の槍を取り、まだ樅の木の中真中に引っ掛かったまま生きていたアブシャロムの心臓を突き通した。18:15 ヨアブの道具持ちの十人の若者たちも、アブシャロムを取り巻いて彼を打ち殺した。18:16 ヨアブが角笛を吹き鳴らすと、民はイスラエルを追うのをやめて帰って来た。ヨアブが民を引き止めたからである。

ヨアブというのは、複雑な人物です。彼は、ダビデに猛烈な忠誠を持っている男でした。ダビデの益のため、またイスラエルの国益のためには、どんな犠牲も厭わない人物でした。しかし、彼はダビデの命令をこのようにいとも簡単に無視するような不従順な男でした。ダビデがアブシャロムを罰しないことは、ダビデのためにも、またイスラエルのためにもよくありません。正義は執行されなければいけないからです。そこで、ダビデはヨアブには口を出すことができません。けれども、彼の無慈悲と冷酷さはダビデの持っている柔和さとはあまりにもかけ離れていました。ずっと後に、ダビデの死後にヨアブがソロモンによって罰せられます。

ところでアブシャロムですが、彼は十人のダビデのそばめを凌辱しましたが、ここで十人のヨアブの道具持ちによって殺されています。自分の行ったことの報いを受けているのです。

18:17 人々はアブシャロムを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に非常に大きな石くれの山を積み上げた。イスラエルはみな、おのおの自分の天幕に逃げ帰っていた。

反逆者に対する見せしめとして、イスラエル人はこのように石を積み上げることをしました。

18:18 アブシャロムは存命中、王の谷に自分のために一本の柱を立てていた。「私の名を覚えてくれる息子が私にはいないから。」と考えていたからである。彼はその柱に自分の名をつけていた。それは、アブシャロムの記念碑と呼ばれた。今日もそうである。

王の谷は、キデロンの谷の南にあります。今、「アブシャロムの墓」と呼ばれているものがありま

すが、それは紀元後に立てられたもので本物ではありません。

彼は哀れな人です。自分がこれだけ派手なことを行なっているが、自分を覚えてくれる人はないだろうと思っていました。息子がいない、と言っていますが、彼には三人いたはず(15:27)。息子が早死にしてしまったのか、あるいは息子でさえ自分を覚えてはいてくれないだろう、と言っているのです。本当に可哀想な人です。

2B 息子の安否 19-33

18:19 ツアドクの子アヒマアツは言った。「私は王のところへ走って行って、主が敵の手から王を救って王のために正しいさばきをされたと知らせたいのですが。」18:20 ヨアブは彼に言った。「きょう、あなたは知らせるのではない。ほかの日に知らせなさい。きょうは、知らせないがよい。王子が死んだのだから。」18:21 ヨアブはクシュ人に言った。「行って、あなたの見たことを王に告げなさい。」クシュ人はヨアブに礼をして、走り去った。18:22 ツアドクの子アヒマアツは再びヨアブに言った。「どんなことがあっても、やはり私もクシュ人のあとを追って走って行きたいのです。」ヨアブは言った。「わが子よ。なぜ、あなたは走って行きたいのか。知らせに対して、何のほうびも得られないのに。」18:23 「しかしどんなことがあっても、走って行きたいのです。」ヨアブは「走って行きなさい。」と言った。アヒマアツは低地への道を走って行き、クシュ人を追い越した。

アヒマアツは、ついに主が王に救いを与えてくださったことを非常に喜んでいますが。こんな喜ばしい知らせを伝えない訳にはいけないと思いました。けれどもヨアブはよく知っています。アブシャロムが死んだのだから、これはダビデにとって悲報であることを知っていました。それで少し遅らせて知らせた方が良くと思いました。かつ、クシュ人という異邦人を遣わすことによって、伝達者がアブシャロムを殺したことについて嫌疑が問われ万一ダビデが死刑にしても害がないように、と思ったのでしょう。

ところがアヒマアツはどうしても伝えに行きたいと言っています。王子が死んだのだから、という意味合いがまだ分かっていない様子です。そして、アヒマアツは森から離れてヨルダン川の流れている溪谷のところを走っていきました。ギルアデは非常に高低の起伏の激しいところですから、低地を走ったほうが早いのです。

18:24 ダビデは二つの門の間にすわっていた。見張りが城壁の門の屋根に上り、目を上げて見ていると、ただひとりで走って来る男がいた。

当時の多くの城の門は、外門と内門の二つがありました。壁が二重になっていて、その間に部屋がありました。その上に屋根があつて、そこに見張り塔がありました。

18:25 見張りが王に大声で告げると、王は言った。「ただひとりなら、吉報だろう。」その者がしだ

いに近づいて来たとき、18:26 見張りは、もうひとりの男が走って来るのを見た。見張りは門衛に叫んで言った。「ひとりで走って来る男がいます。」すると王は言った。「それも吉報を持って来ているのだ。」18:27 見張りは言った。「先に走っているのは、どうやらツァドクの子アヒマアツのように見えます。」王は言った。「あれは良い男だ。良い知らせを持って来るだろう。」18:28 アヒマアツは大声で王に「ごきげんはいかがでしょう。」と言って、地にひれ伏して、王に礼をした。彼は言った。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主は、王さまに手向かった者どもを、引き渡してくださいました。」18:29 王が、「若者アブシャロムは無事か。」と聞くと、アヒマアツは答えた。「ヨアブが王の家来のこのしもべを遣わすとき、私は、何か大騒ぎの起こるのを見ましたが、何があったのか知りません。」

王の関心事は戦いに勝つことではありませんでした。アブシャロムの安否だけでした。ところが、アヒマアツは早く伝えにきたのですが、その伝言には肝心の内容が欠けています。私たちがキリストを伝える時に、キリストをよく知って伝える必要がありますね。

18:30 王は言った。「わきへ退いて、そこに立っていなさい。」そこで彼はわきに退いて立っていた。18:31 するとクシュ人がはいて来て言った。「王さまにお知らせいたします。主は、きょう、あなたに立ち向かうすべての者の手から、あなたを救って、あなたのために正しいさばきをされました。」18:32 王はクシュ人に言った。「若者アブシャロムは無事か。」クシュ人は答えた。「王さまの敵、あなたに立ち向かって害を加えようとする者はすべて、あの若者のようになりますように。」18:33 すると王は身震いして、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。「わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。」

自分のしたことの過ち、また息子への愛が絡まって、ダビデがむせび泣いています。反逆の息子であっても、その罪を自分自身が負えばよかったのにと嘆いています。これが父の愛です。そして、父はキリストにあって、私たち反逆する者たちのために私たちの罪を負ってくださいました。

今回は、この悲しみから立ち上がるダビデから話が始まります。

2サムエル記16-18章 「愚かにされた助言」

1A 王への反抗 16

1B サウル家 1-14

2B 父への侮辱 15-23

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

2B 機能する諜報 15-29

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

2B 息子の安否 19-33

本文

サムエル記第二 16 章から学びます。16 章から 18 章は、私たちが前回学んだダビデの祈りに対する、神の応えになります。15 章 31 節にこうありました。「ダビデは、「アヒトフェルがアブシャロムの謀反に荷担している。」という知らせを受けたが、そのとき、ダビデは言った。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」」息子アブシャロムがヘブロンで自らをユダの王であると宣言しました。そして多くのイスラエル人がアブシャロムに付いていきました。その一人が、ダビデの議官であり、友であるアヒトフェルでした。彼は非常に優れた議官で、彼が助言することに従えば、その通りになっていきました。そのことを知っているダビデが、「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と祈ったのです。

人間的には、アヒトフェルがアブシャロムに付いたことで勝利が決定したのと当然でしたが、それを神が覆される、という内容をこれから読みます。

1A 王への反抗 16

そしてもう一つ、ダビデがエルサレムから逃げることによって、誰が真実にダビデに仕えていたのか、彼に忠誠を尽くしていたのかが明らかにされています。ダビデが力を持っている時は、皆が彼にひれ伏していましたが、そうではない時に自分の心の状態が明らかにされます。ダビデがエルサレムから出て行って、動き出したのがかつて王権を持っていたサウル家の者たちです。

1B サウル家 1-14

16:1 ダビデは山の頂から少し下った。見ると、メフィボシェテに仕える若い者ツィバが、王を迎えに来ていた。彼は、鞍を置いた一くびきのろばに、パン二百個、干しぶどう百ふさ、夏のくだもの百個、ぶどう酒一袋を載せていた。16:2 王はツィバに尋ねた。「これらは何のためか。」ツィバは答えた。「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため、パンと夏のくだものは若い者たちが食べるた

め、ぶどう酒は荒野で疲れた者が飲むためです。」16:3 王は言った。「あなたの主人の息子はどこにいるか。」ツィバは王に言った。「今、エルサレムにおられます。あの人は、『きょう、イスラエルの家は、私の父の王国を私に返してくれる。』と書いていました。」16:4 すると王はツィバに言った。「メフィボシェテのものはみな、今、あなたのものだ。」ツィバが言った。「王さま。あなたのご好意にあずかることができますように、伏してお願いいたします。」

ダビデは自分の町からキデロン(ケデロン)の谷を渡り、オリーブ山を上りました。頂から少し下ると、メフィボシェテに仕えるツィバが王を迎えました。覚えていますね、王ダビデがサウル家の者でヨナタンの子に恵みを施したいと言って、連れて来られたのがツィバでした。彼はサウル家の僕でした。ダビデは、サウルの地所をすべてメフィボシェテに返し、メフィボシェテ自身は王と共に食卓に着きます。さらにツィバに対しては、メフィボシェテの子に対して、その地所にある畑を耕して、作物が出来たら、それをメフィボシェテの子の食事にする、と言いつけました。ツィバはそれを受け入れましたが、僕である彼自身にも十五人の息子と十人の僕がいました(以上2サムエル9章)。

ここでツィバが主人メフィボシェテについて言っていることは、中傷です。メフィボシェテは王といっしょに行こうとしていたのですが、ツィバが彼を欺きました(19:26-27)。この若い者ツィバは、自分が豊かな者であるのに、メフィボシェテの下で働くのに満足していなかった、ということです。自分は力を持ち豊かなのに、なぜこの足なえの家に仕えなければいけないのか、という不満があったのでしょう。それで、この政変の動きにおいて、ダビデに良くすることによってメフィボシェテから奪い取ろうとしました。ツィバの前に「若い者」と付いていますね。使徒ペテロが第一の手紙の中で若い者に対して勧めを行なっています。「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。(5:5)」

メフィボシェテは、ダビデに対しても酷いことを行なっています。このような時に共に食事していたメフィボシェテが自分を裏切ったという知らせを聞いたら、どれだけ心が傷つくのか考えもせず自分の利益のためにそんな嘘を言ったのです。そしてダビデ自身、このような状況では理解できるのですが、ツィバの言うことをそのまま受け入れてしまったことは、早まった判断でした。私たちは悪い噂に対して、それに関わらないことが大切です。事実を確認するまで受け入れてはいけません。「歩き回って人を中傷する者は秘密を漏らす。くちびるを開く者とは交わるな。(箴言20:19)」

16:5 ダビデ王がバフリムまで来ると、ちょうど、サウルの家の一族のひとりが、そこから出て来た。その名はシムイといってゲラの子で、盛んにのろいのことばを吐きながら出て来た。

「バフリム」はオリーブ山を上ったところにあるベニヤミン族の地にある村です。

16:6 そしてダビデとダビデ王のすべての家来たちに向かって石を投げつけた。民と勇士たちはみな、王の右左にいた。16:7 シムイはのろってこう言った。「出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。16:8 主がサウルの家すべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王となったおまえに。主はおまえの息子アブシャロムの手で王位を渡した。今、おまえはわざわざに会うのだ。おまえは血まみれの男だから。」

ツィバはメフィボシェテについての中傷をしましたが、シムイはダビデに対して中傷しました。私たちはサムエル記第一、また第二の前半を読んでいて、シムイが言っていることが事実と正反対であることをよく知っています。彼は、今でこそ手を出さなかったその時を敢えて抑えて、サウルを殺すことをしませんでした。また、その將軍アブネルを快く迎えてイスラエルの統一を実現させようとしたし、サウルの息子イシュ・ボシェテを殺した者を死刑に処しました。主が、サウルが死ぬようにさせたのでありダビデではありません。

神の主権と選びによってダビデに王権が移りました。けれども、シムイは主が立てられたということを受け入れませんでした。そこで、全て起こっていることをダビデのせいにしたのです。主の恵みの選びを受け入れないということは、自らに災いをもたらします。私たちは、主に仕えている人、主に立てられていることを認め、受け入れていかなければいけません。

16:9 すると、ツェルヤの子アビシャイが王に言った。「この死に犬めが、王さまをのろってよいものですか。行って、あの首をはねさせてください。」16:10 王は言った。「ツェルヤの子らよ。これは私のことで、あなたがたには、かかわりのないことだ。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ。』と言われたからだ。だれが彼に、『おまえはどうしてこういうことをするのだ。』と言えようか。」16:11 ダビデはアビシャイと彼のすべての家来たちに言った。「見よ。私の身から出た私の子さえ、私のいのちをねらっている。今、このベニヤミン人としては、なおさらのことだ。ほうっておきなさい。彼にのろわせなさい。主が彼に命じられたのだから。16:12 たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」

アビシャイら、王を左右で守っている勇士たちは、シムイなど即座に殺すことができました。けれども、ダビデはかつてサウルに対して行ったように、シムイに対しても手を出さないように戒めました。主に裁きを委ねたのです。

ダビデは、一連の出来事を主が自分を懲らしめているものとして捉えています。自分の家から剣が離れないという、ナタンを通して与えられた主の言葉があります。そして事実、アブシャロムが自分の命を狙っているのです。そのような主の導きがあって、サウル家のシムイが罵ることも起こっているのは当然のこと、という見解です。このように、主が今何をしておられているのかを広い視点で眺め、小事を主に委ねて、大切なところに焦点を当てていく視点は必要です。

そしてダビデは、「たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」と言いました。今、自分自身がどのような心でいるのか、それを保つことが必要です。その心の態度が、希望ある将来を生み出します。

16:13 ダビデと彼の部下たちは道を進んで行った。シムイは、山の中腹をダビデと平行して歩きながら、のろったり、石を投げたり、ちりをかけたりしていた。16:14 王も、王とともにいった民もみな、疲れたので、そこでひと息ついた。

ここまでがサウル家の者たちの出方でした。次にアブシャロムたちがエルサレムに到着してからのことになります。

2B 父への侮辱 15-23

16:15 アブシャロムとすべての民、イスラエル人はエルサレムにはいった。アヒトフェルもいっしょであった。16:16 ダビデの友アルキ人フシャイがアブシャロムのところに来たとき、フシャイはアブシャロムに言った。「王さま。ばんざい。王さま。ばんざい。」16:17 アブシャロムはフシャイに言った。「これが、あなたの友への忠誠のあらわれなのか。なぜ、あなたは、あなたの友といっしょに行かなかったのか。」16:18 フシャイはアブシャロムに答えた。「いいえ、主と、この民、イスラエルのすべての人々とが選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。16:19 また、私はだれに仕えるべきでしょう。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなたの父上に仕えたように、あなたにもお仕えいたします。」

ダビデが、「アヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と言った時に、すぐに与えられた神の回答は、フシャイでした。彼がダビデのところに現れて、ダビデに付いていくと言いました。けれどもダビデは、アヒトフェルと同じように助言者としてすぐれていたフシャイを、このようにエルサレムに送り込んだのです。

フシャイは、アブシャロムの心を掴んでいます。アブシャロムのうぬぼれの二つの部分に触れています。一つは、ヤハウェなる方がアブシャロムを選ばれたのだと言っていること。これは神のお墨付きですと太鼓判を押しているのです。もう一つは、「私の友の子に仕えるべきではないか」とアブシャロムがダビデの後継者であり、その地位と権利を持っていることを訴えました。これで、アブシャロムの心を掴んだのです。

16:20 それで、アブシャロムはアヒトフェルに言った。「あなたがたは相談して、われわれはどうしたらよいか、意見を述べなさい。」16:21 アヒトフェルはアブシャロムに言った。「父上が王宮の留守番に残したそばめたちのところにおはいらください。全イスラエルが、あなたは父上に憎まれるようなことをされたと聞くなり、あなたに、くみする者はみな、勇気を出すでしょう。」16:22 こうしてアブシャロムのために屋上に天幕が張られ、アブシャロムは全イスラエルの目の前で、父のそば

めたちのところにはいった。

アヒトフェルの助言は、アブシャロムとダビデの和解を修復不可能にするものでした。王の妻やそばめのところに入るのは、その王権を乗っ取ることを意味する反逆行為でした。ヤコブの長男ルベンが、ヤコブのそばめビルハのところに入ったことを覚えているでしょうか？それゆえに、晩年のヤコブはルベンのことを預言した時に、その長子の権利が取られたことを示唆しています(創世49:4)。しかしアヒトフェルは、ここまで思い切ったことを行なうことで、アブシャロムに与する者たちが勇気を得ることを知っていました。

ここで、ナタンがダビデに告げたこと主の懲らしめが実現します。「主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう。』(2サムエル 12:11-12)」言い換えれば、このことをもってダビデがウリヤに対して行ったことに対する神の懲らしめは、完了したということです。主は、これから先ほどダビデが話したように、彼に幸せをもって報いてくださいます。「主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。(詩篇 103:9-11)」

16:23 当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はみな、ダビデにもアブシャロムにもそのように思われた。

しかし、このような天才的的確な助言を、神は打ち壊してくださいます。

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

17:1 アヒトフェルはさらにアブシャロムに言った。「私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、17:2 彼を襲います。ダビデは疲れて気力を失っているでしょう。私が、彼を恐れさせれば、彼といっしょにいるすべての民は逃げましょう。私は王だけを打ち殺します。17:3 私はすべての民をあなたのもとに連れ戻します。すべての者が帰って来るとき、あなたが求めているのはただひとりだけですから、民はみな、穏やかになるでしょう。」17:4 このことばはアブシャロムとイスラエルの全長老の気に入った。

このアヒトフェルの助言をアブシャロムが採用していたら、確実にダビデは殺されていたことでしょう。確かに先ほど読んだように、ダビデは疲れていました。気力も失っています。

ところで興味深いことに、アヒトフェルの口が滑っています。「王だけを打ち殺します」と言っています。アブシャロムが既にヘブロンで王になっているのに、ダビデを王と呼んでしまっています。そして、このアヒトフェルの助言には、彼の個人的な恨みが見えています。王を打ち殺すのは、私がすると断言しています。

私たちは自分の心を見張る必要があります。苦みというのは、どんな理由があるにしても、その根を培っていつてはいけません。それはアヒトフェルのように、殺意にまで発展します。そしてアヒトフェルのように、他の人々を汚していきます。そしてアヒトフェルのように、自分自身を滅ぼします。殺意については、こうイエス様が語られました。「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。(マタイ 5:22)」使徒ヨハネもこう警告しています。「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。(1ヨハネ 3:15)」

そして他の人々を汚していくことについては、ヘブル書の著者はこう断言しています。「そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩んだり、これによって多くの人汚されたりすることのないように、(ヘブル 12:15)」そして、自分自身を滅ぼしてしまうことについては、聖霊を悲しませるという言葉で使徒パウロがこう警告しています。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。無慈悲(苦み)、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。(エペソ 4:30-31)」

17:5 しかしアブシャロムは言った。「アルキ人フシャイを呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう。」
17:6 フシャイがアブシャロムのところに来ると、アブシャロムは彼に次のように言った。「アヒトフェルはこのように言ったが、われわれは彼のことに従ってよいものだろうか。もしいけなければ、あなたの意見を述べてみなさい。」
17:7 するとフシャイはアブシャロムに言った。「このたびアヒトフェルの立てたはかりごとは良くありません。」
17:8 フシャイはさらに言った。「あなたは父上とその部下が戦士であることをご存じです。しかも彼らは、野で子を奪われた雌熊のように気が荒なっています。また、あなたの父上は戦いに慣れた方ですから、民といっしょには夜を過ごさないでしょう。17:9 きっと今、ほら穴か、どこか、そんな所に隠れておられましょう。もし、民のある者が最初に倒れたら、それを聞く者は、『アブシャロムに従う民のうちに打たれた者が出た。』と言うでしょう。17:10 そうなると、たとい、獅子のような心を持つ力ある者でも、気がくじけます。全イスラエルは、あなたの父上が勇士であり、彼に従う者が力ある者であることをよく知っています。17:11 私のはかりごとはこうです。全イスラエルをダンからベエル・シェバに至るまで、海辺の砂のように数多くあなたのところに集めて、あなた自身が戦いに出られることです。17:12 われわれは、彼を見つけたら、その場で彼を攻め、露が地面に降りるように彼を襲い、彼や、共にいるすべての兵士た

ちを、ひとりも生かしておかないのです。17:13 もし彼がさらにどこかの町にはいるなら、全イスラエルでその町に綱をかけ、その町を川まで引きずって行って、そこに一つの石ころも残らないようにしましょう。」

まるでショーのような戦法です。ダンからベエル・シェバ、つまり全イスラエルが出兵します。そしてアブシャロム自身が先頭に立って戦います。人気スターのようにアブシャロムを担ぎ上げて、そして全イスラエルがダビデを倒すのです。アブシャロムの自惚れにフシャイは訴えました。さらにフシャイにはもう一つの思惑がありました。全イスラエルを出兵させ、その軍を編成するにはとても時間がかかります。その間にダビデをヨルダン川の向こう側に動かすことができます。つまり時間稼ぎです。

17:14 アブシャロムとイスラエルの民はみな言った。「アルキ人フシャイのはかりごとは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。」これは主がアブシャロムにわざわざをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。

ここが今日の学びの鍵となる聖句です。アブシャロムの自惚れをくすぐるその言葉を神は用いました。人がどんなに計画を練っても、主の御心だけが成るのです。アブシャロムの愚かさを用いて、アヒトフェルの賢いはかりごとを打ち壊すことを考えておられました。「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。(箴言 19:21)」ですから、前回私たちが学びましたように、主に委ねるのが優れているのです。自分自身で成し遂げようとするのではなく、主ご自身が成し遂げてくださるように委ねます。「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。(箴言 16:3)」

2B 機能する諜報 15-29

17:15 フシャイは祭司ツアドクとエブヤタルに言った。「アヒトフェルは、アブシャロムとイスラエルの長老たちにこれこれの助言をしたが、私は、これこれの助言をした。17:16 今、急いで人をやり、ダビデに、『今夜は荒野の草原で夜を過ごしてはいけません。ほんとうに、ぜひ、あちらへ渡って行かなければなりません。でないと、王をはじめ、いっしょにいる民全部にわざわざ降りかかるでしょう。』と告げなさい。」

祭司ツアドクとエブヤタルが、エルサレム内部を通達する諜報活動をするようになっていました。それでフシャイが二人にこれからのアブシャロムの動きを伝えます。とにかく、ヨルダン川を越える必要があります。それを急がせています。

17:17 ヨナタンとアヒマアツはエン・ロゲルにとどまっていたが、ひとりの女奴隷が行って彼らに告げ、彼らがダビデ王に告げに行くようになっていた。これは彼らが町にはいるのを見られることのないためであった。

ツァドクの息子がアヒアマツで、エブヤタルの息子がヨナタンです。彼らがダビデに伝達することになっていました。エン・ロゲルは、ダビデの町エルサレムの南にある、キデロンの谷とヒノムの谷が交差するところにある泉ですが、その辺りは人々がたくさん行き交うのであまり人目に付かないという利点がありました。

17:18 ところが、ひとりの若者が彼らを見て、アブシャロムに告げた。そこで彼らふたりは急いで去り、バフリムに住むある人の家に行った。その人の庭に井戸があったので、彼らはその中に降りた。17:19 その人の妻は、おおいを持って来て、井戸の口の上に広げ、その上に麦をまき散らしたので、だれにも知られなかった。17:20 アブシャロムの家来たちが、その女の家に来て言った。「アヒアマツとヨナタンはどこにいるのか。」女は彼らに答えた。「あの人たちは、ここを通り過ぎて川のほうへ行きました。」彼らは、捜したが見つけることができなかったので、エルサレムへ帰った。

バフリムは、あのシミイが出てきた所でしたが、そこにダビデ側につく人がいました。井戸とありますが、昔は貯水槽のようなものも井戸と呼び、必ずしも水が入っている訳ではありません。そこは絶好の場所でした。そして井戸の口は地面と同じ高さにあるので、覆いをつければどこにあるのか分からないのです。

17:21 彼らが去って後、ふたりは井戸から上がって来て、ダビデ王に知らせに行った。彼らはダビデに言った。「さあ、急いで川を渡ってください。アヒトフェルがあなたがたに対してこれこれのはかりごとを立てたからです。」17:22 そこで、ダビデと、ダビデのもとにいたすべての者たちとは出発して、ヨルダン川を渡った。夜明けまでにヨルダン川を渡りきれなかった者はひとりもいなかった。17:23 アヒトフェルは、自分のはかりごとが行なわれないのを見て、ろばに鞍を置き、自分の町の家に帰って行き、家を整理して、首をくくって死に、彼の父の墓に葬られた。

午前礼拝で学びましたように、アヒトフェルはこの時点でアブシャロムが死ぬことさえ予測していたと思います。さらにその先にある自分に対する処罰も見すえていました。それで、殺されるのではなく自ら命を絶ちました。

17:24 ダビデがマハナイムに着いたとき、アブシャロムは、彼とともにいるイスラエルのすべての人々とヨルダン川を渡った。17:25 アブシャロムはアマサをヨアブの代わりに軍団長に任命していた。アマサは、ヨアブの母ツェルヤの妹ナハシュの娘アビガルと結婚したイシュマエル人イテラという人の息子であった。

マハナイムは、ヨルダン川の東、ギルアデの地にあります。かつてサウルの息子イシュ・ボシェテが、そこからイスラエルの王となり、そしてヘブロンで王となったダビデと戦いました。そこに要塞として仕える城があったと考えられます。

そして軍団長ですがダビデにはヨアブが、そしてアブシャロムにはアマサというヨアブの従兄弟が付きました。

17:26 こうして、イスラエルとアブシャロムはギルアデの地に陣を敷いた。17:27 ダビデがマハナイムに来たとき、アモン人でラバの出のナハシュの子ショビと、ロ・デバルの出のアミエルの子マキルと、ログリムの出のギルアデ人バルジライとは、17:28 寝台、鉢、土器、小麦、大麦、小麦粉、炒り麦、そら豆、レンズ豆、炒り麦、17:29 蜂蜜、凝乳、羊、牛酪を、ダビデとその一行の食糧として持って来た。彼らは民が荒野で飢えて疲れ、渴いていると思ったからである。

ダビデを王として認め、このような苦しみの状況の時に助けの手を差し伸べた人物は、初めに驚くことにアモン人です。覚えていますか、ナハシュの子ハヌンは、ダビデに齒向かって戦いました。けれども同じナハシュの別の子ショビは、ダビデを王として仰いでいたのです。ダビデが真実を尽くす姿を彼は受け入れていたのです。そして次は、マキルですが、メフィボシェテがかつて住んでいた家の主がこのマキルです。彼も、メフィボシェテに恵みを施すダビデの姿を知っていました。そして地元の富豪バルジライがいます。

後にダビデはバルジライの子らに恵みを施します。いや、晩年のダビデがソロモンにバルジライの子らを食事の席に連らせなさいと命じます(1列王 2:7)。私たちがキリストに従うとは、苦しみの中にいる人々と一つになる、ということであろうと思われれます。マタイ 25 章には、イエス様が再臨されてから王として君臨される時に、飢えた者、裸の者、卑しめられている者に親切にした者たちに対して、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。(マタイ 25:40)」と言われました。

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

18:1 ダビデは彼とともにいる民を調べて、彼らの上に千人隊長、百人隊長を任命した。

アブシャロムたちがヨルダン川を渡って来ています。ダビデも、自分と共にいる民を編成し、態勢を整えています。

18:2a ダビデは民の三分の一をヨアブの指揮のもとに、三分の一をヨアブの兄弟ツエルヤの子アビシャイの指揮のもとに、三分の一をガテ人イタイの指揮のもとに配置した。

ヨアブとアビシャイはつねにダビデに忠実な指揮官ですが、イタイのことは覚えていますか？ペリシテのガテから来た者で、ダビデがエルサレムから離れる時にこう言い切った男です。「イタイは王に答えて言った。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。(15:21)」さっそく、王に仕え、王を守る

ための戦いをします。

18:2b 王は民に言った。「私自身もあなたがたといっしょに出たい。」18:3 すると民は言った。「あなたが出てはいけません。私たちがどんなに逃げても、彼らは私たちのことは何とも思わないでしょう。たとえ私たちの半分が死んでも、彼らは私たちのことは心に留めないでしょう。しかし、あなたは私たちの一万人に当たります。今、あなたは町にいて私たちを助けてくださるほうが良いのです。」18:4 王は彼らに言った。「あなたがたが良いと思うことを、私はしよう。」王は門のそばに立ち、すべての民は、百人、千人ごとに出て行った。

ダビデはかつて、アモン人との戦いで自分自身が出ていかず、バテ・シェバの裸を見ることになりました。その罪意識があるのかもしれませんが、自ら出ていくと言いました。けれども、一万人に値するというはその通りでした。彼らの助言を聞きます。

18:5 王はヨアブ、アビシャイ、イタイに命じて言った。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。」民はみな、王が隊長たち全部にアブシャロムのことについて命じているのを聞いていた。

これは、客観的に見れば決してできないことです。アブシャロムは反逆罪で死刑にならなければいけません。けれども、親心もあり、また自分の負い目もあります。

18:6 こうして、民はイスラエルを迎え撃つために戦場へ出て行った。戦いはエフライムの森で行なわれた。18:7 イスラエルの民はそこでダビデの家来たちに打ち負かされ、その日、その場所で多くの打たれた者が出、二万人が倒れた。18:8 戦いはこの地一帯に散り広がり、この日、剣で倒された者よりも、密林で行き倒れになった者のほうが多かった。

この「エフライムの森」とは、エフライム族のことではなく、ギルアデ地方にある森のことです。今のヨルダンに行けば、密生森林地帯はそこにはありません。聖書時代と今は大きく変わりました。けれども、主はこの密林によって彼らを行き倒れにするということをやさしました。他の箇所に出てくる戦いにおいても、実際に剣で倒れるよりも、天から降ってくる雹であるとか、同士討ちであるとか、主ご自身が戦ってくださっている姿を見ることができます。

18:9 アブシャロムはダビデの家来たちに出会った。アブシャロムは驃馬に乗っていたが、驃馬が大きな樫の木の茂った枝の下を通ったとき、アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かり、彼は宙づりになった。彼が乗っていた驃馬はそのまま行った。

アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かりました。まず、彼が驃馬に乗っているというのがおかしいです。馬でなければ戦うことができません。彼が単なるショーのために動いていたことがわかり

ます。そして、彼の頭が木に引っかかっていた、とありますが、これはもちろんあの長い髪の毛のせいです。彼の誇っていた髪の毛が、彼を殺すきっかけを作りました。

18:10 ひとりの男がそれを見て、ヨアブに告げて言った。「今、アブシャロムが樅の木に引っ掛かっているのを見て来ました。」18:11 ヨアブはこれを告げた者に言った。「いったい、おまえはそれを見ていて、なぜその場で地に打ち落とさなかったのか。私がおまえに銀十枚と帯一本を与えたのに。」18:12 その男はヨアブに言った。「たとい、私の手に銀千枚をいただいても、王のお子さまに手は下せません。王は私たちの聞いているところで、あなたとアビシャイとイタイとに、『若者アブシャロムに手を出すな。』と言って、お命じになっているからです。18:13 もし、私が自分のいのちをかけて、命令にそむいていたとしても、王には、何も隠すことはできません。そのとき、あなたは知らぬ顔をなさるでしょう。」18:14 ヨアブは、「こうしておまえとぐずぐずしてはおられない。」と言って、手に三本の槍を取り、まだ樅の木の中真中に引っ掛かったまま生きていたアブシャロムの心臓を突き通した。18:15 ヨアブの道具持ちの十人の若者たちも、アブシャロムを取り巻いて彼を打ち殺した。18:16 ヨアブが角笛を吹き鳴らすと、民はイスラエルを追うのをやめて帰って来た。ヨアブが民を引き止めたからである。

ヨアブというのは、複雑な人物です。彼は、ダビデに猛烈な忠誠を持っている男でした。ダビデの益のため、またイスラエルの国益のためには、どんな犠牲も厭わない人物でした。しかし、彼はダビデの命令をこのようにいとも簡単に無視するような不従順な男でした。ダビデがアブシャロムを罰しないことは、ダビデのためにも、またイスラエルのためにもよくありません。正義は執行されなければいけないからです。そこで、ダビデはヨアブには口を出すことができません。けれども、彼の無慈悲と冷酷さはダビデの持っている柔和さとはあまりにもかけ離れていました。ずっと後に、ダビデの死後にヨアブがソロモンによって罰せられます。

ところでアブシャロムですが、彼は十人のダビデのそばめを凌辱しましたが、ここで十人のヨアブの道具持ちによって殺されています。自分の行ったことの報いを受けているのです。

18:17 人々はアブシャロムを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に非常に大きな石くれの山を積み上げた。イスラエルはみな、おのおの自分の天幕に逃げ帰っていた。

反逆者に対する見せしめとして、イスラエル人はこのように石を積み上げることをしました。

18:18 アブシャロムは存命中、王の谷に自分のために一本の柱を立てていた。「私の名を覚えてくれる息子が私にはいないから。」と考えていたからである。彼はその柱に自分の名をつけていた。それは、アブシャロムの記念碑と呼ばれた。今日もそうである。

王の谷は、キデロンの谷の南にあります。今、「アブシャロムの墓」と呼ばれているものがありま

すが、それは紀元後に立てられたもので本物ではありません。

彼は哀れな人です。自分がこれだけ派手なことを行なっているが、自分を覚えてくれる人はないだろうと思っていました。息子がいない、と言っていますが、彼には三人いたはず(15:27)。息子が早死にしてしまったのか、あるいは息子でさえ自分を覚えてはいてくれないだろう、と言っているのです。本当に可哀想な人です。

2B 息子の安否 19-33

18:19 ツアドクの子アヒマアツは言った。「私は王のところへ走って行って、主が敵の手から王を救って王のために正しいさばきをされたと知らせたいのですが。」18:20 ヨアブは彼に言った。「きょう、あなたは知らせるのではない。ほかの日に知らせなさい。きょうは、知らせないがよい。王子が死んだのだから。」18:21 ヨアブはクシュ人に言った。「行って、あなたの見たことを王に告げなさい。」クシュ人はヨアブに礼をして、走り去った。18:22 ツアドクの子アヒマアツは再びヨアブに言った。「どんなことがあっても、やはり私もクシュ人のあとを追って走って行きたいのです。」ヨアブは言った。「わが子よ。なぜ、あなたは走って行きたいのか。知らせに対して、何のほうびも得られないのに。」18:23 「しかしどんなことがあっても、走って行きたいのです。」ヨアブは「走って行きなさい。」と言った。アヒマアツは低地への道を走って行き、クシュ人を追い越した。

アヒマアツは、ついに主が王に救いを与えてくださったことを非常に喜んでいます。こんな喜ばしい知らせを伝えない訳にはいけないと思いました。けれどもヨアブはよく知っています。アブシャロムが死んだのだから、これはダビデにとって悲報であることを知っていました。それで少し遅らせて知らせた方が良くと思いました。かつ、クシュ人という異邦人を遣わすことによって、伝達者がアブシャロムを殺したことについて嫌疑が問われ万一ダビデが死刑にしても害がないように、と思ったのでしょう。

ところがアヒマアツはどうしても伝えに行きたいと言っています。王子が死んだのだから、という意味合いがまだ分かっていない様子です。そして、アヒマアツは森から離れてヨルダン川の流れている溪谷のところを走っていきました。ギルアデは非常に高低の起伏の激しいところですから、低地を走ったほうが早いのです。

18:24 ダビデは二つの門の間にすわっていた。見張りが城壁の門の屋根に上り、目を上げて見ていると、ただひとりで走って来る男がいた。

当時の多くの城の門は、外門と内門の二つがありました。壁が二重になっていて、その間に部屋がありました。その上に屋根があつて、そこに見張り塔がありました。

18:25 見張りが王に大声で告げると、王は言った。「ただひとりなら、吉報だろう。」その者がしだ

いに近づいて来たとき、18:26 見張りは、もうひとりの男が走って来るのを見た。見張りは門衛に叫んで言った。「ひとりで走って来る男がいます。」すると王は言った。「それも吉報を持って来ているのだ。」18:27 見張りは言った。「先に走っているのは、どうやらツァドクの子アヒマアツのように見えます。」王は言った。「あれは良い男だ。良い知らせを持って来るだろう。」18:28 アヒマアツは大声で王に「ごきげんはいかがでしょう。」と言って、地にひれ伏して、王に礼をした。彼は言った。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主は、王さまに手向かった者どもを、引き渡してくださいました。」18:29 王が、「若者アブシャロムは無事か。」と聞くと、アヒマアツは答えた。「ヨアブが王の家来のこのしもべを遣わすとき、私は、何か大騒ぎの起こるのを見ましたが、何があったのか知りません。」

王の関心事は戦いに勝つことではありませんでした。アブシャロムの安否だけでした。ところが、アヒマアツは早く伝えにきたのですが、その伝言には肝心の内容が欠けています。私たちがキリストを伝える時に、キリストをよく知って伝える必要がありますね。

18:30 王は言った。「わきへ退いて、そこに立っていなさい。」そこで彼はわきに退いて立っていた。18:31 するとクシュ人がはいて来て言った。「王さまにお知らせいたします。主は、きょう、あなたに立ち向かうすべての者の手から、あなたを救って、あなたのために正しいさばきをされました。」18:32 王はクシュ人に言った。「若者アブシャロムは無事か。」クシュ人は答えた。「王さまの敵、あなたに立ち向かって害を加えようとする者はすべて、あの若者のようになりますように。」18:33 すると王は身震いして、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。「わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。」

自分のしたことの過ち、また息子への愛が絡まって、ダビデがむせび泣いています。反逆の息子であっても、その罪を自分自身が負えばよかったのにと嘆いています。これが父の愛です。そして、父はキリストにあって、私たち反逆する者たちのために私たちの罪を負ってくださいました。

今回は、この悲しみから立ち上がるダビデから話が始まります。

2サムエル記16-18章 「愚かにされた助言」

1A 王への反抗 16

1B サウル家 1-14

2B 父への侮辱 15-23

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

2B 機能する諜報 15-29

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

2B 息子の安否 19-33

本文

サムエル記第二 16 章から学びます。16 章から 18 章は、私たちが前回学んだダビデの祈りに対する、神の応えになります。15 章 31 節にこうありました。「ダビデは、「アヒトフェルがアブシャロムの謀反に荷担している。」という知らせを受けたが、そのとき、ダビデは言った。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」」息子アブシャロムがヘブロンで自らをユダの王であると宣言しました。そして多くのイスラエル人がアブシャロムに付いていきました。その一人が、ダビデの議官であり、友であるアヒトフェルでした。彼は非常に優れた議官で、彼が助言することに従えば、その通りになっていきました。そのことを知っているダビデが、「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と祈ったのです。

人間的には、アヒトフェルがアブシャロムに付いたことで勝利が決定したのと当然でしたが、それを神が覆される、という内容をこれから読みます。

1A 王への反抗 16

そしてもう一つ、ダビデがエルサレムから逃げることによって、誰が真実にダビデに仕えていたのか、彼に忠誠を尽くしていたのかが明らかにされています。ダビデが力を持っている時は、皆が彼にひれ伏していましたが、そうではない時に自分の心の状態が明らかにされます。ダビデがエルサレムから出て行って、動き出したのがかつて王権を持っていたサウル家の者たちです。

1B サウル家 1-14

16:1 ダビデは山の頂から少し下った。見ると、メフィボシェテに仕える若い者ツィバが、王を迎えに来ていた。彼は、鞍を置いた一くびきのろばに、パン二百個、干しぶどう百ふさ、夏のくだもの百個、ぶどう酒一袋を載せていた。16:2 王はツィバに尋ねた。「これらは何のためか。」ツィバは答えた。「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため、パンと夏のくだものは若い者たちが食べるた

め、ぶどう酒は荒野で疲れた者が飲むためです。」16:3 王は言った。「あなたの主人の息子はどこにいるか。」ツィバは王に言った。「今、エルサレムにおられます。あの人は、『きょう、イスラエルの家は、私の父の王国を私に返してくれる。』と書いていました。」16:4 すると王はツィバに言った。「メフィボシェテのものはみな、今、あなたのものだ。」ツィバが言った。「王さま。あなたのご好意にあずかることができますように、伏してお願いいたします。」

ダビデは自分の町からキデロン(ケデロン)の谷を渡り、オリーブ山を上りました。頂から少し下ると、メフィボシェテに仕えるツィバが王を迎えました。覚えていますね、王ダビデがサウル家の者でヨナタンの子に恵みを施したいと言って、連れて来られたのがツィバでした。彼はサウル家の僕でした。ダビデは、サウルの地所をすべてメフィボシェテに返し、メフィボシェテ自身は王と共に食卓に着きます。さらにツィバに対しては、メフィボシェテの子に対して、その地所にある畑を耕して、作物が出来たら、それをメフィボシェテの子の食事にする、と言いつけました。ツィバはそれを受け入れましたが、僕である彼自身にも十五人の息子と十人の僕がいました(以上2サムエル9章)。

ここでツィバが主人メフィボシェテについて言っていることは、中傷です。メフィボシェテは王といっしょに行こうとしていたのですが、ツィバが彼を欺きました(19:26-27)。この若い者ツィバは、自分が豊かな者であるのに、メフィボシェテの下で働くのに満足していなかった、ということです。自分は力を持ち豊かなのに、なぜこの足なえの家に仕えなければいけないのか、という不満があったのでしょう。それで、この政変の動きにおいて、ダビデに良くすることによってメフィボシェテから奪い取ろうとしました。ツィバの前に「若い者」と付いていますね。使徒ペテロが第一の手紙の中で若い者に対して勧めを行なっています。「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。(5:5)」

メフィボシェテは、ダビデに対しても酷いことを行なっています。このような時に共に食事していたメフィボシェテが自分を裏切ったという知らせを聞いたら、どれだけ心が傷つくのか考えもせず自分の利益のためにそんな嘘を言ったのです。そしてダビデ自身、このような状況では理解できるのですが、ツィバの言うことをそのまま受け入れてしまったことは、早まった判断でした。私たちは悪い噂に対して、それに関わらないことが大切です。事実を確認するまで受け入れてはいけません。「歩き回って人を中傷する者は秘密を漏らす。くちびるを開く者とは交わるな。(箴言20:19)」

16:5 ダビデ王がバフリムまで来ると、ちょうど、サウルの家の一族のひとりが、そこから出て来た。その名はシムイといってゲラの子で、盛んにのろいのことばを吐きながら出て来た。

「バフリム」はオリーブ山を上ったところにあるベニヤミン族の地にある村です。

16:6 そしてダビデとダビデ王のすべての家来たちに向かって石を投げつけた。民と勇士たちはみな、王の右左にいた。16:7 シムイはのろってこう言った。「出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。16:8 主がサウルの家すべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王となったおまえに。主はおまえの息子アブシャロムの手で王位を渡した。今、おまえはわざわざに会うのだ。おまえは血まみれの男だから。」

ツィバはメフィボシェテについての中傷をしましたが、シムイはダビデに対して中傷しました。私たちはサムエル記第一、また第二の前半を読んでいて、シムイが言っていることが事実と正反対であることをよく知っています。彼は、今でこそ手を出さなかったその時を敢えて抑えて、サウルを殺すことをしませんでした。また、その將軍アブネルを快く迎えてイスラエルの統一を実現させようとしたし、サウルの息子イシュ・ボシェテを殺した者を死刑に処しました。主が、サウルが死ぬようにさせたのでありダビデではありません。

神の主権と選びによってダビデに王権が移りました。けれども、シムイは主が立てられたということを受け入れませんでした。そこで、全て起こっていることをダビデのせいにしたのです。主の恵みの選びを受け入れないということは、自らに災いをもたらします。私たちは、主に仕えている人、主に立てられていることを認め、受け入れていかなければいけません。

16:9 すると、ツェルヤの子アビシャイが王に言った。「この死に犬めが、王さまをのろってよいものですか。行って、あの首をはねさせてください。」16:10 王は言った。「ツェルヤの子らよ。これは私のことで、あなたがたには、かかわりのないことだ。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ。』と言われたからだ。だれが彼に、『おまえはどうしてこういうことをするのだ。』と言えようか。」16:11 ダビデはアビシャイと彼のすべての家来たちに言った。「見よ。私の身から出た私の子さえ、私のいのちをねらっている。今、このベニヤミン人としては、なおさらのことだ。ほうっておきなさい。彼にのろわせなさい。主が彼に命じられたのだから。16:12 たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」

アビシャイら、王を左右で守っている勇士たちは、シムイなど即座に殺すことができました。けれども、ダビデはかつてサウルに対して行ったように、シムイに対しても手を出さないように戒めました。主に裁きを委ねたのです。

ダビデは、一連の出来事を主が自分を懲らしめているものとして捉えています。自分の家から剣が離れないという、ナタンを通して与えられた主の言葉があります。そして事実、アブシャロムが自分の命を狙っているのです。そのような主の導きがあって、サウル家のシムイが罵ることも起こっているのは当然のこと、という見解です。このように、主が今何をしておられているのかを広い視点で眺め、小事を主に委ねて、大切なところに焦点を当てていく視点は必要です。

そしてダビデは、「たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」と言いました。今、自分自身がどのような心でいるのか、それを保つことが必要です。その心の態度が、希望ある将来を生み出します。

16:13 ダビデと彼の部下たちは道を進んで行った。シムイは、山の中腹をダビデと平行して歩きながら、のろったり、石を投げたり、ちりをかけたりしていた。16:14 王も、王とともにいった民もみな、疲れたので、そこでひと息ついた。

ここまでがサウル家の者たちの出方でした。次にアブシャロムたちがエルサレムに到着してからのことになります。

2B 父への侮辱 15-23

16:15 アブシャロムとすべての民、イスラエル人はエルサレムにはいった。アヒトフェルもいっしょであった。16:16 ダビデの友アルキ人フシャイがアブシャロムのところに来たとき、フシャイはアブシャロムに言った。「王さま。ばんざい。王さま。ばんざい。」16:17 アブシャロムはフシャイに言った。「これが、あなたの友への忠誠のあらわれなのか。なぜ、あなたは、あなたの友といっしょに行かなかったのか。」16:18 フシャイはアブシャロムに答えた。「いいえ、主と、この民、イスラエルのすべての人々とが選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。16:19 また、私はだれに仕えるべきでしょう。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなたの父上に仕えたように、あなたにもお仕えいたします。」

ダビデが、「アヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と言った時に、すぐに与えられた神の回答は、フシャイでした。彼がダビデのところに現れて、ダビデに付いていくと言いました。けれどもダビデは、アヒトフェルと同じように助言者としてすぐれていたフシャイを、このようにエルサレムに送り込んだのです。

フシャイは、アブシャロムの心を掴んでいます。アブシャロムのうぬぼれの二つの部分に触れています。一つは、ヤハウェなる方がアブシャロムを選ばれたのだと言っていること。これは神のお墨付きですと太鼓判を押しているのです。もう一つは、「私の友の子に仕えるべきではないか」とアブシャロムがダビデの後継者であり、その地位と権利を持っていることを訴えました。これで、アブシャロムの心を掴んだのです。

16:20 それで、アブシャロムはアヒトフェルに言った。「あなたがたは相談して、われわれはどうしたらよいか、意見を述べなさい。」16:21 アヒトフェルはアブシャロムに言った。「父上が王宮の留守番に残したそばめたちのところにおはいらください。全イスラエルが、あなたは父上に憎まれるようなことをされたと聞いたら、あなたに、くみする者はみな、勇気を出すでしょう。」16:22 こうしてアブシャロムのために屋上に天幕が張られ、アブシャロムは全イスラエルの目の前で、父のそば

めたちのところにはいった。

アヒトフェルの助言は、アブシャロムとダビデの和解を修復不可能にするものでした。王の妻やそばめのところに入るのは、その王権を乗っ取ることを意味する反逆行為でした。ヤコブの長男ルベンが、ヤコブのそばめビルハのところに入ったことを覚えているでしょうか？それゆえに、晩年のヤコブはルベンのことを預言した時に、その長子の権利が取られたことを示唆しています(創世49:4)。しかしアヒトフェルは、ここまで思い切ったことを行なうことで、アブシャロムに与する者たちが勇気を得ることを知っていました。

ここで、ナタンがダビデに告げたこと主の懲らしめが実現します。「主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう。』(2サムエル 12:11-12)」言い換えれば、このことをもってダビデがウリヤに対して行ったことに対する神の懲らしめは、完了したということです。主は、これから先ほどダビデが話したように、彼に幸せをもって報いてくださいます。「主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。(詩篇 103:9-11)」

16:23 当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はみな、ダビデにもアブシャロムにもそのように思われた。

しかし、このような天才的的確な助言を、神は打ち壊してくださいます。

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

17:1 アヒトフェルはさらにアブシャロムに言った。「私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、17:2 彼を襲います。ダビデは疲れて気力を失っているでしょう。私が、彼を恐れさせれば、彼といっしょにいるすべての民は逃げましょう。私は王だけを打ち殺します。17:3 私はすべての民をあなたのもとに連れ戻します。すべての者が帰って来るとき、あなたが求めているのはただひとりだけですから、民はみな、穏やかになるでしょう。」17:4 このことばはアブシャロムとイスラエルの全長老の気に入った。

このアヒトフェルの助言をアブシャロムが採用していたら、確実にダビデは殺されていたことでしょう。確かに先ほど読んだように、ダビデは疲れていました。気力も失っています。

ところで興味深いことに、アヒトフェルの口が滑っています。「王だけを打ち殺します」と言っています。アブシャロムが既にヘブロンで王になっているのに、ダビデを王と呼んでしまっています。そして、このアヒトフェルの助言には、彼の個人的な恨みが見えています。王を打ち殺すのは、私がすると書いています。

私たちは自分の心を見張る必要があります。苦みというのは、どんな理由があるにしても、その根を培っていつてはいけません。それはアヒトフェルのように、殺意にまで発展します。そしてアヒトフェルのように、他の人々を汚していきます。そしてアヒトフェルのように、自分自身を滅ぼします。殺意については、こうイエス様が語られました。「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。(マタイ 5:22)」使徒ヨハネもこう警告しています。「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。(1ヨハネ 3:15)」

そして他の人々を汚していくことについては、ヘブル書の著者はこう言っています。「そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩んだり、これによって多くの人汚されたりすることのないように、(ヘブル 12:15)」そして、自分自身を滅ぼしてしまうことについては、聖霊を悲しませるという言葉で使徒パウロがこう警告しています。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。無慈悲(苦み)、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。(エペソ 4:30-31)」

17:5 しかしアブシャロムは言った。「アルキ人フシャイを呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう。」
17:6 フシャイがアブシャロムのところに来ると、アブシャロムは彼に次のように言った。「アヒトフェルはこのように言ったが、われわれは彼のことに従ってよいものだろうか。もしいけなければ、あなたの意見を述べてみなさい。」17:7 するとフシャイはアブシャロムに言った。「このたびアヒトフェルの立てたはかりごとは良くありません。」17:8 フシャイはさらに言った。「あなたは父上とその部下が戦士であることをご存じです。しかも彼らは、野で子を奪われた雌熊のように気が荒なっています。また、あなたの父上は戦いに慣れた方ですから、民といっしょには夜を過ごさないでしょう。17:9 きっと今、ほら穴か、どこか、そんな所に隠れておられましょう。もし、民のある者が最初に倒れたら、それを聞く者は、『アブシャロムに従う民のうちに打たれた者が出た。』と言うでしょう。17:10 そうなると、たとい、獅子のような心を持つ力ある者でも、気がくじけます。全イスラエルは、あなたの父上が勇士であり、彼に従う者が力ある者であることをよく知っています。17:11 私のはかりごとはこうです。全イスラエルをダンからベエル・シェバに至るまで、海辺の砂のように数多くあなたのところに集めて、あなた自身が戦いに出られることです。17:12 われわれは、彼を見つけたら、その場で彼を攻め、露が地面に降りるように彼を襲い、彼や、共にいるすべての兵士た

ちを、ひとりも生かしておかないのです。17:13 もし彼がさらにどこかの町にはいるなら、全イスラエルでその町に綱をかけ、その町を川まで引きずって行って、そこに一つの石ころも残らないようにしましょう。」

まるでショーのような戦法です。ダンからベエル・シェバ、つまり全イスラエルが出兵します。そしてアブシャロム自身が先頭に立って戦います。人気スターのようにアブシャロムを担ぎ上げて、そして全イスラエルがダビデを倒すのです。アブシャロムの自惚れにフシャイは訴えました。さらにフシャイにはもう一つの思惑がありました。全イスラエルを出兵させ、その軍を編成するにはとても時間がかかります。その間にダビデをヨルダン川の向こう側に動かすことができます。つまり時間稼ぎです。

17:14 アブシャロムとイスラエルの民はみな言った。「アルキ人フシャイのはかりごとは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。」これは主がアブシャロムにわざわざをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。

ここが今日の学びの鍵となる聖句です。アブシャロムの自惚れをくすぐるその言葉を神は用いました。人がどんなに計画を練っても、主の御心だけが成るのです。アブシャロムの愚かさを用いて、アヒトフェルの賢いはかりごとを打ち壊すことを考えておられました。「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。(箴言 19:21)」ですから、前回私たちが学びましたように、主に委ねるのが優れているのです。自分自身で成し遂げようとするのではなく、主ご自身が成し遂げてくださるように委ねます。「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。(箴言 16:3)」

2B 機能する諜報 15-29

17:15 フシャイは祭司ツアドクとエブヤタルに言った。「アヒトフェルは、アブシャロムとイスラエルの長老たちにこれこれの助言をしたが、私は、これこれの助言をした。17:16 今、急いで人をやり、ダビデに、『今夜は荒野の草原で夜を過ごしてはいけません。ほんとうに、ぜひ、あちらへ渡って行かなければなりません。でないと、王をはじめ、いっしょにいる民全部にわざわざ降りかかるでしょう。』と告げなさい。」

祭司ツアドクとエブヤタルが、エルサレム内部を通達する諜報活動をするようになっていました。それでフシャイが二人にこれからのアブシャロムの動きを伝えます。とにかく、ヨルダン川を越える必要があります。それを急がせています。

17:17 ヨナタンとアヒマアツはエン・ロゲルにとどまっていたが、ひとりの女奴隷が行って彼らに告げ、彼らがダビデ王に告げに行くようになっていた。これは彼らが町にはいるのを見られることのないためであった。

ツァドクの息子がアヒアマツで、エブヤタルの息子がヨナタンです。彼らがダビデに伝達することになっていました。エン・ロゲルは、ダビデの町エルサレムの南にある、キデロンの谷とヒノムの谷が交差するところにある泉ですが、その辺りは人々がたくさん行き交うのであまり人目に付かないという利点がありました。

17:18 ところが、ひとりの若者が彼らを見て、アブシャロムに告げた。そこで彼らふたりは急いで去り、バフリムに住むある人の家に行った。その人の庭に井戸があったので、彼らはその中に降りた。17:19 その人の妻は、おおいを持って来て、井戸の口の上に広げ、その上に麦をまき散らしたので、だれにも知られなかった。17:20 アブシャロムの家来たちが、その女の家に来て言った。「アヒアマツとヨナタンはどこにいるのか。」女は彼らに答えた。「あの人たちは、ここを通り過ぎて川のほうへ行きました。」彼らは、捜したが見つけることができなかったので、エルサレムへ帰った。

バフリムは、あのシミイが出てきた所でしたが、そこにダビデ側につく人がいました。井戸とありますが、昔は貯水槽のようなものも井戸と呼び、必ずしも水が入っている訳ではありません。そこは絶好の場所でした。そして井戸の口は地面と同じ高さにあるので、覆いをつければどこにあるのか分からないのです。

17:21 彼らが去って後、ふたりは井戸から上がって来て、ダビデ王に知らせに行った。彼らはダビデに言った。「さあ、急いで川を渡ってください。アヒトフェルがあなたがたに対してこれこれのはかりごとを立てたからです。」17:22 そこで、ダビデと、ダビデのもとにいたすべての者たちとは出発して、ヨルダン川を渡った。夜明けまでにヨルダン川を渡りきれなかった者はひとりもいなかった。17:23 アヒトフェルは、自分のはかりごとが行なわれないのを見て、ろばに鞍を置き、自分の町の家に帰って行き、家を整理して、首をくくって死に、彼の父の墓に葬られた。

午前礼拝で学びましたように、アヒトフェルはこの時点でアブシャロムが死ぬことさえ予測していたと思います。さらにその先にある自分に対する処罰も見すえていました。それで、殺されるのではなく自ら命を絶ちました。

17:24 ダビデがマハナイムに着いたとき、アブシャロムは、彼とともにいるイスラエルのすべての人々とヨルダン川を渡った。17:25 アブシャロムはアマサをヨアブの代わりに軍団長に任命していた。アマサは、ヨアブの母ツェルヤの妹ナハシュの娘アビガルと結婚したイシュマエル人イテラという人の息子であった。

マハナイムは、ヨルダン川の東、ギルアデの地にあります。かつてサウルの息子イシュ・ボシェテが、そこからイスラエルの王となり、そしてヘブロンで王となったダビデと戦いました。そこに要塞として仕える城があったと考えられます。

そして軍団長ですがダビデにはヨアブが、そしてアブシャロムにはアマサというヨアブの従兄弟が付きました。

17:26 こうして、イスラエルとアブシャロムはギルアデの地に陣を敷いた。17:27 ダビデがマハナイムに来たとき、アモン人でラバの出のナハシュの子ショビと、ロ・デバルの出のアミエルの子マキルと、ログリムの出のギルアデ人バルジライとは、17:28 寝台、鉢、土器、小麦、大麦、小麦粉、炒り麦、そら豆、レンズ豆、炒り麦、17:29 蜂蜜、凝乳、羊、牛酪を、ダビデとその一行の食糧として持って来た。彼らは民が荒野で飢えて疲れ、渴いていると思ったからである。

ダビデを王として認め、このような苦しみの状況の時に助けの手を差し伸べた人物は、初めに驚くことにアモン人です。覚えていますか、ナハシュの子ハヌンは、ダビデに齒向かって戦いました。けれども同じナハシュの別の子ショビは、ダビデを王として仰いでいたのです。ダビデが真実を尽くす姿を彼は受け入れていたのです。そして次は、マキルですが、メフィボシェテがかつて住んでいた家の主がこのマキルです。彼も、メフィボシェテに恵みを施すダビデの姿を知っていました。そして地元の富豪バルジライがいます。

後にダビデはバルジライの子らに恵みを施します。いや、晩年のダビデがソロモンにバルジライの子らを食事の席に連らせなさいと命じます(1列王 2:7)。私たちがキリストに従うとは、苦しみの中にいる人々と一つになる、ということであろうと思われれます。マタイ 25 章には、イエス様が再臨されてから王として君臨される時に、飢えた者、裸の者、卑しめられている者に親切にした者たちに対して、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。(マタイ 25:40)」と言われました。

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

18:1 ダビデは彼とともにいる民を調べて、彼らの上に千人隊長、百人隊長を任命した。

アブシャロムたちがヨルダン川を渡って来ています。ダビデも、自分と共にいる民を編成し、態勢を整えています。

18:2a ダビデは民の三分の一をヨアブの指揮のもとに、三分の一をヨアブの兄弟ツエルヤの子アビシャイの指揮のもとに、三分の一をガテ人イタイの指揮のもとに配置した。

ヨアブとアビシャイはつねにダビデに忠実な指揮官ですが、イタイのことは覚えていますか？ペリシテのガテから来た者で、ダビデがエルサレムから離れる時にこう言い切った男です。「イタイは王に答えて言った。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。(15:21)」さっそく、王に仕え、王を守る

ための戦いをします。

18:2b 王は民に言った。「私自身もあなたがたといっしょに出たい。」18:3 すると民は言った。「あなたが出てはいけません。私たちがどんなに逃げても、彼らは私たちのことは何とも思わないでしょう。たとえ私たちの半分が死んでも、彼らは私たちのことは心に留めないでしょう。しかし、あなたは私たちの一万人に当たります。今、あなたは町にいて私たちを助けてくださるほうが良いのです。」18:4 王は彼らに言った。「あなたがたが良いと思うことを、私はしよう。」王は門のそばに立ち、すべての民は、百人、千人ごとに出て行った。

ダビデはかつて、アモン人との戦いで自分自身が出ていかず、バテ・シェバの裸を見ることになりました。その罪意識があるのかもしれませんが、自ら出ていくと言いました。けれども、一万人に値するというはその通りでした。彼らの助言を聞きます。

18:5 王はヨアブ、アビシャイ、イタイに命じて言った。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。」民はみな、王が隊長たち全部にアブシャロムのことについて命じているのを聞いていた。

これは、客観的に見れば決してできないことです。アブシャロムは反逆罪で死刑にならなければいけません。けれども、親心もあり、また自分の負い目もあります。

18:6 こうして、民はイスラエルを迎え撃つために戦場へ出て行った。戦いはエフライムの森で行なわれた。18:7 イスラエルの民はそこでダビデの家来たちに打ち負かされ、その日、その場所で多くの打たれた者が出、二万人が倒れた。18:8 戦いはこの地一帯に散り広がり、この日、剣で倒された者よりも、密林で行き倒れになった者のほうが多かった。

この「エフライムの森」とは、エフライム族のことではなく、ギルアデ地方にある森のことです。今のヨルダンに行けば、密生森林地帯はそこにはありません。聖書時代と今は大きく変わりました。けれども、主はこの密林によって彼らを行き倒れにするということをやさしました。他の箇所に出てくる戦いにおいても、実際に剣で倒れるよりも、天から降ってくる雹であるとか、同士討ちであるとか、主ご自身が戦ってくださっている姿を見ることができます。

18:9 アブシャロムはダビデの家来たちに出会った。アブシャロムは驃馬に乗っていたが、驃馬が大きな樫の木の茂った枝の下を通ったとき、アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かり、彼は宙づりになった。彼が乗っていた驃馬はそのまま行った。

アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かりました。まず、彼が驃馬に乗っているというのがおかしいです。馬でなければ戦うことができません。彼が単なるショーのために動いていたことがわかり

ます。そして、彼の頭が木に引っかかっていた、とありますが、これはもちろんあの長い髪の毛のせいです。彼の誇っていた髪の毛が、彼を殺すきっかけを作りました。

18:10 ひとりの男がそれを見て、ヨアブに告げて言った。「今、アブシャロムが樅の木に引っ掛かっているのを見て来ました。」18:11 ヨアブはこれを告げた者に言った。「いったい、おまえはそれを見ていて、なぜその場で地に打ち落とさなかったのか。私がおまえに銀十枚と帯一本を与えたのに。」18:12 その男はヨアブに言った。「たとい、私の手に銀千枚をいただいても、王のお子さまに手は下せません。王は私たちの聞いているところで、あなたとアビシャイとイタイとに、『若者アブシャロムに手を出すな。』と言って、お命じになっているからです。18:13 もし、私が自分のいのちをかけて、命令にそむいていたとしても、王には、何も隠すことはできません。そのとき、あなたは知らぬ顔をなさるでしょう。」18:14 ヨアブは、「こうしておまえとぐずぐずしてはおられない。」と言って、手に三本の槍を取り、まだ樅の木の中真中に引っ掛かったまま生きていたアブシャロムの心臓を突き通した。18:15 ヨアブの道具持ちの十人の若者たちも、アブシャロムを取り巻いて彼を打ち殺した。18:16 ヨアブが角笛を吹き鳴らすと、民はイスラエルを追うのをやめて帰って来た。ヨアブが民を引き止めたからである。

ヨアブというのは、複雑な人物です。彼は、ダビデに猛烈な忠誠を持っている男でした。ダビデの益のため、またイスラエルの国益のためには、どんな犠牲も厭わない人物でした。しかし、彼はダビデの命令をこのようにいとも簡単に無視するような不従順な男でした。ダビデがアブシャロムを罰しないことは、ダビデのためにも、またイスラエルのためにもよくありません。正義は執行されなければいけないからです。そこで、ダビデはヨアブには口を出すことができません。けれども、彼の無慈悲と冷酷さはダビデの持っている柔和さとはあまりにもかけ離れていました。ずっと後に、ダビデの死後にヨアブがソロモンによって罰せられます。

ところでアブシャロムですが、彼は十人のダビデのそばめを凌辱しましたが、ここで十人のヨアブの道具持ちによって殺されています。自分の行ったことの報いを受けているのです。

18:17 人々はアブシャロムを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に非常に大きな石くれの山を積み上げた。イスラエルはみな、おのおの自分の天幕に逃げ帰っていた。

反逆者に対する見せしめとして、イスラエル人はこのように石を積み上げることをしました。

18:18 アブシャロムは存命中、王の谷に自分のために一本の柱を立てていた。「私の名を覚えてくれる息子が私にはいないから。」と考えていたからである。彼はその柱に自分の名をつけていた。それは、アブシャロムの記念碑と呼ばれた。今日もそうである。

王の谷は、キデロンの谷の南にあります。今、「アブシャロムの墓」と呼ばれているものがありま

すが、それは紀元後に立てられたもので本物ではありません。

彼は哀れな人です。自分がこれだけ派手なことを行なっているが、自分を覚えてくれる人はないだろうと思っていました。息子がいない、と言っていますが、彼には三人いたはず(15:27)。息子が早死にしてしまったのか、あるいは息子でさえ自分を覚えてはいてくれないだろう、と言っているのです。本当に可哀想な人です。

2B 息子の安否 19-33

18:19 ツアドクの子アヒマアツは言った。「私は王のところへ走って行って、主が敵の手から王を救って王のために正しいさばきをされたと知らせたいのですが。」18:20 ヨアブは彼に言った。「きょう、あなたは知らせるのではない。ほかの日に知らせなさい。きょうは、知らせないがよい。王子が死んだのだから。」18:21 ヨアブはクシュ人に言った。「行って、あなたの見たことを王に告げなさい。」クシュ人はヨアブに礼をして、走り去った。18:22 ツアドクの子アヒマアツは再びヨアブに言った。「どんなことがあっても、やはり私もクシュ人のあとを追って走って行きたいのです。」ヨアブは言った。「わが子よ。なぜ、あなたは走って行きたいのか。知らせに対して、何のほうびも得られないのに。」18:23 「しかしどんなことがあっても、走って行きたいのです。」ヨアブは「走って行きなさい。」と言った。アヒマアツは低地への道を走って行き、クシュ人を追い越した。

アヒマアツは、ついに主が王に救いを与えてくださったことを非常に喜んでいますが。こんな喜ばしい知らせを伝えない訳にはいけないと思いました。けれどもヨアブはよく知っています。アブシャロムが死んだのだから、これはダビデにとって悲報であることを知っていました。それで少し遅らせて知らせた方が良くと思いました。かつ、クシュ人という異邦人を遣わすことによって、伝達者がアブシャロムを殺したことについて嫌疑が問われ万一ダビデが死刑にしても害がないように、と思ったのでしょう。

ところがアヒマアツはどうしても伝えに行きたいと言っています。王子が死んだのだから、という意味合いがまだ分かっていない様子です。そして、アヒマアツは森から離れてヨルダン川の流れている溪谷のところを走っていきました。ギルアデは非常に高低の起伏の激しいところですから、低地を走ったほうが早いのです。

18:24 ダビデは二つの門の間にすわっていた。見張りが城壁の門の屋根に上り、目を上げて見ていると、ただひとりで走って来る男がいた。

当時の多くの城の門は、外門と内門の二つがありました。壁が二重になっていて、その間に部屋がありました。その上に屋根があつて、そこに見張り塔がありました。

18:25 見張りが王に大声で告げると、王は言った。「ただひとりなら、吉報だろう。」その者がしだ

いに近づいて来たとき、18:26 見張りは、もうひとりの男が走って来るのを見た。見張りは門衛に叫んで言った。「ひとりで走って来る男がいます。」すると王は言った。「それも吉報を持って来ているのだ。」18:27 見張りは言った。「先に走っているのは、どうやらツァドクの子アヒマアツのように見えます。」王は言った。「あれは良い男だ。良い知らせを持って来るだろう。」18:28 アヒマアツは大声で王に「ごきげんはいかがでしょう。」と言って、地にひれ伏して、王に礼をした。彼は言った。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主は、王さまに手向かった者どもを、引き渡してくださいました。」18:29 王が、「若者アブシャロムは無事か。」と聞くと、アヒマアツは答えた。「ヨアブが王の家来のこのしもべを遣わすとき、私は、何か大騒ぎの起こるのを見ましたが、何があったのか知りません。」

王の関心事は戦いに勝つことではありませんでした。アブシャロムの安否だけでした。ところが、アヒマアツは早く伝えにきたのですが、その伝言には肝心の内容が欠けています。私たちがキリストを伝える時に、キリストをよく知って伝える必要がありますね。

18:30 王は言った。「わきへ退いて、そこに立っていなさい。」そこで彼はわきに退いて立っていた。18:31 するとクシュ人がはいて来て言った。「王さまにお知らせいたします。主は、きょう、あなたに立ち向かうすべての者の手から、あなたを救って、あなたのために正しいさばきをされました。」18:32 王はクシュ人に言った。「若者アブシャロムは無事か。」クシュ人は答えた。「王さまの敵、あなたに立ち向かって害を加えようとする者はすべて、あの若者のようになりますように。」18:33 すると王は身震いして、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。「わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。」

自分のしたことの過ち、また息子への愛が絡まって、ダビデがむせび泣いています。反逆の息子であっても、その罪を自分自身が負えばよかったのにと嘆いています。これが父の愛です。そして、父はキリストにあって、私たち反逆する者たちのために私たちの罪を負ってくださいました。

今回は、この悲しみから立ち上がるダビデから話が始まります。

2サムエル記16-18章 「愚かにされた助言」

1A 王への反抗 16

1B サウル家 1-14

2B 父への侮辱 15-23

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

2B 機能する諜報 15-29

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

2B 息子の安否 19-33

本文

サムエル記第二 16 章から学びます。16 章から 18 章は、私たちが前回学んだダビデの祈りに対する、神の応えになります。15 章 31 節にこうありました。「ダビデは、「アヒトフェルがアブシャロムの謀反に荷担している。」という知らせを受けたが、そのとき、ダビデは言った。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」」息子アブシャロムがヘブロンで自らをユダの王であると宣言しました。そして多くのイスラエル人がアブシャロムに付いていきました。その一人が、ダビデの議官であり、友であるアヒトフェルでした。彼は非常に優れた議官で、彼が助言することに従えば、その通りになっていきました。そのことを知っているダビデが、「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と祈ったのです。

人間的には、アヒトフェルがアブシャロムに付いたことで勝利が決定したのと当然でしたが、それを神が覆される、という内容をこれから読みます。

1A 王への反抗 16

そしてもう一つ、ダビデがエルサレムから逃げることによって、誰が真実にダビデに仕えていたのか、彼に忠誠を尽くしていたのかが明らかにされています。ダビデが力を持っている時は、皆が彼にひれ伏していましたが、そうではない時に自分の心の状態が明らかにされます。ダビデがエルサレムから出て行って、動き出したのがかつて王権を持っていたサウル家の者たちです。

1B サウル家 1-14

16:1 ダビデは山の頂から少し下った。見ると、メフィボシェテに仕える若い者ツィバが、王を迎えに来ていた。彼は、鞍を置いた一くびきのろばに、パン二百個、干しぶどう百ふさ、夏のくだもの百個、ぶどう酒一袋を載せていた。16:2 王はツィバに尋ねた。「これらは何のためか。」ツィバは答えた。「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため、パンと夏のくだものは若い者たちが食べるた

め、ぶどう酒は荒野で疲れた者が飲むためです。」16:3 王は言った。「あなたの主人の息子はどこにいるか。」ツィバは王に言った。「今、エルサレムにおられます。あの人は、『きょう、イスラエルの家は、私の父の王国を私に返してくれる。』と書いていました。」16:4 すると王はツィバに言った。「メフィボシェテのものはみな、今、あなたのものだ。」ツィバが言った。「王さま。あなたのご好意にあずかることができますように、伏してお願いいたします。」

ダビデは自分の町からキデロン(ケデロン)の谷を渡り、オリーブ山を上りました。頂から少し下ると、メフィボシェテに仕えるツィバが王を迎えました。覚えていますね、王ダビデがサウル家の者でヨナタンの子に恵みを施したいと言って、連れて来られたのがツィバでした。彼はサウル家の僕でした。ダビデは、サウルの地所をすべてメフィボシェテに返し、メフィボシェテ自身は王と共に食卓に着きます。さらにツィバに対しては、メフィボシェテの子に対して、その地所にある畑を耕して、作物が出来たら、それをメフィボシェテの子の食事にする、と言いつけました。ツィバはそれを受け入れましたが、僕である彼自身にも十五人の息子と十人の僕がいました(以上2サムエル9章)。

ここでツィバが主人メフィボシェテについて言っていることは、中傷です。メフィボシェテは王といっしょに行こうとしていたのですが、ツィバが彼を欺きました(19:26-27)。この若い者ツィバは、自分が豊かな者であるのに、メフィボシェテの下で働くのに満足していなかった、ということです。自分は力を持ち豊かなのに、なぜこの足なえの家に仕えなければいけないのか、という不満があったのでしょう。それで、この政変の動きにおいて、ダビデに良くすることによってメフィボシェテから奪い取ろうとしました。ツィバの前に「若い者」と付いていますね。使徒ペテロが第一の手紙の中で若い者に対して勧めを行なっています。「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。(5:5)」

メフィボシェテは、ダビデに対しても酷いことを行なっています。このような時に共に食事していたメフィボシェテが自分を裏切ったという知らせを聞いたら、どれだけ心が傷つくのか考えもせず自分の利益のためにそんな嘘を言ったのです。そしてダビデ自身、このような状況では理解できるのですが、ツィバの言うことをそのまま受け入れてしまったことは、早まった判断でした。私たちは悪い噂に対して、それに関わらないことが大切です。事実を確認するまで受け入れてはいけません。「歩き回って人を中傷する者は秘密を漏らす。くちびるを開く者とは交わるな。(箴言20:19)」

16:5 ダビデ王がバフリムまで来ると、ちょうど、サウルの家の一族のひとりが、そこから出て来た。その名はシムイといってゲラの子で、盛んにのろいのことばを吐きながら出て来た。

「バフリム」はオリーブ山を上ったところにあるベニヤミン族の地にある村です。

16:6 そしてダビデとダビデ王のすべての家来たちに向かって石を投げつけた。民と勇士たちはみな、王の右左にいた。16:7 シムイはのろってこう言った。「出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。16:8 主がサウルの家すべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王となったおまえに。主はおまえの息子アブシャロムの手で王位を渡した。今、おまえはわざわざに会うのだ。おまえは血まみれの男だから。」

ツィバはメフィボシェテについての中傷をしましたが、シムイはダビデに対して中傷しました。私たちはサムエル記第一、また第二の前半を読んでいて、シムイが言っていることが事実と正反対であることをよく知っています。彼は、今でこそ手を出さなかったその時を敢えて抑えて、サウルを殺すことをしませんでした。また、その將軍アブネルを快く迎えてイスラエルの統一を実現させようとしたし、サウルの息子イシュ・ボシェテを殺した者を死刑に処しました。主が、サウルが死ぬようにさせたのでありダビデではありません。

神の主権と選びによってダビデに王権が移りました。けれども、シムイは主が立てられたということを受け入れませんでした。そこで、全て起こっていることをダビデのせいにしたのです。主の恵みの選びを受け入れないということは、自らに災いをもたらします。私たちは、主に仕えている人、主に立てられていることを認め、受け入れていかなければいけません。

16:9 すると、ツェルヤの子アビシャイが王に言った。「この死に犬めが、王さまをのろってよいものですか。行って、あの首をはねさせてください。」16:10 王は言った。「ツェルヤの子らよ。これは私のことで、あなたがたには、かかわりのないことだ。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ。』と言われたからだ。だれが彼に、『おまえはどうしてこういうことをするのだ。』と言えようか。」16:11 ダビデはアビシャイと彼のすべての家来たちに言った。「見よ。私の身から出た私の子さえ、私のいのちをねらっている。今、このベニヤミン人としては、なおさらのことだ。ほうっておきなさい。彼にのろわせなさい。主が彼に命じられたのだから。16:12 たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」

アビシャイら、王を左右で守っている勇士たちは、シムイなど即座に殺すことができました。けれども、ダビデはかつてサウルに対して行ったように、シムイに対しても手を出さないように戒めました。主に裁きを委ねたのです。

ダビデは、一連の出来事を主が自分を懲らしめているものとして捉えています。自分の家から剣が離れないという、ナタンを通して与えられた主の言葉があります。そして事実、アブシャロムが自分の命を狙っているのです。そのような主の導きがあって、サウル家のシムイが罵ることも起こっているのは当然のこと、という見解です。このように、主が今何をしておられているのかを広い視点で眺め、小事を主に委ねて、大切なところに焦点を当てていく視点は必要です。

そしてダビデは、「たぶん、主は私の心をご覧になり、主は、きょうの彼ののろいに代えて、私にしあわせを報いてくださるだろう。」と言いました。今、自分自身がどのような心でいるのか、それを保つことが必要です。その心の態度が、希望ある将来を生み出します。

16:13 ダビデと彼の部下たちは道を進んで行った。シムイは、山の中腹をダビデと平行して歩きながら、のろったり、石を投げたり、ちりをかけたりしていた。16:14 王も、王とともにいった民もみな、疲れたので、そこでひと息ついた。

ここまでがサウル家の者たちの出方でした。次にアブシャロムたちがエルサレムに到着してからのことになります。

2B 父への侮辱 15-23

16:15 アブシャロムとすべての民、イスラエル人はエルサレムにはいった。アヒトフェルもいっしょであった。16:16 ダビデの友アルキ人フシャイがアブシャロムのところに来たとき、フシャイはアブシャロムに言った。「王さま。ばんざい。王さま。ばんざい。」16:17 アブシャロムはフシャイに言った。「これが、あなたの友への忠誠のあらわれなのか。なぜ、あなたは、あなたの友といっしょに行かなかったのか。」16:18 フシャイはアブシャロムに答えた。「いいえ、主と、この民、イスラエルのすべての人々とが選んだ方に私はつき、その方といっしょにいたいのです。16:19 また、私はだれに仕えるべきでしょう。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなたの父上に仕えたように、あなたにもお仕えいたします。」

ダビデが、「アヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と言った時に、すぐに与えられた神の回答は、フシャイでした。彼がダビデのところに現れて、ダビデに付いていくと言いました。けれどもダビデは、アヒトフェルと同じように助言者としてすぐれていたフシャイを、このようにエルサレムに送り込んだのです。

フシャイは、アブシャロムの心を掴んでいます。アブシャロムのうぬぼれの二つの部分に触れています。一つは、ヤハウェなる方がアブシャロムを選ばれたのだと言っていること。これは神のお墨付きですと太鼓判を押しているのです。もう一つは、「私の友の子に仕えるべきではないか」とアブシャロムがダビデの後継者であり、その地位と権利を持っていることを訴えました。これで、アブシャロムの心を掴んだのです。

16:20 それで、アブシャロムはアヒトフェルに言った。「あなたがたは相談して、われわれはどうしたらよいか、意見を述べなさい。」16:21 アヒトフェルはアブシャロムに言った。「父上が王宮の留守番に残したそばめたちのところにおはいらください。全イスラエルが、あなたは父上に憎まれるようなことをされたと聞くなり、あなたに、くみする者はみな、勇気を出すでしょう。」16:22 こうしてアブシャロムのために屋上に天幕が張られ、アブシャロムは全イスラエルの目の前で、父のそば

めたちのところにはいった。

アヒトフェルの助言は、アブシャロムとダビデの和解を修復不可能にするものでした。王の妻やそばめのところに入るのは、その王権を乗っ取ることを意味する反逆行為でした。ヤコブの長男ルベンが、ヤコブのそばめビルハのところに入ったことを覚えているでしょうか？それゆえに、晩年のヤコブはルベンのことを預言した時に、その長子の権利が取られたことを示唆しています(創世49:4)。しかしアヒトフェルは、ここまで思い切ったことを行なうことで、アブシャロムに与する者たちが勇気を得ることを知っていました。

ここで、ナタンがダビデに告げたこと主の懲らしめが実現します。「主はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行なおう。』(2サムエル 12:11-12)」言い換えれば、このことをもってダビデがウリヤに対して行ったことに対する神の懲らしめは、完了したということです。主は、これから先ほどダビデが話したように、彼に幸せをもって報いてくださいます。「主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。(詩篇 103:9-11)」

16:23 当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はみな、ダビデにもアブシャロムにもそのように思われた。

しかし、このような天才的的確な助言を、神は打ち壊してくださいます。

2A 主の打ち壊された助言 17

1B 対立する助言 1-14

17:1 アヒトフェルはさらにアブシャロムに言った。「私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、17:2 彼を襲います。ダビデは疲れて気力を失っているでしょう。私が、彼を恐れさせれば、彼といっしょにいるすべての民は逃げましょう。私は王だけを打ち殺します。17:3 私はすべての民をあなたのもとに連れ戻します。すべての者が帰って来るとき、あなたが求めているのはただひとりだけですから、民はみな、穏やかになるでしょう。」17:4 このことばはアブシャロムとイスラエルの全長老の気に入った。

このアヒトフェルの助言をアブシャロムが採用していたら、確実にダビデは殺されていたことでしょう。確かに先ほど読んだように、ダビデは疲れていました。気力も失っています。

ところで興味深いことに、アヒトフェルの口が滑っています。「王だけを打ち殺します」と言っています。アブシャロムが既にヘブロンで王になっているのに、ダビデを王と呼んでしまっています。そして、このアヒトフェルの助言には、彼の個人的な恨みが見えています。王を打ち殺すのは、私がすると断言しています。

私たちは自分の心を見張る必要があります。苦みというのは、どんな理由があるにしても、その根を培っていつてはいけません。それはアヒトフェルのように、殺意にまで発展します。そしてアヒトフェルのように、他の人々を汚していきます。そしてアヒトフェルのように、自分自身を滅ぼします。殺意については、こうイエス様が語られました。「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。(マタイ 5:22)」使徒ヨハネもこう警告しています。「兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。(1ヨハネ 3:15)」

そして他の人々を汚していくことについては、ヘブル書の著者はこう断言しています。「そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩んだり、これによって多くの人汚されたりすることのないように、(ヘブル 12:15)」そして、自分自身を滅ぼしてしまうことについては、聖霊を悲しませるという言葉で使徒パウロがこう警告しています。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。無慈悲(苦み)、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。(エペソ 4:30-31)」

17:5 しかしアブシャロムは言った。「アルキ人フシャイを呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう。」
17:6 フシャイがアブシャロムのところに来ると、アブシャロムは彼に次のように言った。「アヒトフェルはこのように言ったが、われわれは彼のことに従ってよいものだろうか。もしいけなければ、あなたの意見を述べてみなさい。」17:7 するとフシャイはアブシャロムに言った。「このたびアヒトフェルの立てたはかりごとは良くありません。」17:8 フシャイはさらに言った。「あなたは父上とその部下が戦士であることをご存じです。しかも彼らは、野で子を奪われた雌熊のように気が荒くなっています。また、あなたの父上は戦いに慣れた方ですから、民といっしょには夜を過ごさないでしょう。17:9 きっと今、ほら穴か、どこか、そんな所に隠れておられましょう。もし、民のある者が最初に倒れたら、それを聞く者は、『アブシャロムに従う民のうちに打たれた者が出た。』と言うでしょう。17:10 そうなると、たとい、獅子のような心を持つ力ある者でも、気がくじけます。全イスラエルは、あなたの父上が勇士であり、彼に従う者が力ある者であることをよく知っています。17:11 私のはかりごとはこうです。全イスラエルをダンからベエル・シェバに至るまで、海辺の砂のように数多くあなたのところに集めて、あなた自身が戦いに出られることです。17:12 われわれは、彼を見つけたら、その場で彼を攻め、露が地面に降りるように彼を襲い、彼や、共にいるすべての兵士た

ちを、ひとりも生かしておかないのです。17:13 もし彼がさらにどこかの町にはいるなら、全イスラエルでその町に綱をかけ、その町を川まで引きずって行って、そこに一つの石ころも残らないようにしましょう。」

まるでショーのような戦法です。ダンからベエル・シェバ、つまり全イスラエルが出兵します。そしてアブシャロム自身が先頭に立って戦います。人気スターのようにアブシャロムを担ぎ上げて、そして全イスラエルがダビデを倒すのです。アブシャロムの自惚れにフシャイは訴えました。さらにフシャイにはもう一つの思惑がありました。全イスラエルを出兵させ、その軍を編成するにはとても時間がかかります。その間にダビデをヨルダン川の向こう側に動かすことができます。つまり時間稼ぎです。

17:14 アブシャロムとイスラエルの民はみな言った。「アルキ人フシャイのはかりごとは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。」これは主がアブシャロムにわざわいをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。

ここが今日の学びの鍵となる聖句です。アブシャロムの自惚れをくすぐるその言葉を神は用いました。人がどんなに計画を練っても、主の御心だけが成るのです。アブシャロムの愚かさを用いて、アヒトフェルの賢いはかりごとを打ち壊すことを考えておられました。「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。(箴言 19:21)」ですから、前回私たちが学びましたように、主に委ねるのが優れているのです。自分自身で成し遂げようとするのではなく、主ご自身が成し遂げてくださるように委ねます。「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。(箴言 16:3)」

2B 機能する諜報 15-29

17:15 フシャイは祭司ツアドクとエブヤタルに言った。「アヒトフェルは、アブシャロムとイスラエルの長老たちにこれこれの助言をしたが、私は、これこれの助言をした。17:16 今、急いで人をやり、ダビデに、『今夜は荒野の草原で夜を過ごしてはいけません。ほんとうに、ぜひ、あちらへ渡って行かなければなりません。でないと、王をはじめ、いっしょにいる民全部にわざわいが降りかかるでしょう。』と告げなさい。」

祭司ツアドクとエブヤタルが、エルサレム内部を通達する諜報活動をするようになっていました。それでフシャイが二人にこれからのアブシャロムの動きを伝えます。とにかく、ヨルダン川を越える必要があります。それを急がせています。

17:17 ヨナタンとアヒマアツはエン・ロゲルにとどまっていたが、ひとりの女奴隷が行って彼らに告げ、彼らがダビデ王に告げに行くようになっていた。これは彼らが町にはいるのを見られることのないためであった。

ツァドクの息子がアヒアマツで、エブヤタルの息子がヨナタンです。彼らがダビデに伝達することになっていました。エン・ロゲルは、ダビデの町エルサレムの南にある、キデロンの谷とヒノムの谷が交差するところにある泉ですが、その辺りは人々がたくさん行き交うのであまり人目に付かないという利点がありました。

17:18 ところが、ひとりの若者が彼らを見て、アブシャロムに告げた。そこで彼らふたりは急いで去り、バフリムに住むある人の家に行った。その人の庭に井戸があったので、彼らはその中に降りた。17:19 その人の妻は、おおいを持って来て、井戸の口の上に広げ、その上に麦をまき散らしたので、だれにも知られなかった。17:20 アブシャロムの家来たちが、その女の家に来て言った。「アヒアマツとヨナタンはどこにいるのか。」女は彼らに答えた。「あの人たちは、ここを通り過ぎて川のほうへ行きました。」彼らは、捜したが見つけることができなかったので、エルサレムへ帰った。

バフリムは、あのシミイが出てきた所でしたが、そこにダビデ側につく人がいました。井戸とありますが、昔は貯水槽のようなものも井戸と呼び、必ずしも水が入っている訳ではありません。そこは絶好の場所でした。そして井戸の口は地面と同じ高さにあるので、覆いをつければどこにあるのか分からないのです。

17:21 彼らが去って後、ふたりは井戸から上がって来て、ダビデ王に知らせに行った。彼らはダビデに言った。「さあ、急いで川を渡ってください。アヒトフェルがあなたがたに対してこれこれのはかりごとを立てたからです。」17:22 そこで、ダビデと、ダビデのもとにいたすべての者たちとは出発して、ヨルダン川を渡った。夜明けまでにヨルダン川を渡りきれなかった者はひとりもいなかった。17:23 アヒトフェルは、自分のはかりごとが行なわれないのを見て、ろばに鞍を置き、自分の町の家に帰って行き、家を整理して、首をくくって死に、彼の父の墓に葬られた。

午前礼拝で学びましたように、アヒトフェルはこの時点でアブシャロムが死ぬことさえ予測していたと思います。さらにその先にある自分に対する処罰も見すえていました。それで、殺されるのではなく自ら命を絶ちました。

17:24 ダビデがマハナイムに着いたとき、アブシャロムは、彼とともにいるイスラエルのすべての人々とヨルダン川を渡った。17:25 アブシャロムはアマサをヨアブの代わりに軍団長に任命していた。アマサは、ヨアブの母ツェルヤの妹ナハシュの娘アビガルと結婚したイシュマエル人イテラという人の息子であった。

マハナイムは、ヨルダン川の東、ギルアデの地にあります。かつてサウルの息子イシュ・ボシェテが、そこからイスラエルの王となり、そしてヘブロンで王となったダビデと戦いました。そこに要塞として仕える城があったと考えられます。

そして軍団長ですがダビデにはヨアブが、そしてアブシャロムにはアマサというヨアブの従兄弟が付きました。

17:26 こうして、イスラエルとアブシャロムはギルアデの地に陣を敷いた。17:27 ダビデがマハナイムに来たとき、アモン人でラバの出のナハシュの子ショビと、ロ・デバルの出のアミエルの子マキルと、ログリムの出のギルアデ人バルジライとは、17:28 寝台、鉢、土器、小麦、大麦、小麦粉、炒り麦、そら豆、レンズ豆、炒り麦、17:29 蜂蜜、凝乳、羊、牛酪を、ダビデとその一行の食糧として持って来た。彼らは民が荒野で飢えて疲れ、渴いていると思ったからである。

ダビデを王として認め、このような苦しみの状況の時に助けの手を差し伸べた人物は、初めに驚くことにアモン人です。覚えていますか、ナハシュの子ハヌンは、ダビデに齒向かって戦いました。けれども同じナハシュの別の子ショビは、ダビデを王として仰いでいたのです。ダビデが真実を尽くす姿を彼は受け入れていたのです。そして次は、マキルですが、メフィボシェテがかつて住んでいた家の主がこのマキルです。彼も、メフィボシェテに恵みを施すダビデの姿を知っていました。そして地元の富豪バルジライがいます。

後にダビデはバルジライの子らに恵みを施します。いや、晩年のダビデがソロモンにバルジライの子らを食事の席に連らせなさいと命じます(1列王 2:7)。私たちがキリストに従うとは、苦しみの中にいる人々と一つになる、ということであろうと思われれます。マタイ 25 章には、イエス様が再臨されてから王として君臨される時に、飢えた者、裸の者、卑しめられている者に親切にした者たちに対して、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。(マタイ 25:40)」と言われました。

3A 敵からの救い 18

1B 息子の死 1-18

18:1 ダビデは彼とともにいる民を調べて、彼らの上に千人隊長、百人隊長を任命した。

アブシャロムたちがヨルダン川を渡って来ています。ダビデも、自分と共にいる民を編成し、態勢を整えています。

18:2a ダビデは民の三分の一をヨアブの指揮のもとに、三分の一をヨアブの兄弟ツエルヤの子アビシャイの指揮のもとに、三分の一をガテ人イタイの指揮のもとに配置した。

ヨアブとアビシャイはつねにダビデに忠実な指揮官ですが、イタイのことは覚えていますか？ペリシテのガテから来た者で、ダビデがエルサレムから離れる時にこう言い切った男です。「イタイは王に答えて言った。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにいます。(15:21)」さっそく、王に仕え、王を守る

ための戦いをします。

18:2b 王は民に言った。「私自身もあなたがたといっしょに出たい。」18:3 すると民は言った。「あなたが出てはいけません。私たちがどんなに逃げても、彼らは私たちのことは何とも思わないでしょう。たとえ私たちの半分が死んでも、彼らは私たちのことは心に留めないでしょう。しかし、あなたは私たちの一万人に当たります。今、あなたは町にいて私たちを助けてくださるほうが良いのです。」18:4 王は彼らに言った。「あなたがたが良いと思うことを、私はしよう。」王は門のそばに立ち、すべての民は、百人、千人ごとに出て行った。

ダビデはかつて、アモン人との戦いで自分自身が出ていかず、バテ・シェバの裸を見ることになりました。その罪意識があるのかもしれませんが、自ら出ていくと言いました。けれども、一万人に値するというはその通りでした。彼らの助言を聞きます。

18:5 王はヨアブ、アビシャイ、イタイに命じて言った。「私に免じて、若者アブシャロムをゆるやかに扱ってくれ。」民はみな、王が隊長たち全部にアブシャロムのことについて命じているのを聞いていた。

これは、客観的に見れば決してできないことです。アブシャロムは反逆罪で死刑にならなければいけません。けれども、親心もあり、また自分の負い目もあります。

18:6 こうして、民はイスラエルを迎え撃つために戦場へ出て行った。戦いはエフライムの森で行なわれた。18:7 イスラエルの民はそこでダビデの家来たちに打ち負かされ、その日、その場所で多くの打たれた者が出、二万人が倒れた。18:8 戦いはこの地一帯に散り広がり、この日、剣で倒された者よりも、密林で行き倒れになった者のほうが多かった。

この「エフライムの森」とは、エフライム族のことではなく、ギルアデ地方にある森のことです。今のヨルダンに行けば、密生森林地帯はそこにはありません。聖書時代と今は大きく変わりました。けれども、主はこの密林によって彼らを行き倒れにするということをなさいました。他の箇所に出てくる戦いにおいても、実際に剣で倒れるよりも、天から降ってくる雹であるとか、同士討ちであるとか、主ご自身が戦ってくださっている姿を見ることができます。

18:9 アブシャロムはダビデの家来たちに出会った。アブシャロムは騾馬に乗っていたが、騾馬が大きな樫の木の茂った枝の下を通ったとき、アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かり、彼は宙づりになった。彼が乗っていた騾馬はそのまま行った。

アブシャロムの頭が樫の木に引っ掛かりました。まず、彼が騾馬に乗っているというのがおかしいです。馬でなければ戦うことができません。彼が単なるショーのために動いていたことがわかり

ます。そして、彼の頭が木に引っかかっていた、とありますが、これはもちろんあの長い髪の毛のせいです。彼の誇っていた髪の毛が、彼を殺すきっかけを作りました。

18:10 ひとりの男がそれを見て、ヨアブに告げて言った。「今、アブシャロムが樅の木に引っ掛かっているのを見て来ました。」18:11 ヨアブはこれを告げた者に言った。「いったい、おまえはそれを見ていて、なぜその場で地に打ち落とさなかったのか。私がおまえに銀十枚と帯一本を与えたのに。」18:12 その男はヨアブに言った。「たとい、私の手に銀千枚をいただいても、王のお子さまに手は下せません。王は私たちの聞いているところで、あなたとアビシャイとイタイとに、『若者アブシャロムに手を出すな。』と言って、お命じになっているからです。18:13 もし、私が自分のいのちをかけて、命令にそむいていたとしても、王には、何も隠すことはできません。そのとき、あなたは知らぬ顔をなさるでしょう。」18:14 ヨアブは、「こうしておまえとぐずぐずしてはおられない。」と言って、手に三本の槍を取り、まだ樅の木の中真中に引っ掛かったまま生きていたアブシャロムの心臓を突き通した。18:15 ヨアブの道具持ちの十人の若者たちも、アブシャロムを取り巻いて彼を打ち殺した。18:16 ヨアブが角笛を吹き鳴らすと、民はイスラエルを追うのをやめて帰って来た。ヨアブが民を引き止めたからである。

ヨアブというのは、複雑な人物です。彼は、ダビデに猛烈な忠誠を持っている男でした。ダビデの益のため、またイスラエルの国益のためには、どんな犠牲も厭わない人物でした。しかし、彼はダビデの命令をこのようにいとも簡単に無視するような不従順な男でした。ダビデがアブシャロムを罰しないことは、ダビデのためにも、またイスラエルのためにもよくありません。正義は執行されなければいけないからです。そこで、ダビデはヨアブには口を出すことができません。けれども、彼の無慈悲と冷酷さはダビデの持っている柔和さとはあまりにもかけ離れていました。ずっと後に、ダビデの死後にヨアブがソロモンによって罰せられます。

ところでアブシャロムですが、彼は十人のダビデのそばめを凌辱しましたが、ここで十人のヨアブの道具持ちによって殺されています。自分の行ったことの報いを受けているのです。

18:17 人々はアブシャロムを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に非常に大きな石くれの山を積み上げた。イスラエルはみな、おのおの自分の天幕に逃げ帰っていた。

反逆者に対する見せしめとして、イスラエル人はこのように石を積み上げることをしました。

18:18 アブシャロムは存命中、王の谷に自分のために一本の柱を立てていた。「私の名を覚えてくれる息子が私にはいないから。」と考えていたからである。彼はその柱に自分の名をつけていた。それは、アブシャロムの記念碑と呼ばれた。今日もそうである。

王の谷は、キデロンの谷の南にあります。今、「アブシャロムの墓」と呼ばれているものがありま

すが、それは紀元後に立てられたもので本物ではありません。

彼は哀れな人です。自分がこれだけ派手なことを行なっているが、自分を覚えてくれる人はないだろうと思っていました。息子がいない、と言っていますが、彼には三人いたはず(15:27)。息子が早死にしてしまったのか、あるいは息子でさえ自分を覚えてはいてくれないだろう、と言っているのです。本当に可哀想な人です。

2B 息子の安否 19-33

18:19 ツアドクの子アヒマアツは言った。「私は王のところへ走って行って、主が敵の手から王を救って王のために正しいさばきをされたと知らせたいのですが。」18:20 ヨアブは彼に言った。「きょう、あなたは知らせるのではない。ほかの日に知らせなさい。きょうは、知らせないがよい。王子が死んだのだから。」18:21 ヨアブはクシュ人に言った。「行って、あなたの見たことを王に告げなさい。」クシュ人はヨアブに礼をして、走り去った。18:22 ツアドクの子アヒマアツは再びヨアブに言った。「どんなことがあっても、やはり私もクシュ人のあとを追って走って行きたいのです。」ヨアブは言った。「わが子よ。なぜ、あなたは走って行きたいのか。知らせに対して、何のほうびも得られないのに。」18:23 「しかしどんなことがあっても、走って行きたいのです。」ヨアブは「走って行きなさい。」と言った。アヒマアツは低地への道を走って行き、クシュ人を追い越した。

アヒマアツは、ついに主が王に救いを与えてくださったことを非常に喜んでいますが。こんな喜ばしい知らせを伝えない訳にはいけないと思いました。けれどもヨアブはよく知っています。アブシャロムが死んだのだから、これはダビデにとって悲報であることを知っていました。それで少し遅らせて知らせた方が良くと思いました。かつ、クシュ人という異邦人を遣わすことによって、伝達者がアブシャロムを殺したことについて嫌疑が問われ万一ダビデが死刑にしても害がないように、と思ったのでしょう。

ところがアヒマアツはどうしても伝えに行きたいと言っています。王子が死んだのだから、という意味合いがまだ分かっていない様子です。そして、アヒマアツは森から離れてヨルダン川の流れている溪谷のところを走っていきました。ギルアデは非常に高低の起伏の激しいところですから、低地を走ったほうが早いのです。

18:24 ダビデは二つの門の間にすわっていた。見張りが城壁の門の屋根に上り、目を上げて見ていると、ただひとりで走って来る男がいた。

当時の多くの城の門は、外門と内門の二つがありました。壁が二重になっていて、その間に部屋がありました。その上に屋根があつて、そこに見張り塔がありました。

18:25 見張りが王に大声で告げると、王は言った。「ただひとりなら、吉報だろう。」その者がしだ

いに近づいて来たとき、18:26 見張りは、もうひとりの男が走って来るのを見た。見張りは門衛に叫んで言った。「ひとりで走って来る男がいます。」すると王は言った。「それも吉報を持って来ているのだ。」18:27 見張りは言った。「先に走っているのは、どうやらツァドクの子アヒマアツのように見えます。」王は言った。「あれは良い男だ。良い知らせを持って来るだろう。」18:28 アヒマアツは大声で王に「ごきげんはいかがでしょうか。」と言って、地にひれ伏して、王に礼をした。彼は言った。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主は、王さまに手向かった者どもを、引き渡してくださいました。」18:29 王が、「若者アブシャロムは無事か。」と聞くと、アヒマアツは答えた。「ヨアブが王の家来のこのしもべを遣わすとき、私は、何か大騒ぎの起こるのを見ましたが、何があったのか知りません。」

王の関心事は戦いに勝つことではありませんでした。アブシャロムの安否だけでした。ところが、アヒマアツは早く伝えにきたのですが、その伝言には肝心の内容が欠けています。私たちがキリストを伝える時に、キリストをよく知って伝える必要がありますね。

18:30 王は言った。「わきへ退いて、そこに立っていなさい。」そこで彼はわきに退いて立っていた。18:31 するとクシュ人がはいて来て言った。「王さまにお知らせいたします。主は、きょう、あなたに立ち向かうすべての者の手から、あなたを救って、あなたのために正しいさばきをされました。」18:32 王はクシュ人に言った。「若者アブシャロムは無事か。」クシュ人は答えた。「王さまの敵、あなたに立ち向かって害を加えようとする者はすべて、あの若者のようになりますように。」18:33 すると王は身震いして、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。「わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。」

自分のしたことの過ち、また息子への愛が絡まって、ダビデがむせび泣いています。反逆の息子であっても、その罪を自分自身が負えばよかったのにと嘆いています。これが父の愛です。そして、父はキリストにあって、私たち反逆する者たちのために私たちの罪を負ってくださいました。

今回は、この悲しみから立ち上がるダビデから話が始まります。